

328  
2631



始



報德溯源

328

2634

328-263<sub>1</sub>



湖源

井口丑二著

大正  
8.10.9  
内交

緒言

予が報徳の研究は、明治三十九年に始まる。歲月、言ふに  
足らざるなり。然れども、其の研究の方法に至りて、殆ど涯  
分を盡したるを信ず。即ち専ら是が爲に、翁の遺跡を巡る  
こと二回、文庫に入ること數多度なりしも、翁の遺書全部  
を讀むの暇を得ず、蘊奧未だ究めざりしを以て、終に斷然  
意を決して、月給生活の羈絆を脱し、全く世事家務を絶ち、  
野州今市の文庫に籠るには至れり。年來の宿願茲に成就  
し、中心の愉快限りなし。さて朝に眼を萬卷の遺書に晒し、  
夕に志を七十年の昔に通はしむること約三月。晷昏神會  
する所あり。去ッて更に思を潜め、咀嚼玩味工夫鍛鍊する  
こと九旬。悉く翁自身の著書筆札に根據し、忠實に其の眞

意を察し、稍、學術的論理的に、之を編成組織して、  
一、報徳の原理  
二、報徳の仕法  
三、報徳の結社  
の三部門となし、仍つて「報徳溯源」と題す。此の書是なり。  
夫、繁特が愚も、機縁熟すれば、文珠の智慧を得。我、遅牛の  
遅くとも、終には淀に到らてや。とは、著者が此の業を起  
すに當りて、自ら鼓舞し、鞭撻せし所なりき。然るに時來り、  
到達して見れば、成果は豫期の半に満たず。慚愧失望に禁  
へざるなり。但翁の語にこれ有り、曰く「賢を以て愚を賛け、  
愚を以て賢を賛く」と。此の書若し誤つて賢者千一の参考  
ともなるあらば、予の本分足る。若夫更に僥倖にして、愚者

啓蒙の一助とならんか、此の愚擧、必ずしも愚ならずとや  
謂はまし。

明治四十三年二月

著者識

### 報徳溯源の復活に就いて

久しく絶版となりてありし報徳溯源の復活に際り、感懐を叙して同情者への謝意を表するは、蓋し相當の禮儀なるべし。

回顧すればは、や十餘年の昔になりぬ。明治四十年前後の頃、予一たび報徳の道に歸してより、數次相馬、今市に遊びて、二宮翁遺著の一部を窺ひたれど、その萬卷の全部を繙き、道の蘊奥を究むるを得ざるは、最も遺憾とする所なりき。然るに其の書、東京にこれなく、是非とも今市か相馬にゆくにあらざれば、見るを得ざるを以て、繁劇なる職務の餘暇に之を爲すことは不可能なり。さりとして彼の兩地の附近に、予の生業を求めんことは、尙更事情の許さざる所なりき。予是を以て歎息せしに、妻なるもの傍より之を聽きて、卒爾として謂つて曰く、「奚ぞ職務を抛つて彼地に赴かざる」と予苦笑して曰く、今貧衰の極度に在り、況んや近く母を哭して、資力は盡き、心志は飢ゑぬ、何に頼りてか、そを敢てするを得んといへば、妻は重ねて、「其の事なり、先年の失敗以

來下婢を廢し、衣食を節して餘し得たるもの、今や積りて斯くの如くなりぬ。以て數月を支ふるに足らんと、貯金通帖を出して之を示す。予其れに力を得て、乃ち月給生活を廢棄し、去つて今市の文庫に籠ること三月、日抄夜讀不休、不眠精思博搜研鑽の結果、終に此の著を成し得たること、原版緒言にある通りなり。然るに初版刊行の頃より世は所謂流行的報徳書類の不景氣時代に入り、且つ事情ありて出版者も廢業したれば、此の書は初生兒夭折の格にて、關より關へ葬られ、著者は釐毛の費用をも自ら償ふを得ざるのみならず、書名をだにも世に知られず、著者の苦心は、兎も角もあれ、出版者が營利以外斯道に對する篤志を以て、特に印刷し呉れたる好意も、一應水泡に歸し畢んぬ。されど世界に知音はありき。越えて四年、大正二年の春事を以て駿遠に遊び、始めて二宮翁四大弟子の一人、岡田良一郎大人に謁せしに、大人は談、此の書の事に及びて、特に推獎の意を述べられ、最後に「二宮翁も地下に於て、さぞ喜んで居られませう」と結ばれたり。此の時著者は、流石に冷汗背を濡ほし、穴にも入りたき心地して、慚愧の餘りに戰慄したり。其の後大人の令嗣良平

氏を訪ひしとき、氏は「君の報徳溯源には父も感服なし居たり、唯遠州報徳社の由來に、些少の遺漏あるの外、一點の申し分なしと評し居たり」とて、其の遺漏の點を指し示されぬ。既に翁直門の大家に依りて、斯く承認を得たることは、我ながら有難く、心竊に喜び居りけるに、好事は是に止まらず、大正四年都門を辭して、東濃の山に入りし後、大日本報徳社長即ち岡田良平氏の囑あり、同社訓導の研究會に於て、此の書の講義をなすこととなり、爾來大正七年までに、原理並に仕法の大意を講じ了りぬ。後輩を以て先輩に説く、釋迦に説法の非禮を寛假し、斯くも優遇せられたるは、直に身に餘る光榮にて、感謝に辭なきところなり。

然るに此の書は絶版のまゝにて、生命維持の手段なく、篤學の士は古書肆に就きて、僅に殘本廢紙を得るのみ、日に湮滅に歸するを悲しみ居しに、中央報徳會の講師村田君、深く斯導を崇信し、斯學の興隆を望まるとの餘、會内諸先輩を動かして、全く殊別の篤志を以て、復活刊行せらるゝこととなりぬ。實に是起死回生の大神、何の辭を以て之に謝し、何の途を以て之に酬いむ。

既に斯く、一たび復活されたる上は、もはや再び死することはあらず、蓋し或は斯道と共に、永久存在することを望む。其を思ひ之を憶へば、感慨無量胸臆に充ち、殆んど言ふべき所を知らず、唯此の書の來歴を叙して、同情諸先輩の盛意を謝するのみ。

大正八年夏

著者 井口丑二識

附記本文岡田氏の指教に基づき、遠州報徳社の由來を詳叙したるの外、多少の増訂を加へたり。

目次

卷首 二宮翁哲理諸圖

第一篇 報徳の原理

一 報徳教の位置

報徳教は哲學なり○宗教の定義○哲學の定義○應用哲學の位置の略圖  
○二元論○唯物論○唯心論○不可知的一元論○原子論○擬人神論○汎  
神論○倫理諸派の説明○位置の表

二 其の名稱

報徳の道○報徳君○報徳教○道徳經濟の學○研究門○應用門○音義の  
調和○數字可なり

三 萬物一元(本體論)

一は萬物の始○説文の説○一般思想○不二一物○無極の説○有無一物  
○太極大根○一圓混沌○二宮哲學條理整然○物理學上宇宙一元の證明

四 發生と進化(宇宙論)

一九



翁以前の宇宙論○日本の創世記○支那の創世記○易の太極○平凡なる  
出發點○非凡なる歸着點○印度の創世記○六根清淨の戒○觀音經○東  
洋哲學の二大弊○支那は文章の○印度は詩的○二宮哲學の分量○半ば  
獨創○體氣論○萬物發生の順序○神國の説○翁の進化論○神代史の解  
釋○進化論一○其の二○其の三○天照太神○ダーウインに先だつ二十  
五年○實驗的考察○西洋哲學に異ならず

五

無始無終不生不滅

今日の過去○今日の未來○天地の呼吸○天地の壽○生滅の真相

六

不増不減(精力保存)

翁と佛説○解釋を異にす○二宮一流○器中の水の譬諭○貸借無増減○  
讓奪の理

七

不止不轉(因果循環)

如是如是の文○生育老死○眞理は一○因果律と倫理○在る事な在りの  
儘○米蒔けげの道歌

八

壽命無量(靈魂不滅)

靈魂とは何○愚問題○停留場の電車○人格的と非人格的○生心と死心  
○壽は海水○體は桶器

九

天道と人道(物理と倫理)

開田の譬諭○試験紙○天道は無私○人道は有私○人ありて善惡あり○  
天道論と純正哲學

一〇 善惡の標準

儒は厭立のみ○佛は價を争ふのみ○報徳教は好味を饗す○善惡は便宜  
○孟子を排斥す○自利利他の道徳○天地を信ずるのみ○以天賛地○以  
善賛不善○萬物共賛○面白き一譬諭○十家一井○善人の非○悪人の非  
○忠信の弊

一一 片樂と眞樂

鼠猫の苦樂○弱肉強食○好意惡弊の説○世は修羅場○强者の義務○兩  
全の眞樂○齋藤高行の眞樂經○尊徳如來と吉良弗○天地の樂○草木の  
樂○人倫の樂○農夫の樂○聖人の樂○貧富の樂○眞樂菩薩○天理は輪  
鋸機○前途遠大○眞樂の歌

一二 孝は道徳の始

萬物共賛の順序○父母我を生む○孝は無我○三尊は父母と我○孝は敬  
天の始○報徳教道徳の極致

一三 食は經濟の始

..... 八八

經濟は道德の一部○食は此の身○徳は本財は末○燕の説○雁の説○漁人の説○原人時代○天下無財寶○増減貸借○貧富損益○貧富は友なり○貨幣の應用

一四 報徳訓及び其の沿革……………九五

三種の報徳訓○古詩的と律詩的○第一期は書名○報徳の原理○報徳の方法○萬物を貴重す○第二期九言報徳訓○粗製品○第三期現行報徳訓○精製品○其の分解と評釋○報徳訓解

一五 施受訓と勤惰訓……………一〇八

受財と施財○好樂と勤苦

一六 分讓訓……………一一一

分讓論○馬士と將軍○讓の論○無効の讓は捨なり○非理の受は奪なり○分讓は二大手段

一七 種々の教訓……………一二四

一去れば一減る○水鏡の説○二宮一流の考古學○同説文學○偏倚の戒○飽滿の戒○男女論○人倫の基○無益の戒○清淨を好むは不淨の者○貧富の循環○青蓮の譬喩○同哀同悦○自利利他安樂國○順序の教

一八 原理の道歌……………一二七

十一題十八首

一九 報徳教の根據……………一三一

根據は一元論○天理○人道○眞樂の淨土○一元神の祝詞

二〇 報徳教の神……………一三三

神人一物○世界神國○不動と痾病神○神佛の擁護○汎神論の神拜理由○理想の人格化○本地垂迹○禮拜は各自の任意○報徳教の三大特色

第二篇 報徳の仕法……………一三八

一 仕法の名稱……………一三八

御起法○報徳役所

二 仕法の由來……………一三八

翁の自叙傳○幼時の實験と日本建國の道理

三 仕法の調査(準備一)……………一四二

宇津家の系譜○相馬の歴史○始に終を盡す

四 分度の設定(準備二)……………一四四  
 分度無ければ仕法なし○仕法の本領○櫻町の分度調○相馬○日光○小田原○個人○其の一例○分度なき生計の危険

五 豫定計畫(準備三)……………一五一  
 二宮翁と長期計畫○櫻町の生産限度○耕作境界線○生産の方法○百發百中○困難と思ふは誤解

六 地區の選定(準備四)……………一五六  
 認定と入札○入札の一例

七 仕法の資金(準備五)……………一五九  
 獨立自助主義○櫻町の資金○翁の歳入○相馬の資金○其の成立○其の支出○第二年度○各藩の資金○日光の資金

八 報徳善種金の由來……………一七四  
 本家問題○詔鉢僧○亡靈の祟○二朱と五百七十文○萬餘の基金○獻身的積極的

九 仕法の獨立(實行一)……………一七五

一〇 仕法の諭告(實行二)……………一八六  
 櫻町の諭告文○灰塚の諭告書

一一 善行の奨勵(實行三)……………一九〇  
 風俗と政治○善行者入札○戊申詔書○時を譲るの賞○其の理由○受賞者の種類盡く○負債せざるの賞○其の一二例○最先の要務

一二 助貸救恤(實行四)……………一九四  
 弱者の救済○道を廣野に失ふ人○助貸の條件○借用證書の一例○助貸の目的○涓滴江河○救恤の條件○救恤の辭令

一三 勸儉の厲行(實行五)……………二〇〇  
 勸儉の規約書○人心の興起○二三の實例○代官の感涙○二宮は唯人に非ず○八十老吏の熱誠

一四 開墾整理(實行六)……………二〇八

土木工事の請の特技の黒紙より土木課長耕地整理の特色の信淵と獨逸の農學

一五 施行の心得(實行七).....二一〇

成文の施行規則

一六 仕法の効果.....二一七

一年増収六千俵の櫻町の統計の維新と仕法○相馬人士と報徳

一七 仕法雑事.....二二〇

保護干渉の願届を書面とす○其の令違○他村へ嫁入を禁ず○情民に嚴法○村民の反抗○村勢調査

一八 日光仕法雛形要領.....二二四

六十卷の仕法の通則○利倍計算○着手順序と經濟學○開墾計算○助貸及び冥加金計算○繩索計算○仕法の神髓

一九 利根分水路の事.....二三六

佐藤信淵と反對の盡し珍文

第三篇 報徳の結社.....二三九

目一 仕法と結社.....二三九

仕法と結社の差○其の比較○其の共通○結社の種類

二 結社の由來.....二四二

仕法の變態○下館以下○安居院兄弟○萬人講○現今各社

三 下館の報徳信友講.....二四四

報徳忠臣四十七士○連判の議定書○報徳金二十兩○犬馬にも愧づべしとの制裁○權兵衛の自信○貧窮の投票選定○英國の貧民法

四 遠州の舊報徳社.....二五〇

報徳社の三期○中村の連盟書○朝起の獎勵○神拜の約○孝行の約○休日に道路修繕○床しき美風○家政整理の一例○教訓的借用證書○道徳關係○權議の弊○湯仰神の如し

五 報徳金の定義.....二六七

古は混同○定義の區々○其の比較説明

六 結社の分派.....二六九

門人の解釋數派○本遠く末益分る○群雄割據

七 統一及び改良……………二七一

六 統一の方法○三階級○統一の勢力○改良の必要○積極的改良は未だし  
○古の仕法と今の報徳社○改良の方法○報徳銀行○報徳保險○報徳會  
相馬の興復社……………二七八

五 仕法の遺物○磐前縣の官營○民營興復社○北海道に新村建設○古仕法  
との比較○殖民地の特色……………二八二

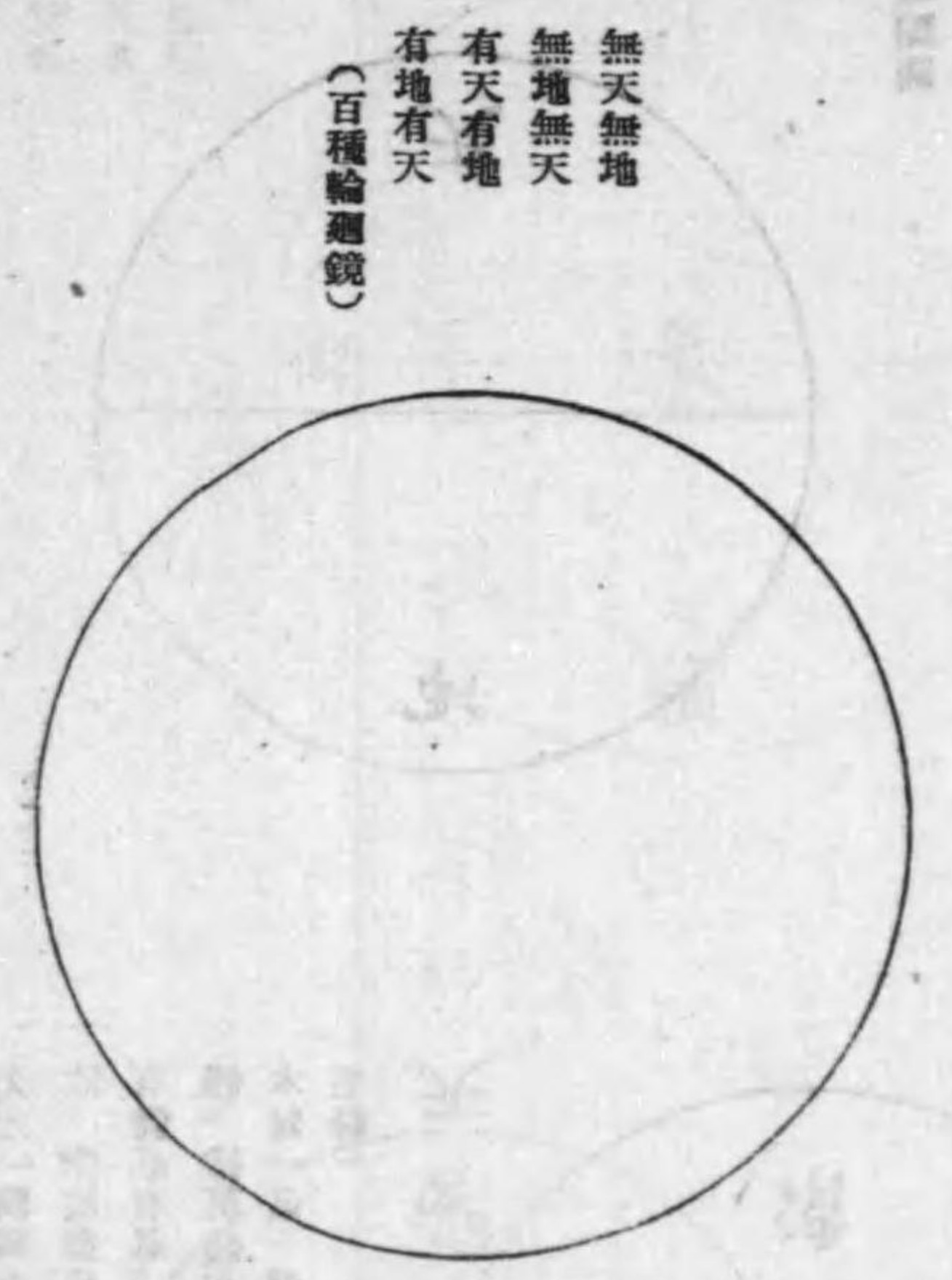
四 定款の一二例……………二八二  
興復社規則○報徳社定款準規……………二八二

三 不肖の將士……………二八二

二 古の仕法の由来……………二八二

目次終……………二八二

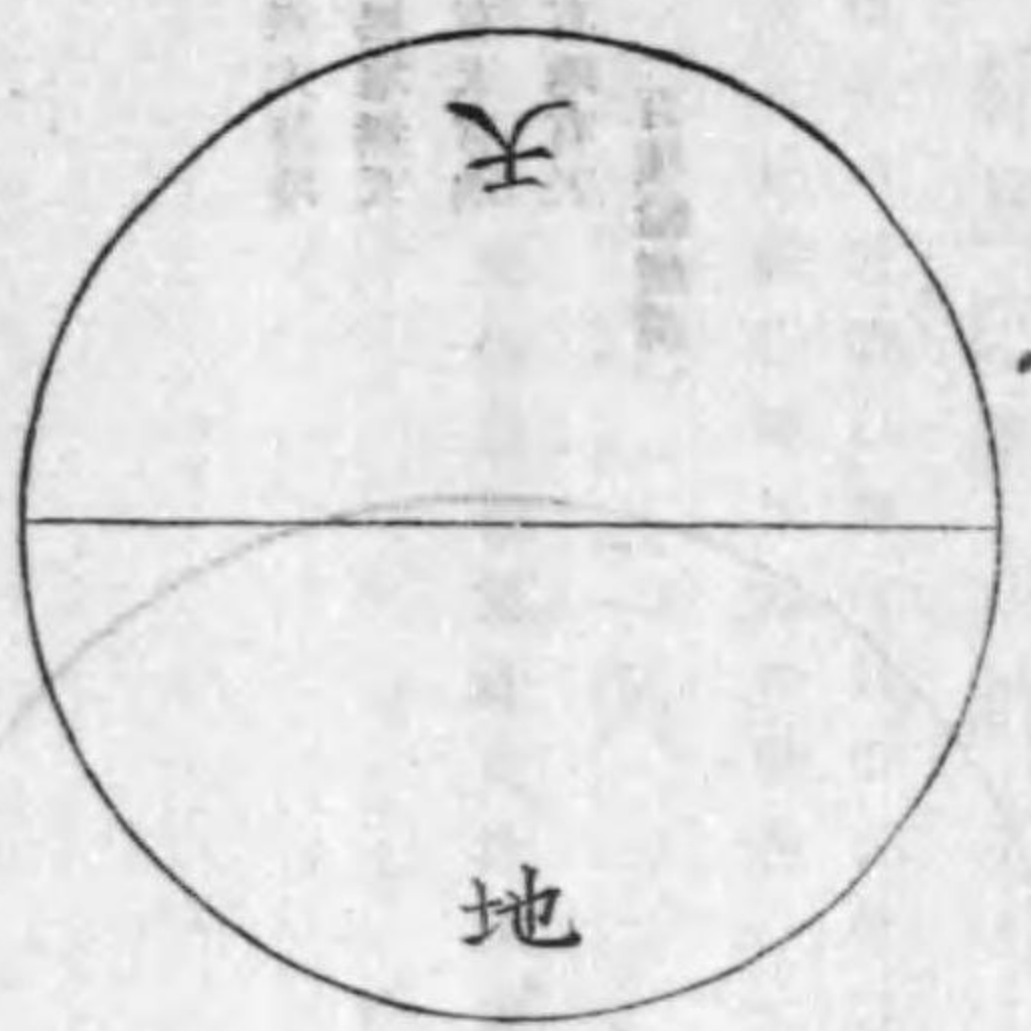
一元天地混沌之圖(第一圖)



太極之圖

萬物化生 莫不以  
太極爲元 傳曰、  
天地未剖、不分陰  
陽、混沌如雞子云  
(三才報徳金毛  
錄)

一元開闢天地之圖(第二圖)



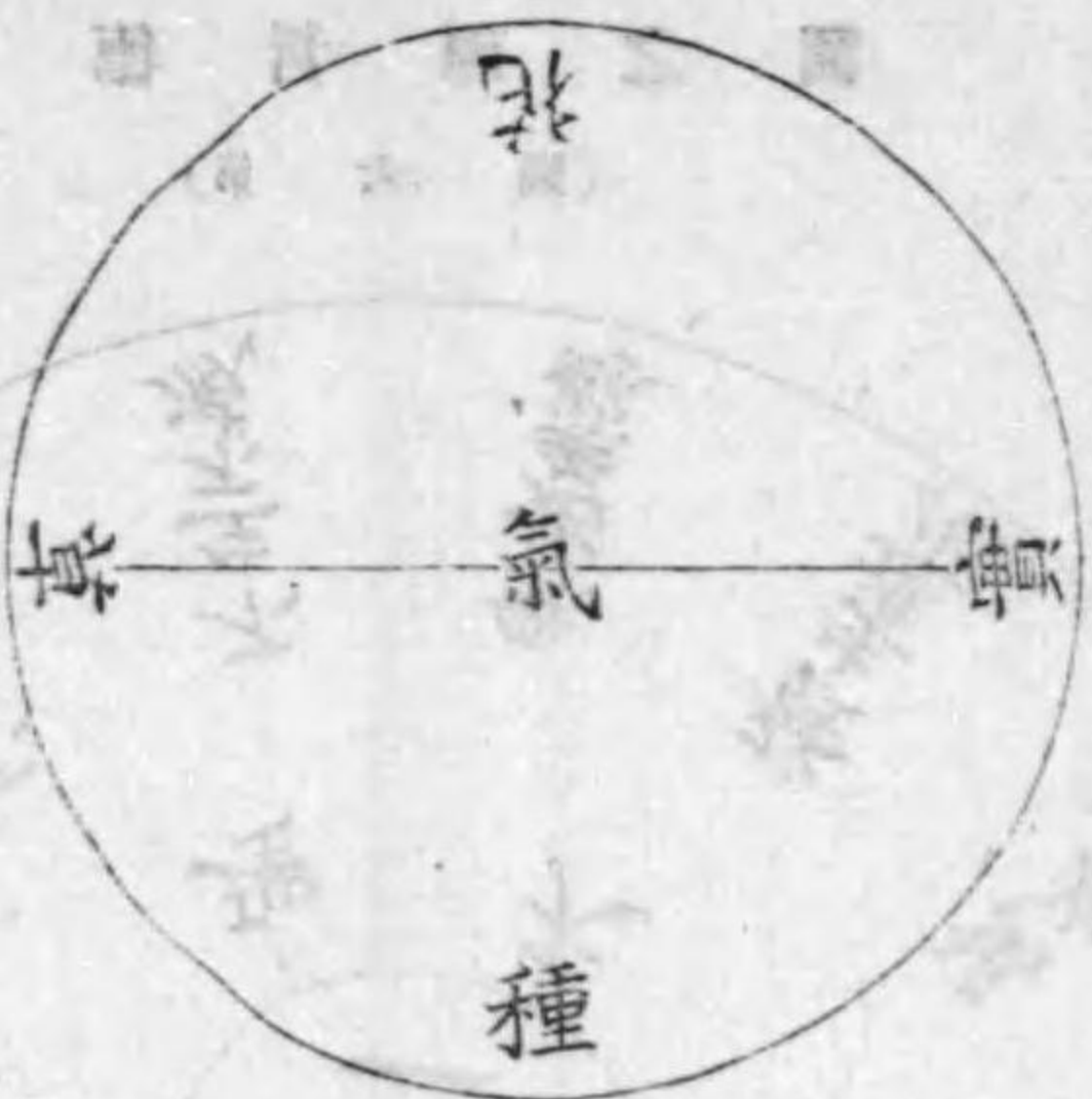
天地開闢  
清天濁地  
天地悟元  
不二物  
(輪迴鏡)

一元體氣之解(第三圖)



夫元一圓為混沌。混沌亦復為清濁。猶清濁者空  
液。空液動而自然剖清濁。成清濁二物則有體焉。  
有體必有氣。悟體氣之本歸混沌。混沌變化為萬  
體。推萬體本歸一體。一體變化為萬氣。想萬氣  
本歸一氣。體氣本來無增減。此謂天理自然矣(金  
毛錄)

種草花實不止之圖(第四圖)



種含生氣  
草含花氣  
花含實氣  
實含種氣  
(輪迴鏡)

天命生死來往之圖(第五圖)



生者不生、死者不死。  
陰陽來往、不止也焉。  
佛曰之有無矣。

(金毛錄)

# 報德溯源

井口丑二著

## 第一篇 報德の原理

### 一 報德教の位置

報德教は  
哲學なり  
宗教の定  
義

報德教は宗教に非ず。哲學なり。抑、宗教とは何ぞや。哲學とは何ぞや。何れも未だ完全一定なる定義あらずと雖も、泰西に於ける普通の意義に従へば、宗教は各種の種族國民若くは社會に供用せらるゝ神拜の儀式なり。而して其の種族國民若くは社會の各員が、普通に有する信仰に基礎すといひ、マクス・ミュラーは宗教を分ちて、自然の宗教、論理の宗教の二大類とし、例へば日本の神道を第一類中の無組織の部に入れ、支那の儒教、道教及び佛教、基督教等を第二類に屬せり。以て宗教なるもの、大體を推知すべし。又哲學は原理の學なり。萬有の本質、形態、關係等の原理を考察、研究する學問なり。故に科學の



哲學の定  
義

報德哲學之圖

(第六圖)



(案考者著)

科學といへり。而して狹義に於ては、單に形而上學を指し、廣義の時には之に論理學、倫理學及び心理學を加ふるを普通とし、尙或は宗教哲學、法律哲學、經濟哲學などと形容詞を加へて、或特殊の哲學を指呼することあり。更に哲學と宗教との差異を擧ぐれば、宗教は造るに非ず、生ずるを主とし、即ち種族社會等集合精神の上に發生すること多けれども、哲學は生ずるに非ずして造るなり。必ず發明創造者あるを要す。宗教は情に屬して信仰の上に立ち、哲學は智に屬して判斷に訴ふる等を著明なるものとす。

今報德教は如何と觀るに、種族國民若くば社會の受用には供すれども、斷じて神拜の儀式に非ず。祭葬祈禱等に關して全く規定する所なし。故に、宗教にあらざるなり。而して萬有の本質、形體、關係等の原理を考察研究するに勉む。故に報德教は哲學なり。又報德教は生じたるに非ず。造れるなり。二宮尊徳の發明せるなり。故に二宮哲學なり。又報德教は信仰に依らず判斷に訴へ、情に屬せず智に屬せり。故に宗教にあらずして哲學たるなり。然るに純正哲學は、單に原理を考察するのみ、全く實用に關せざるに、報德教は寧ろ之に反し

應用哲學

て、其の考察研究の結果を以て之を人事に應用し、倫理道德政治經濟等人間行爲の規範とす。故に應用哲學なり。原理を形而上學に根據して、應用を倫理學に屬する。體用兩全の一教義なりとす。

位置の略

左に略圖を掲げて、報德教の位置を明にす。但し其の何派に屬し、某論に屬するは、唯其の主として近似したるものを取れるのみ。故に例へば倫理學に於て兼愛功利説に屬したればとて、徹頭徹尾此の説に符合すといふ意味にあらず。又他の諸説と全く類似關係なしといふにもあらず。此の點讀者の誤解なからんを望む。猶本篇各章の記述を以て、之を泰西の哲學倫理書類と比較参照されなば、蓋し一層の趣味を看出さるゝならん。



一 般 哲 學



二元論  
唯心論  
唯物論  
不可知的  
一元論

原子論  
擬人神論  
汎神論

報德教の位置は右にて一目瞭然となりたるべきを信ずれども、猶念の爲に圖中各派の學說を略解せんに、先づ形而上學本體論に於て、二元論は萬有を物心二元より出づとなすなり。唯心論は萬有は唯物の一元のみ、心即ち精神靈魂は物より發生する一作用となし、唯心論は之に正反對にして、實在は唯心のみ、心無ければ物なく、物は假の現象のみとなすなり。不可知的一元論は是等すべてに反して、萬有は二元なり。然れども其の一元は物に非ず、心に非ず、名も無ければ、象も無し、所謂不可知の一元なりといふなり。而して二宮翁の說は、後に詳述する所の如く、正しく此の最後のものに屬せり。次に宇宙論、即ち宇宙の組織關係を論ずる部に於て、原子論は無量數の原子、偶然的に結合して森羅萬象を現出すといひ、擬人神論又の名超絶神論は、宇宙以外に神在りて、任意に萬物を創造すとなし、之に反して汎神論、又の名宇宙靈魂論は、神は宇宙以外に在らずして、宇宙の内に在り、窮竟するに、宇宙即ち神なりといふなり。而して二宮翁の說は、正しく此の最後のものに屬せり。

神命論

天賦良心

説

自利説

利他説

兼愛功利

自我實現

次に倫理學に於て、神命説は讀んで字の如く、道德を神の命令に託するものにて、多くの宗教道德は即ち是なり。天賦良心説は亦讀んで字の如く、人性の本然は善なりといふにて、東洋にては孟子の性善論の類是なり。自利説は人間行爲の根本は自利自愛なり。利他愛は自利自愛の爲に、之を擴張したるものに過ぎずとなし、利他説は全く之に反して、人性の根本的不動の能力は利他なり。利己は外界に接して生ずる動的一能力にして、利他の能力能く之を制御すと説く。畢竟自利は性惡説の、利他は性善説の、何れも變態たるに過ぎざるなり。是に於てか自他兼愛の功利説は起れり。此の説亦數分派ありと雖も、要するに人生の目的は、自他共同の幸福安全を増進するに在り。即ち最大多數の最大幸福を圖るに在りとなすなり。然るに此の功利説はダーウインの進化論に融化せられて、スペンサー等の自然派となり、稍、唯物に傾きければ、之に對してグリーン等の絶對的唯心論に立てる、自我實現説、即ち宇宙は精神的合理的の活動なり。人は此の中の一部なれば、各其の個性を發展せしめ、各其の特長を發揮して、此の活動に伴ふべしといふの説は起り、最近

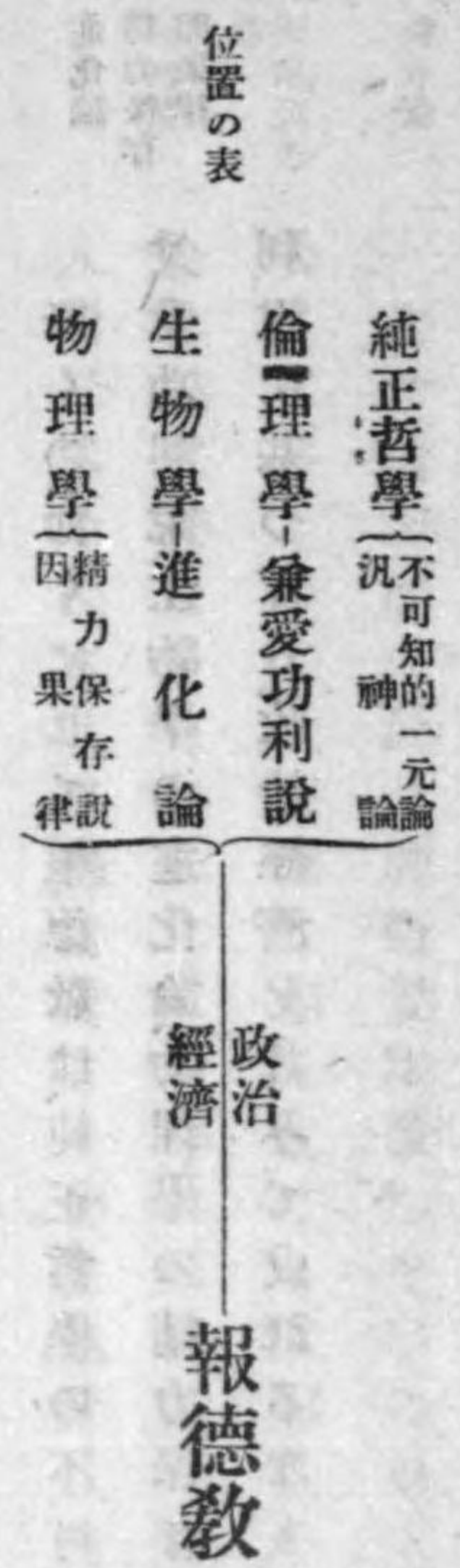
人格的唯心論

更に之に對して人格的唯心論なる者發生し、各國に傳播しつつあり。而して二宮翁の倫理觀は、正しく兼愛功利説に屬し、就中最もヒュームに類せり。但し翁の思想言論は、頗る濶大幽遠なるが故に、單に唯心論ならざることをの外は、自我實現説とも略ぼ一致し得べく、其の他毫も固有の基礎根本を動かすことなくして、如何にも功利説の缺點を補ひ、如何にも完全圓滿に解釋組織するを得べしとす。

心理學、論理學に就いては翁の説、關涉する所あらず。其の他は生物學の進化論を混じ、物理學の大原則たる精力保存説、因果律を多く含めり。精力保存説、因果律等は、概ね佛説より來れるが如きも、進化論的論旨は、實に翁が獨創の見なり。

斯くの如くにして報德教は、純正哲學の不可知的一元論、汎神論、倫理學の兼愛功利説、生物學の進化論、物理學の精力保存説、因果律等を湊合し、更に功利説に基づける、政治經濟を含みて成れるなり。左に再び之を表示す。

進化論  
精力保存  
因果律



二 其の名稱

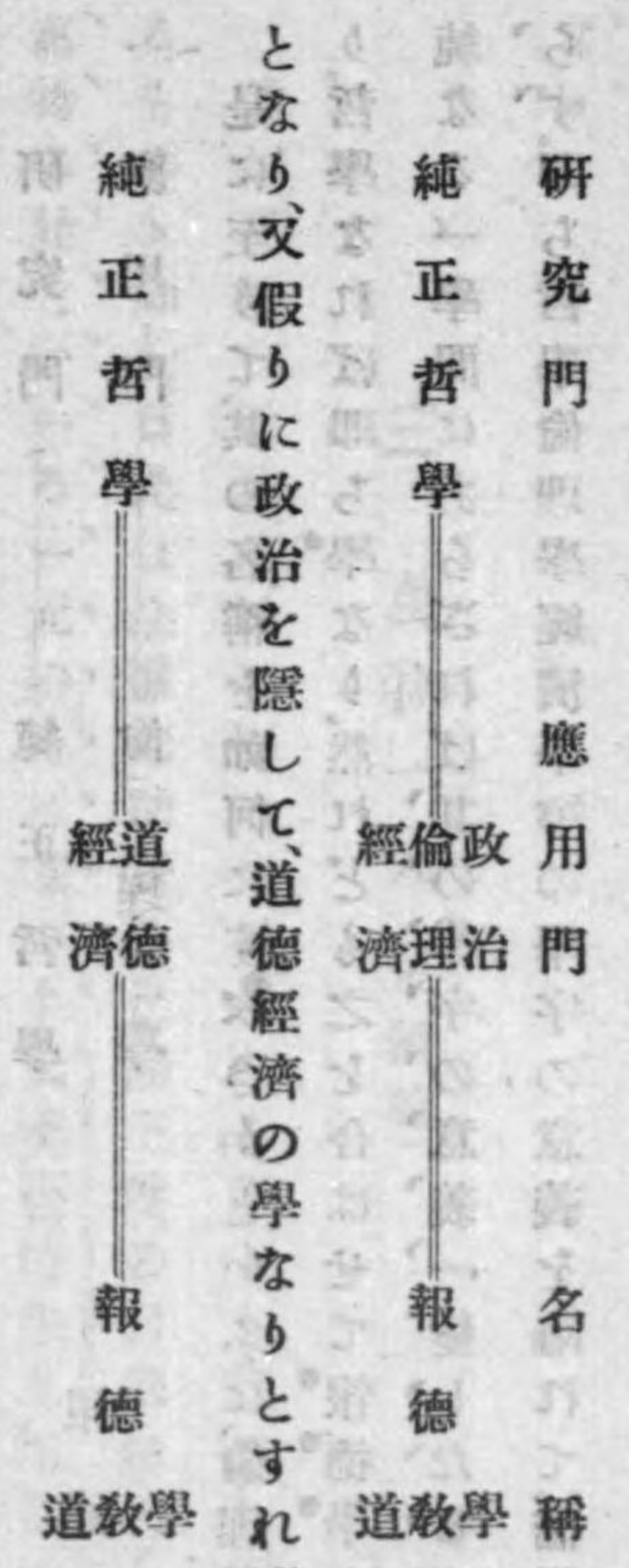
報德教の性質位置に就いては、前章鄙見を開陳したるが、茲に其の名稱をば、如何にすべきかと考ふるに、二宮翁自身は常に「我が道」或は「我が法」と稱し、小田原藩廳の或公文には「報德の道」と稱し、小田又藏の「報德學本教」には、先づ書名其のものに學と教との二文字を含み、更に附録紀事に至りて「凡そ其の説たる教十萬言、近く稼穡生植の事を引き、以て人を論ず、毫髮も違はず、命じて報德の教といふ、教行はるゝの日、父老復先生を名いはず、呼んで報德君といふ、從ひて教を奉ずる者、市に歸するが如し」と記せり。降りて相馬興復社

報德の道

報德君

報德學  
報德教  
道徳經濟  
の學

の規則には、報德學とし、福住正兄は報德教とし、又道徳經濟の學なりと稱し、遠州報德社は道徳學なりと規定せり。名稱の歴史變遷は右の如くなるが、茲に再び其の實質に就いて吟味せんに、報德教の實質は、哲學の應用なり。而して之を研究門と應用門とに分てば、研究門は純正哲學にして、應用門は倫理學、但し政治と經濟とを含みたる倫理學なり。即ち



となり、又假りに政治を隠して、道徳經濟の學なりとすれば

となるなり。抑、報德教は、初め政治學、興國安民の政策なりしこと、猶、儒教が、初め治國平天下の政治學なりしが、如し。然れども、其の現今の意味の政治學にあらざること、二教共に相同じ。されば此の政治の部分は、之を倫理に吸收せ

しむるも不可なし、經濟も亦組織的經濟學にあらず、政治の一部として存在せしものなれば、是も倫理に吸収せしめて可なり、斯くすれば即ち左の如きものとなる。

研究門 ———— 純正哲學  
——— 報德學  
應用門 ———— 倫理學  
——— 道教學

和音義の調  
音義の調  
和音義の調

是に至りて、其の名稱を如何にすべきかといふに、倫理學なれば即ち學なり、哲學なれば即ち學なり、然れども之を合はせて報德學といふとき、最早單純なる一學問にあらざれば、其の學字の意義、一變したるものと見ざるべからず、即ち哲學倫理學經濟學等の學字の意義を離れて、儒學佛學等の學字と同意義となりたるなり、此の意義にて報德學と稱ふること不可なし、然るに世俗報德教と呼び習はすもの多し、是香義共に調和を得て頗る可なり、或は教と呼ばば宗教に混せんことを虞るものあれども、報德教は既に一たび宗教に列したる歴史もあり、又遠州の舊報德社にては、其の議定書に毎朝神拜の事を約束し、現今の各社亦集會に神拜を行ふの規定ある位なれば、之を宗

教字可なり  
教字可なり

教的に信奉する者ありても故障あるべからず、又宗教にあらざればとて、日本に於ける儒教宗教にあらずの例に依つて、報德教と呼ぶを妨げじ、或は報德道といはんも、儒道神道の例に依れば不可なしと雖も、何とやら音調熟せざるが如し、則ち報德學といひ、教といひ、道といふ、其の呼ぶ者の所好に任せて可なりと雖も、音調意義共に協熟せる點より、我は教字を取らんずる者なり。

### 三 萬物一元 (本體論)

翁が萬物一元論は、始め極めて卑近なる所より着想し、漸次高遠に及びたるもの、如し、日光仕法雛形助貸法己陽三卷の目錄に曰く「世俗の諺に、一は萬物の始といへる、一元の一に基づき、云々、當時果して斯くの如き俗諺ありしや否やを知らずと雖も、説文にも「一は惟れ初なり、太始道一に立つ、天地を造り分ち萬物を化成す」とあり、列子に太易あり、易に大極あり、我が國史にも天地一元の説あり、何れも次章に出だす、要するに萬物一元の觀念は、東洋古

一は萬物の始  
説文の説

一般思想

代よりの一般思想なりしなるべし。されば此の論の大體は、固より翁が發明にあらざりしや論なしと雖も、然も翁は亦自ら獨立的に考察し、自ら一家の言を以て、之を解釋敷衍すること懇到なり。即ち翁が原理的著書は、何れも多少一元論に及ばざるは無きが中にも、萬物一圓鏡、二體三行錄、百種輪廻鏡、萬物發言集等には、特に之を詳述したり。先づ萬物一圓鏡の中に曰く、以下漢文は概ね之を邦譯し、其の他は或は原文を存し、或は要旨を抄録す。

『大元究竟不二一物』

混無ければ沌無し。沌有れば混有り。混沌究竟不二一物。

不二一物

方名究竟不二一物

東無ければ西無し。西有れば東有り。東西究竟不二一物。

不二一物

人倫究竟不二一物

神無ければ人無し。人有れば神有り。神人究竟不二一物。即ち森羅萬象は勿論、有形無形神人一切、二にあらざして一物なりと謂ふなり。更に一體三行錄に至りて、之を詳解して曰く、

無極の説

『聞察の及ばざる所、之を名づけて無極といふ。聞察の及ぶ所、之を名づけて一元といふ。空風火水地是なり。一元有れば十方有り。東西南北天地乾坤巽艮是なり。一元無ければ十方無し。十方無ければ一元無し。一元有れば十方有り。十方有れば一元有り。東方無ければ西方無し。西方有れば東方有り。中略。仰天無ければ臥地無し。臥地無ければ仰天無し。仰天有れば臥地有り。臥地有れば仰天有り。』

又曰く

『我が體有れば我が空有り。我が體無ければ我が空無し。我が體有れば我が風有り。我が體無ければ我が風無し。云々』

曰く「聞察の及ばざる所、之を名づけて無極といふ。一元の上に、更に一元を立てたる様なれども、究竟すれば依然たる一元論、即ち無極を以て一元となすなり。知らず所謂無極とは何ものぞ。曰く「聞察の及ばざる所なり。名の以て命ずべきなし」と。故に不可知的一元論なり。我が體有れば我が空有り云々の如きは、亦髣髴として、唯心論の臭味を感せざるにあらずと雖も、後に引證

する所、其の他全體を綜合して、結局翁の本體論は、最も明白なる不可知的一元論たるを見るなり。

有無二物

『萬物發言集』の中には則ち曰く、『有相を悟りて、而して後無相を悟るべし。本來有無一物なり。生を悟りて而して後死を悟るべし。本來生死一物なり。』

固より絶對的一元なれば、有形無形生死の差別無きなり。又曰く

大極大根

『一元位を爲すを大極といふ。其の位を去れば一元に歸るものなり。大極の内二名有り。陰陽といふ。其の二名を去れば大極に歸るものなり。大極の内二物有り。清濁といふ。其の二名を去れば大極に歸るものなり。大根の内五品有り。名づけて空風火水地といふ。其の五品を去れば大極に歸るものなり。』

本來東西無し。名づけて東西といふ。其の名を去れば大極となる。』

或未定稿の中に曰く

『混沌之部

夫元一圓一元也

一元清濁爲天地

未得天命無體氣

得天命自然受體

受體者自然發氣

得天命而至萬世

體氣不能無遍滿

此謂天理自然也

夫元一圓一元也

一元變動爲體氣

體氣悟元歸一元

一體變化爲萬氣

萬氣悟元歸一體

一氣變化爲萬體

萬體悟元歸一氣

此謂天理自然也

夫元一圓體氣也

無身體則無心氣

無心氣則無身體

有身體則有心氣

有心氣則有身體

受命而後至萬世

不能無身體心氣

此謂天理自然也

心之部

夫元一圓混沌也

天地未開無人體

一圓混沌

天地開而人體生

有人體則人心生

有人心則發喜怒

天地開而至萬世

有人體人心喜怒

此謂天理自然也

夫元一圓一心也

一心變化爲喜怒

喜怒悟元歸一心

一喜轉變爲萬怒

萬怒悟元歸一喜

一怒轉變爲萬喜

萬喜悟元歸一怒

此謂天理自然也

亦以て翁が一元論の眞意を見るべし。更に報徳金毛録に至りて之を説くこと反復丁寧を極む。即ち開卷第一に「太極之圖」を掲げ、次に「一元之論圖」次に「一元體之論圖」次に「一元氣之論圖」等を挙げたるが、今略ぼ之を説明せんに、先づ「一元之論圖」に於ては圓圖に五行方角を配置し、解して曰く

「火無きにあらず、火有るにあらず、火有るにあらず、火無きにあらず、水無きにあらず、水有るにあらず、水有るにあらず、水無きにあらず、云々」風地亦同様の文を列す。

即ち要するに、一元は物有るにあらず、物無きにあらず、不可知的なりといふなり。次に「一元體之論圖」は、圓圖に清濁體氣、五行、四方、内外等を配置して、同じく「清無きにあらず、清有るにあらず、濁無きにあらず、濁有るにあらず」等の文を列し、又「一元氣之論圖」に於ては、圓圖に陰陽、寒暑等を配置し、同じく陰陽寒暑等も有るにあらず、無きにあらず、との玄旨を説く。而して更に太極を解して曰く

「夫れ本一圓太極なり。太極既に一元たり。其の體を推し量るに、不空にあらず、不無空にあらず。不有體にあらず、不無體にあらず。不有氣にあらず、不無氣にあらず。人力觀察の及ばざる所、唯一を一と號し、元を元と號するのみ。之を太極といふ」

と、其の何處までも不可知的一元論たるを證し得べし。以上報徳哲學の一元論の大要なり。引證の各條を通讀して、何人も翁が不可知的一元論者たることを認知すべきが、抑、此の引證は、著者が先づ見解を豫定して、後に採用したるに非ず。先づ多量の材料を集めて、之を分類統合し、

後に始めて見解を定めたること勿論なり。即ち首章に掲げし「報德教の位置圖は最初に作りたるものにあらず、最終に作りたるものなれば其の見解の當否は姑く措き、引證の取捨には私意を挟まず。又挾むべき必要もなく、最も公平に處理したること、敢て茲に告白して讀者の承認を請ふ所なり。實に二宮翁の哲學は、徹頭徹尾條理ありて、予輩後生が其の分類整理をなすに、殆ど注文に由つて豫備せられたるかの如く、明快的確に出來居るなり。

因に言ふ、此の書の著者亦其の自身の一哲學を有せるが、復不可知的一元論にして、其の大體を同じうせりと雖も、稍、解釋の形式を異にせり。故に此の書の編述に際しては、謹んで述べて作らずの主義を守り、敢て私意を以て敷衍せず、翁が言語の意味する範圍に限りて之を解釋せり。是當然の事ながら序に茲に斷り置く。

猶一事の附記すべきものあり。最近科學の進歩に依りて、物理學上宇宙の一元なることを證明せられたることは是なり。即ち學者は各種の元素が、各特殊の光を有することを知り、是に依りて日月星辰の光線を分析して、其の含

有する元素を検出し、之を地球の有する諸元素に比較したるに、地球に無くして太陽にのみ有るもの、ヘリウムと稱する一元素ありしが、近年之を那威瑞典地方の鑛石中に發見したれば、今や地球と太陽とは、絶對的に同一元素より成れることを確められたり。其の他望遠鏡力の達する、千萬無量の星辰中に、地球にこれ無き元素を含有するもの二三あれども、是畢竟するに地球内に於ける、搜索の未だ足らざる爲なるべく、やがて發見せらるゝなるべし。之に限らず今の學者は、其の周密なる實驗に依つて、古人の理想若くば空想を、實にしつゝあるなり。亦同時に破壊しつゝもあるなり。

#### 四 發生と進化（宇宙論）

本體論と宇宙論とは、唯體用の差あるのみなり。故に本章と前章とは、互に相關係連絡して、截然之を區別すること難し。例へば萬物一元といへば本體論にして、一元萬化といへば則ち宇宙論となり、又本體論としての一元論は必然の理數として、宇宙論に於て汎神論となるが如し。されば前章と本章と



は必ず通じて讀まれんを乞ふ  
さて報徳哲學の宇宙論は、前にもいへる如く汎神論なるが、今其の詳細を  
紹介するに先だち、二宮翁以前東洋に於ける、宇宙論創世記の二三を觀察し  
以て比較参照に便せんとす。

翁は嘗て『我が道は神道五分、儒佛五分より成れり』といへるが、翁の所謂神  
道は、世人の所謂神道とは異なれりと雖も、大體に於て宇宙創始天地開闢の  
觀念を、國史に基づけたるは事實なりしが如し。即ち國史の創世記は、書紀神  
代卷の冒頭に曰く

『古天地未だ割れず、陰陽分れざるとき、渾沌たること雞子の如し、溟滓りて  
牙のきざしを含めり、其の清陽なるもの薄靡て天となり、重く濁れるもの  
は淹滯て地となるに及び、精妙の合へるは搏ぎ易く、重濁の凝りたるはか  
たまり難きが故に、天先づ成りて地、後に定まる。然る後、神聖其の中に生ず。  
故に曰く、開闢の初洲壤浮漂、譬へば游魚の水上に浮べるが如し、時に天地  
の中に一物を生ず。狀葦牙の如し、便ち化して神となる。國常立尊と號す。云

々々

是我が國民の創世觀なり。次に、我が國に傳來したる根本思想なりや否や  
は議論の存する所なれば姑く之を別問題とし、支那に於て頗る早く此の思  
想を發表したるは、戰國初期の人なりしと稱する列御寇、即ち列子の言に、

『太易あり、太初あり、太始あり、太素あり、太易は未だ氣を見はさざるなり、太  
初は氣の始なり、太始は形の始なり、太素は質の始なり、氣形質具はりて未  
だ相離れず、故に渾淪といふ。渾淪とは萬物相渾淪して未だ相離れざるな  
り、之を視れども見えず、之を聽けども聞こえず、之に循ふに得ず、故に易と  
いふ、易に形無し、易變じて一となる。一變じて七となる。七變じて九となる  
九は究なり、乃ち復變じて一と爲る。一は形變の始なり、清輕なるもの上ッ  
て天となり、濁重なるもの下ッて地となる。沖和氣なるもの人となる。故に  
天地精を含んで、萬物化生す。云々』

とあるものは是なり。是老子に基づき、擴充敷衍したるものにて、後世宋儒が述  
作したる太極圖説の粉本と見るべく、以て支那人の宇宙觀を代表したるも

の謂ふを得べきが如し、易の繫辭傳に曰く「易に太極有り。太極是に兩儀を生ず。兩儀四象を生ず。四象八卦を生ず」と。邵雍之を釋して曰く「二分れて二となる。二分れて四となる。四分れて八となる」と。周敦頤依つて太極圖說を造りて、無極を以て太極となす。朱熹之に紹いで曰く「易に太極あり。是に兩儀を生ず。太極は道なり。兩儀は陰陽なり。陰陽は一道なり。太極は無極なり。萬物の生ずる陰を負ひて陽を抱く。太極あらざるなし。兩儀あらざるなし」と。又周易五贊の原象に曰く「太一肇めて判れ、陰降り、陽昇る。陽は一にして以て施し、陰は兩にして承く」と。或は曰く「始め太易よりす。五重運轉して乃ち太極に至る太極兩儀を生ず。云々」

即ち前掲書紀神代卷より、列子、易傳、諸說に至り、疎密詳略の差こそはあれ、其の思想の根本主義が脈々として貫流したるを見る。要するに是和漢の普通の宇宙觀にして、而して其の性質が擬人的神造論に非ず。乃至原子論にもあらず、純然たる汎神論なる事は一見明瞭なるべし。思ふに二宮翁は此の和漢人の普通の觀念より出發したり。斯く出發點は平凡なる普通の觀念に在

りたり。然らば歸着も亦同様平凡普通なりしかといふに、決して否らず。若し其の歸着が普通なりしならば、翁の哲學は他の儒學者流、國學家者流の哲學と同じく、唯古人の糟粕を嘗むるに過ぎざるのみ。特に二宮の名を冠するに當らざるなり。然るに翁は然く平凡にして終らざりき。出發點と材料とは之を平凡に取りしと雖も、之に非凡の考案を加へて、非凡の歸着點に到達したり。是翁が千萬人の日本の學者に卓越して、獨り哲學者の名を擅にし得べき所以なり。以下猶平凡なる材料一二を掲げて、翁が考察の道行を見ん。

翁が見聞の範圍に於て、最も廣大なる宇宙論は、佛の創世記是なり。著者又初め翁が宇宙論も、是に基づきたるにはあらずやと疑ひたる程なりしが、再查の後、大に異なる所あるを確めたり。佛の宇宙論は俱舍論にこれ有り。其の構想の壯麗なる、蓋し一場の偉觀なり。即ち其の説に曰く「宇宙に成往壞空の四期あり。一期各二十中劫、都合八十中劫を以て一回の循環をなす。成は宇宙の成立期にして成劫と稱し、住は其の住留期にして住劫と稱し、壞は其の破壊期にして壞劫と稱し、空は其の寂滅期にして空劫と稱す。而して其の一た

ひ成立繁榮したる宇宙は、諸佛願力の所感に由りて破壊せられ、寂滅爲樂二十中劫なり。然るに衆生惑業の所感増上力に由りて、空中漸く微風を生じ、風漸く増益して、風輪、水輪、金輪等循環して、始めて大梵王宮乃至夜摩宮を成立し、後復風、水、金輪を起す。之を外器世間成立すといふ。さて初め一有情あり、光淨を極めて歿し、大梵所に生じて大梵王となる。後諸の有情亦彼に従つて歿し、梵輔を生じ、梵衆を生じ、他化自在天宮を生じ、漸々下りて乃至人趣云々を生じ、後餓鬼を生じ、傍ら地獄を生ず。此の間二十中劫云々、是所謂成劫なり。其の風となり、水となり、金輪となり、光明となり、梵宮となり、人趣となり、地獄、餓鬼となる。幻燈の如く、蜃氣樓の如く、虹霓の如く、極光の如し。豈亦詩的美術的ならずや、次には夢に歌劇を観るが如き、現世創世記來る。

「劫初如色天」

後漸増貪味

由墮貯賊起

爲防雇守田

論に曰く、劫初時人皆色界の如し。故に經説に契ふ。劫初時人色意あり。肢體を成す。諸根圓滿にして形色缺くる無く、端嚴にして身光明を帶ぶ。空に騰

ること自在にして、喜樂を飲食とし長壽久住す。是の如きの類ありて、地味漸く生ず。其の味甘美、其の香鬱馥なり。時に一人あり、稟性味に耽る。香を嗅いで愛を起し、取つて嘗め、便ち食す。餘人随つて學び、競ひ取つて之を食ふ。斯く飲食を資るが故に、身漸く堅く重く、光明隱歿して黒闇便ち生ず。日月衆星是より出現す。漸く味に耽るに由つて、地味便ち隱る。是より復地皮餅なるもの生ずるあり。競ひ耽つて之を食ふ。地餅復隱る。爾時復林藤の出現するあり。競ひ耽つて之を食ふ。故に林藤復隱る。耕種せずして香稻の自ら生ずるあり。衆共に之を取り、以て所食に充つ。此の食能なるが故に、殘穢身に在り、獨除を欲するが爲に、便ち二道を生ず。是に因つて遂に男女根の生ずるあり。二根の異なるに由つて、形相亦異なり。宿習力の故に、便ち相瞻視す。是に因つて遂に非理の作意を生じ、鬼魅を貪らんと欲して、身心を惑亂し、失意猖狂行ひ梵行にあらず。人中の欲鬼初めて此の時に發す。其の時、諸人食することの早晩に随ひ、随つて香稻を取り、貯積する所無し。後時、人あり、稟性懶惰、長く香稻を取つて、貯へて後食に擬す。餘人随つて學ぶこと漸

く多し。停貯是よりす。各貪情を縦にし、多く收めて厭くことなし。故に隨つて收むる所、復再び生ずることなし。遂に共に田を分ち、遠く盡くるを防がんと慮る。己が分田に於て收穫の心を生じ、他の分田に於て侵奪を懷ふあり。劫盜の生起此の時に始まる。遮防を欲するが爲に、共に聚まつて詳議し衆内一有徳人を詮量して、各收むる所の六分の一を以て雇うて防護せしむ。封じて田主となす。是に因つての故に刹帝利の名を立て、大衆欽承し、恩率土に流る。故に復大三末多王と名づく。自後の諸王、此の王を首となす。云々

三分の理想、七分の空想、其の奇術的なる所に、寧ろ趣味あり。而して二宮翁は此の趣味を攝取せしかといふに、蓋し其の原始社會考察の、一参考とはなし。なるべし。

六根清淨の祓

其の契合の少からざるを知らるゝなり。六根清淨の祓は、所謂兩部神道の所産にして、蓋し大乘唯心論より來れり。而して一たび翁が溶鑪爐に入つて、化して物心一元、不可知的一元論、汎神論の精鋼となりたることおぼし。左に録す。「人は即ち天地の神物なり。須く靜謐を掌るべし。心は即ち神明の本主なり。心神を傷ましむること勿れ。此の故に、目に諸の不淨を見て、心に諸の不淨を見ず。耳に諸の不淨を聞いて、心に諸の不淨を聞かず。鼻に諸の不淨を嗅いで、心に諸の不淨を嗅がず。口に諸の不淨を言うて、心に諸の不淨を言はず。身に諸の不淨を觸れて、心に諸の不淨を觸れず。意に諸の不淨を思はば、心に諸の不淨を思はず。白衆等各念ひ給へ。此の時に清き潔き偈あり。諸の法は影と形との如し。身清く心潔ければ、假にも穢るゝことなし。言葉を取らば得べからず。皆花よりぞ木の實とはなる。我が身は即ち六根清淨なり。六根清淨なるが故に、五臓の神君安寧なり。五臓の神君安寧なるが故に、天地の神と同根なり。天地の神と同根なるが故に、萬物の靈と同體なり。萬物の靈と同體なるが故に、爲す所の願として成らずといふことなし。無上靈

寶神道加持』

觀音經

其の文辭の蕪雜にして、論理の完からざるを尤むることを休めよ。唯其の俗耳に入り易く、唯心論的汎神論を最も簡單明瞭に説明したる手際を見るべし。又翁が幼少より觀音經を愛讀したるは、無論最も有名なる事實なるが著書の中には亦之を其の卷首に掲げたるものあり。或は虚空藏經を掲げたるものあり。而して此の二經は唯心論的汎神論なり。又翁が不動像を愛せしことも、世に知られたる所なるが、不動明王經は更に一層壯大なる、唯心論的汎神論なり。其の他翁が屢、般若心經の語を引けるを見れば、翁は一方佛敎よりして、唯心論的汎神論を得來りたるに相違なし。而して之と同時に支那哲學の、太極無極的一元論を吸收したるが、支那哲學は寧ろ唯物に偏するの傾向あれば、翁は此の兩者の間に在りて、自ら居仲調停し、如法の物心一元的、不可知的一元論を構成したるものなるべし。

東洋哲學の二大弊

元來東洋の哲學に二の大なる弊套あり。一は餘りに空漠なることにして、他は不合理なること是なり。支那印度の哲學共に之を通有すと雖も、就中其

支那は文章

印度は詩

の著しき點より分てば、支那哲學は主として空漠に失し、印度哲學は不合理に失せるが如し。更に之を文章と詩とに譬ふれば、甲は文章にして、乙は詩なり。支那哲學は空漠なるが故に、其の上世のものは、唯抽象的の數文字あるのみにして、捕捉し難く、其の實相を想像し難し。宋以下に至りては、頗る言語を増加して、盛に唱説したりと雖も、唯文章を見るのみ、哲理を見ず。哲理の學術的研究に至りて、一も増益する所なく、一も發明する所なし。又印度哲學は詩なるが故に、記述は具體的にして詳細に亘り、且つ壯麗を極むと雖も、元寓言小説なるが故に、不合理の所甚だ多し。唯後大乘の唯心論に至りて、單に主觀的方面に於て、合理たるを得るのみとは、著者の私に觀察する所なり。然るに報德哲學の創立者は、元來堅實なる實業者にして、詩歌文章の浮華を好まず、經驗的に物を判じ、科學的に理を考ふる方なりしを以て、到底東洋哲學の空漠と不合理とに堪ふる能はず。終に一種の新見たる、進化論的解釋を發明して、之を萬事に應用し、巧に調理安排して、始めて條理整然たる、物心一元論的汎神論を組織するには至れるなりけり。而して其の出發點は、前に挙げたる、

一は萬物の始との俗諺に取りて、一元論に到達し、六根清淨戒、般若心經、觀音經等に取りて、汎神論に歸着したるものなるべく、右に掲げし日本書紀、列子、周易、太極説及び俱舍論等の思想が、直接乃至間接に其の用材の一部となりたるべきは、疑を容れざる所なり。さる程に翁自身は、我が道は神道五分、儒佛合はせて五分より成るといへりしと雖も、是全く謙辭にして、實は神儒佛老合はせて五分、二宮五分より成りしなり。何となれば報徳哲學の一大異彩として、其の構成上一半を占めたる進化論と功利説とは、正しく歐人の思想にして、翁の時未だ日本に來らず、其のこれあるは、全く翁が獨創の卓見と見るべかりければなり。尤も支那にも楊墨等功利説を唱へたる者ありしも、儒教に壓せられて屏息したれば、朱説全盛時代の非學者たる翁等の注意を引きたるべくも思はれず。又生物頓變の俗説（雀海に入つて蛤となる等）はありしも、以て進化論の階梯たりしとは信じ難きなり。猶是等の事は、各其の條下に言ふべし。

さて傍證參考の爲に、意外の紙數を費したり。いでや是より此の章の本論

即ち翁が宇宙論の、其の實相を紹介せん。

「金毛録」太極の圖は本書卷首に掲げたり。今其の解の辭を邦譯すれば左の如し。

「萬物化生、太極を以て元とせざることをなし。傳に曰く、天地未だ割れず、陰陽を分たず、渾沌たること雞子の如しと云々」

又同じく卷首に掲げし、一元體氣の解に曰く、「夫れ元一圓混沌をなす。混沌亦復清濁をなす。猶清濁は空液の如し。空液動いて自然に清濁割る。清濁二物をなせば即ち體あり。體あれば必ず氣あり。體氣の本を悟れば混沌に歸す。混沌變化して萬體となる。萬體の本を推せば一體に歸す。一體變化して萬氣となる。萬氣の本を想へば一氣に歸す。體氣本來増減なし。此を天理自然と謂ふなり」

又陰陽生剖之圖には、清を陽、火、風とし、濁を陰、水、土とせり。更に別種の天地開闢圖には、天を空、風、火とし、火光を日といふ。空形を氣といふと註し、地を水土とし、水光を月といふ。地形を體といふと註し、圖下に「傳に曰く、中心を日體

となす。地盤に月體あり云々」と記せり。以上先づ太極剖れて兩儀となり、天地開闢するを釋す。開闢をいふは、我が神代記及び支那の太極說其のまゝなれども、兩儀分れて木火土金水の五行となることを説かずして、清濁分れて地水火風空の五大となることを示したるは、既に佛說を混じたるものにして、蓋し木金は地の後に生じ、地に含まるべきものなるを以て、天地開闢の頭初に現出せしむべきものに非ずと、宇宙發生の順序を考へての見識なるべし。夫れ斯くの如く、天地既に開けて、五大の元素既に備はる。是が發して萬物となるの順序や如何。

萬物發生の順序

「百種輪廻鏡」に於て乃ち説いて曰く

「夫れ天地は運動を根となす。乃ち運動なければ寒暖なし、寒暖なければ草木の生育なし。天地の運動以て草木を發すれば、則ち草木の根元は天地の運動寒暖に在り。之を天理自然といふなり。

夫れ元一圓空極なり。天地開闢して國土あらはれ、世界廣しと雖も、天地の氣候相和し、運び動き、寒さ暖さなければ、草も木も生ひ育つべき根元な

し。天地の氣候運び動き、寒さ暖さあるが故に、草木生ひ育つ根元自然と發るなり。草木の生ひ育つ根元を悟れば、天地の氣候運び動き、寒さ暖さあるゆゑなり。是之を天理自然なりと知るべし。

又曰く、天地開闢して日月道を行くのみ、草木虫魚鳥獸及び人間未だ生ぜざる時は、天地の間に何一物もなし。是之を神代ともいふべきや。然かあれば天朝を初め奉りあらゆる國々日月の照らし給はる所、是皆一圓神國なるべし。

いにしへは草木も人もなかりけり

高天の原に神留座』

神國の説  
即ち天地は自然に開け、萬物は天地の運動に因つて自然に發生するをいひ、最初一物なければ神は在り。是即ち神國なり。獨り日本のみならず、世界一圓神國なりといふ。神國の語意小なるに似たりと雖も、畢竟するに宇宙即ち神國といふなり。豈純然たる汎神論にあらずや。又「萬物一圓鏡」には曰く「神なければ人なし。人あれば神あり。神人究竟不二一物」と。又萬物發言集に曰く「三

尊といふは、本來は天地人なり。又曰く父母我なり。是天地を我と同體なりとするなり。又金毛録の圓圖中往々圓徑の分界線上、天地の間に「我字」を記せるを見るも、亦同様の意なり。發言集に又譬論を設けて曰く「世界混沌なり、天地未だ分れざるときは、草木一種の如し。而して後一種清濁を爲す。根本をなすが如し。是即ち一草一木なり。今の天地大千三千大千世界、根は即ち今の大地なり。本は即ち空界なり。枝葉花實は天なり。佛曰く空即是色、色即是空、是に至りて其の汎神論の益、明白なるを見る。

以上報徳哲學の宇宙發生論なり。神儒老佛に基づく、頗る具體的且つ合理的となりたるを見るべし。以下請ふ翁が獨得の卓見たる、萬物進化論を觀察せん。

著者が始めて二宮翁に進化論的見解ありしを發見したるは、語録の文に於てなりき。即ち語録卷一の開卷劈頭に「混沌清濁を分ち、内に開けて天地となり、日月運行、陰陽循環、寒暑往來し、風雲雨露、雪霜を致して、而して未だ萬物を生ぜざるもの幾萬歲、是蓋し神世なり。春夏雨露の潤す所、始めて毒苔を生

#### 論の進化

#### 神代史の 解釋

じ、秋冬、雪霜降れば即ち滅す。歳々生滅して其の滋潤する所、草木以て生ず。虫魚以て生ず。禽獸以て生ず。人類以て生ず。其の間又幾萬歲なるを知らず云々」とあるを見て喜び、次に同書卷二に「神史に所謂天孫日向國に降臨すとは、是我邦開闢の始、西邊先づ草を生ずるなり。日向は日に向ふなり。譬へば宅地の西邊、日に向ふ所に、先づ草を生ずるが如し」といへるを讀みて、其の事實の當否は姑く措き、進化論もて神代史を解釋せんと試みたる、着想の奇警なるに服したり。更に轉じて翁自身の遺著に就き、冷く搜索したるに、先づ右「語録」の出所たるべき文章數種を得、最後に一層進歩したる、一層具體的なる説明を發見したり。左に逐次之を掲げて翁が進化論の進化を見ん。

#### 其の一

「百種輪廻鏡」に曰く

進化論一 『夫れ元一圓空極なり。天地開闢して世界廣しと雖も、草木未だ生ぜざるとき、譬へば高山の崩れ出でたる赤土の如く、又濱の砂の清きが如し。何を以て草木生ずべき潤澤なし。然りと雖も、天の氣は下りて土中を潤し、地の氣



は上りて空中を潤し、寒さ暖さを運び動きて、年々歳々晝夜止むことなし。譬へば人の寝て心なく、夢中に息して止まざるが如し。故に雲霧を發し、雨露雪霜を降して、土中を潤す。其の潤澤に依つて始めて苔生じ、或は滅し土中を潤すこと幾千萬歳。其の潤澤に依つて始めて草生ず。草生ずれば枝葉も共に發す。又滅し、土中を潤すこと幾千萬歳。其の潤澤に依つて木始めて生ず。木生ずれば枝葉も共に發す。又或は滅し、草木の根を肥し、潤すこと幾千萬歳。其の潤澤に依つて花咲き、終に實法を結ぶ。是即ち一種の根元なり。夫より以來草木生じて、然る後萬歳に至るまで、根もあり、草もあり、枝もあり、葉もあり、花もあり、實もあつて、盡くることなし。是これを天理自然なりと知るべし。』

右開闢以後苔、草、木を生じ、終に花咲き實るに至るまでを叙す。順序を説くこと當れりと雖も、唯苔の潤澤に依つて草生ずといふのみにて、苔變進して草となることを明言せず。但し花なく實なき草木が、生々滅々すること幾千萬歳。終に花咲き實を結ぶに至ることを説くあたり、亦味ふべき構想ならず

や。

『夫れ元一圓混沌なり。混沌清濁して天地となる。日月あらはれて晝夜を分つ。雲發つて雨を降す。風發つて雲を散じ、而して未だ地の開けざること萬歳。天津神の御代ともいふなるべし。陽惠雨露のしたゝれにて、始めて地上に苔を生じ、秋風發つて終に滅す。而して後、其の潤に依つて草生じ、又秋風發つて終に滅す。而して後、其の潤に依つて竹木生じ、年歳落葉して消滅す。其の潤に依つて虫魚生じ、草木の露を吸ひ、花の潤を嘗め、終に消滅して其の潤に依つて鳥獸生ず。春は草木の芽立、秋は果虫魚を喰ひ、終に消滅す。而して、其の潤澤に依つて人間生ずと雖も、未だ田畠開けざれば、人の食とするもの、春は草木の芽立、秋は果鳥獸虫魚を食となし、而して萬歳を経たり。其の中に人體に具足となりて、味ひの宜きものは、五穀の實法、其の品大凡米、麥、粟、稗、黍、大豆、小豆、胡麻、大角豆の類、又根を食するもの、芋、大根、牛蒡、人參

蕪運根の類、之を選んで之を作らんが爲、水邊濕地を開き、畔を立て、田と名づけて稻を植ゑ、乾地を墾き、島と名づけて諸草を植う。是即ち發田のはじめ、法界の根元なり。田島開けて五穀熟し、食物足つて人道定まる。人道定まると父を知り父子の大道立つ。及び兄弟夫婦朋友の四倫の道行はる。終に横道のもの出来、人倫の道を破る。是に依つて君臣の大道立つ。耕作農業をなして五穀を作り出す者を守護し、横道の者を懲しむ。是即ち武門の根元なるべし。是より以後、五倫の道、益、明なり。其の後、終に流れて、天竺には佛出生して、其の法を定め、人民を導き、唐土には聖出生して、其の法を定め、人民を導き、我朝には神出生して、其の法を定め、人民を導く。其の法、三國異風同道なり。天地開闢發田より、今日に至るまで、人國法界となりぬ』

右開闢より草木蟲魚禽獸人類の發生、人道社會及び國家成立の次第を叙す。之を夫の飛行自在の天人が、墮落して人間となれり。或は神が泥土を以て人間を造れり。などの神話的創世記に比すれば、全く別段の學術的議論なり。然れども、未だ苔變進して草となることを明言せず。予輩は更に探求の歩を

進めざるべからず。

其の三

終に、天性隨背鏡に至りて、乃ち曰く

「天地開闢して日月道を行くのみ。人間はいふに及ばず、竹木鳥獸蟲魚未だ生ぜざる時は、天地の間に何一物もなし。一物もなければ一圓日月の世界なり。之を神代ともいふべき哉。然かあれば天朝を始め奉り、あらゆる國々、日月の照らしたまはる所、是皆神國なり。譬へば數千里の原に家宅を建て、夫婦のみ外に親もなく子もなく、家來もなく朋友もなければ、家宅は勿論、原一圓に夫婦二人の領地なるが如し。然りと雖も、何を以て今の世に生れて、古へを見知るべき謂はれなし。今の形を以て書きたるまでなり。尤今日に居て明日を見知るべき謂はれなけれども、昨日を以て思慮するに同じ。又今の世に居て古へ、或は後世などといふ文字を書くに似たり。又幾千萬歳を經、草木生じ、或は花咲き、實法り、又實變化して蟲生じ、蟲變化して魚鳥生じ、魚鳥變化して禽獸龍蛇蛟鯢生ず。而して後人間生じて、東西南北、或は

草木鳥獸蟲魚名、自然と定まる。依つて異國萬國の別名あるなり。然りと雖も、田畑未だ開けざるときは、一人の働きにて一人を養ふのみ。是に因つて田畑を開き、五穀を植う、五穀實法れば、食足りて身に餘力あり。是に因つて家宅を建て、井を掘り、道を造り、橋を掛け、船を造り、悉く事足る。是に依つて身を安んじ、心體を勞することをあしむ。他の財を奪ふ、是に因つて其の横道を制す。是武道の根元なり。其より以來、或は治まり、或は亂れ、幾千萬歳を経て、天照太神の御代に至らせられ、益、嚴法を立てさせられ、畔を破り、寛を放ち、溝を埋めるもの、或は親と子と犯せるもの、子と親と犯せるもの、畜を犯せるもの、其の外種々の誓ひを立てさせられ、幾千萬歳を経て、或は治まり、或は亂れ、又東照神君に至り、彌、戸さ、ぬ御代となりたる御丹誠を生れながらにして衣食住を得るもの、凡海内衆民の幼童、又は乞食非人に至るまで、德澤を蒙ること、譬へば藍にひたせる布、水に浸せる紙の如し。之に依つて、今の世に生を得るもの、年々歳々、報德を忘るべからざるなり』

天照太神

其の三

即ち此の章は、結文の報德を教へんが爲に、天地開闢以來の進化史を説き、

祖宗原人國君の恩、天地生々の德澤を述べたるもの、如し。随つて大體の順序は前掲「其の二」に異ならずと雖も、唯最後の一大特色とすべきは、『又幾千萬歳を経て、草木生じ、或は花咲き、實法り、又實變化して、蟲生じ、蟲變化して、魚鳥生じ、魚鳥變化して、禽獸、龍、蛇、鯢、生ず云々』と明言したる點に在り。其の二までは、草木花實の潤澤を以て、蟲魚生ずといふのみなりしに、此の章に至り、始めて草木の實變化して、蟲生じ、蟲變化して、魚鳥生ずと明言す。而して其の木實が蟲となり、蟲が魚鳥となるの時間は、其の二に於ける、花實なき草木が、花實を有するに至るまでに、幾千萬歳の生々滅々を経たりといへるに徴しても、亦其の悠久永劫を費したるを知るべし。既に木實が蟲となるまで、悠久永劫幾千萬歳を費したりとせば、其の間に自ら生存競争、適種生存の理、法行はれたりといふ議論を、迫り出し、來るの餘地ありといはんも、甚だ過言にあらざるべし。唯翁は説いて之に及ばざりしのみ。又前文「實變化して、蟲生じ、蟲變化して、魚鳥生じ、魚鳥變化して、禽獸、龍、蛇、鯢、生ず」との筆法を、以てすれば、當然の筆勢として、其の次には、禽獸……變化

して人間生ずと續けざるべからず然るに翁が一轉して呼吸を抜き而して後人間生じと冷々然として顧みて他を言ふ的態度を取りしは無論考察の及ばざりしにあらず流石に露骨なる直言を避けたるなるべし何となれば言論不自由新説嚴禁の當時に在りて若し人間は禽獸の變化し來れるものなりなど公言したらましかば殆ど其の身を危うしたるべければなり自由の國と稱する英國に於てすら夫のダウインの進化論が如何に迫害せられたるかを見れば思ひ半に過ぐるもあらん

右引用の諸書類は蓋し天保五年迄に成りたるものなれば翁が兎に角進化論の見解を有せしはダウインが種の起原を公表せし一八五九年(安政六年)に先だつこと二十五年なり

ラマルク以下の進化論者が之を生物學地質學等實驗研究の結果に得たるや今更論なし而して二宮翁は何に依つて此の見解を得たりやといふに未だ組織的ならずと雖も亦之を一種の實驗研究より得たり決して雀が蛤となり著積が鰻となり蕎麥稈が鰻となる等の和漢の俗説より得たるにあ

らざるなり翁は主として之を其の日夕培養し慣熟し親昵したる植物生滅の實際より得たり即ち前掲其の三にも今の世に生れて古へを見知るべき謂はれなし今の形を以て書きたるまでなり今日に居て明日を見知るべき謂はれなれども昨日を以て思慮するに同じといへるが如く萬事可知を以て未知乃至不可知を推理せしなり故に農家大道鏡には曰く凡そ草木の種子は根もなく葉もなく玉の如し根なきにあらず根あるにあらず葉なきにあらず葉なきにあらず花なきにあらず花あるにあらず是即ち混沌なり而して之を蒔けば期到りて清めるものは昇りて葉となり濁れるものは降りて根となる即ち天地開闢なり」と是即ち一種發して根葉となるの理を推して天地開闢を解するなり又萬物發言集には曰く夫れ元蟲ありて而して後葉あるに非ず葉有りて而して後蟲生ずと敢て問ふ蟲は何の所より來れる曰く卵子より來れり卵子は何の所より來れる曰く蝶之を生めり蝶は如何曰く蛹蛹は如何曰く蟲蟲は如何曰く卵子曰く何曰く何斯く繰返して幾千萬歳の昔蟲卵蛾蛹未だ全く在らざるの時に溯らば終に其の前身が草木

乃至他の或物なりしことを考へざることを能はざるべし。而して更に草木苔  
以前天地開闢の始に歸り、其より出發して現世界の萬物繁盛の狀に到達す  
る迄には、勢ひ進化論的の考察を誘致し來らずんばあらざるべきなり。少く  
とも誘致し來り易きなり。斯くの如くにして、翁の着想は發生し、成育したり。  
之を要するに、一元論は汎神論を伴ひ、汎神論は自然論なり。自然論は進化論  
を誘ひ、進化論は功利説を伴ふ。蓋し當然の勢なり。下章追々に説明する。無始  
無終、不生不滅、不増不減、不止不轉等の諸論も、亦一元論必然の結果に過ぎざ  
るなり。故に曰ふ、翁の哲學は首尾整然として條理ありと。

讀者諸君、著者を以て漫に古人の斷簡零墨を把攬し來りて、大なる學術的  
發見ありしかの如く、誇張する者となし、之を尤むること勿れ。著者は唯二宮  
翁が常に東洋學者に特絶して、詩的寓言的の空想を排し、經驗的、歸納的考察  
の態度を取りたること、未知未見の西洋學者に異ならず。隨つて其の考察の  
結果も、亦東洋に無くして、唯西洋に在りし學說に暗合したるの事實を忠直  
に紹介し、所謂報德哲學の眞價を發揮せんと努むるのみ。豈他あらんや、他あ

西洋學者  
に異なら

るべけんや。

翁曰く

音もなく香もなく常に天地は

書かざる經をくりかへすなり

古道に積る木の葉を攝分けて

天照る神のあしあとを見む

### 五 無始無終不生不滅

夫れ萬物は一元なり。一元發して萬物となり、萬物合して一元に歸す。一元  
の前は萬物なり。萬物の前は一元なり。前に溯つて盡期なく、又萬物の後は一  
元なり。一元の後は萬物なり。後に下りて盡期なし。故に、大圓鏡に曰く

『始外無終、終外無始 合始終爲一物』

と又曰く

『夫人今日相則有三日相 夫人今月相則有三月相』

夫人今年相則有三年相 夫人今世相則有三世相』  
と。即ち前文は始終を一とし、後文は過現未の無窮をいふなり。

『天性隨背鏡』に曰く

去今日の過

『今日只今晝に居て、其の過去の前時を思へば今朝なり、今朝より其の過去の前時を思へば昨夜なり、昨夜より其の過去の前時を思へば昨夕なり、昨夕より其の過去の前時を思へば昨晝なり、昨晝より其の過去の前時を思へば日々月々年々、餘り與り知らざる所、幾千萬歳の昔、天地開闢に至るまで、又々斯くの如し。是即ち人力の及ぶ所にあらず、天理の自然なりと知るべし。』

來今日の未

『今日只今晝に居て、未だ來らずと雖も、其の後時を悟れば今夕なり、其の今夕より未だ來らずと雖も、其の後時を悟れば今夜なり、其の今夜より未だ來らずと雖も、其の後時を悟れば明朝なり、其の明朝より未だ來らずと雖も、其の後時を悟れば明晝なり、其の明晝より未だ來らずと雖も、其の後時を悟れば明晝なり、其の明晝より未だ來らずと雖も、其の後時を悟れば、日々月々年々幾千萬歳に至るまで、又々斯くの如し。是即ち人

力の及ぶ所にあらず、天理の自然なりと知るべし』

曰く『是即ち人力の及ぶ所にあらず』過去も未來も無限なればなり。翁は斯く現天地の悠久を感じたるのみならず、更に必然の順序として、現天地の前、及び現天地の後の循環無限なるを構想したり。即ち『金毛錄』に曰く

吸天地の呼

『天一歳に一呼吸して、春夏育茂し、秋冬收藏し、萬物養はる。人は小天地なり、而して一晝夜に三千六百呼吸をなす。度を變ずれば疾病を生ず。四序の不順、まさに之を以て察すべし。人體一年の呼吸を權るに、百二十九萬六千數に及ぶ。六十歳の度を量るに、七千七百七十六萬數なり。曆軸六十一歳にして本に還る。人生亦復此の如し。之を大天地の呼吸に配すれば、浮世は猶七千七百七十六萬歳にして本に還るか』

天地の壽

夫れ人は小天地なり、而して其の呼吸數、七千七百餘萬、即ち六十年にして、人生は畧は一循環をなすの例を以て察すれば、一年を一呼吸とする天地も、亦七千七百餘萬呼吸、即ち七千七百餘萬年にして、一循環をなすものかといふなり。前には天地の生命を人力の量る能はざる所といひ、茲には假に其の

循環期を算ず。固より數字に重き意味なし。唯此の廣大なる天地も、若干千萬歳にして循環し、循環又循環、前往到底無限なり。後來到底無窮なり。到底無終無始なるをいふなり。

右無始無終を釋す。

夫れ本來有無なし。有無は一元の假象なり。顯るゝ之を有と稱し、隱るゝ之を無と號す。生滅は有無の異名なり。有之を生と稱し、無之を滅と號す。夫れ本來有無なし。何の所にか生滅あらん。故に、大圓鏡に曰く

『生外無死、死外無生、合生死爲一人』

又道歌に曰く

『生滅は打てば響くの音ならむ

うたねば音の無きや有哉』

『萬物發言集』に曰く

生滅の眞相

『一種破滅をなす、木の世に於て生といふ。

一種破滅をなす、種の世に於て死といふ。

一木枯滅をなす、木の世に於て無といふ。又曰く死なり。

一木枯滅をなす、空界に於て有といふ。又曰く生なり』

又曰く

『草變成種 種變成草 草即是種 種即是草 生即是滅 滅即是生』

又『百種輪廻鏡』に曰く

『夫れ元一圓一種なり。世界廣く、草木多しといへども、一種清濁して根となり、草となるなり。草と根の元を悟れば、一つの種に歸す。又一種變化して、濁れるものは下り、土中に生育して萬の根となる。萬の根の元を悟れば、一つの種に歸す。又一種變化して、清めるものは上り、空中に生育して、萬の枝葉となる。萬の枝葉の元を悟れば、一つの種に歸す。元來、草は一年十二箇月を二世とするなり。春は暖氣に誘はれ、一種滅して草生ずるなり。種の世界に於ては是を死といふ。草の世界に於ては之を生といふなり。其より生長して、夏は花咲き、盛なり。其より秋に至れば、花もしほみ、枝も葉も、草も根も實法りおさめ、枯果て、終に一種となるなり。又草の世界に於ては、是を死とい

ふ。種の世界に於ては、是を生といふなり。半季六月の間は種となり、半季六月の間は草となり、種より種の生るゝといふことなく、草より草の生るゝことなく、寒氣雪中、種の世界よりは秋風を無常といふ。無常無常にあらず。有常、有常にあらず。草となり實となる。是全く不生不滅、不止不轉の世界なり。天地開闢より幾千萬歳の後に至るまで、又々斯くの如し。是これを天理自然なりと知るべし。』

右不生不滅を釋す。

### 六 不増不減（精力保存）

曰く無始無終。曰く不生不滅。曰く不増不減。曰く不止不轉等。都て佛説の言語思想を假り來りたるや、今更論なし。其の他佛説に「不増不減經」あれば、翁説に「一器水動不増不減鏡」あり。佛に大圓鏡智の語あれば、翁に「大圓鏡」の著あり。佛に輪廻の説あれば、翁に「百種輪廻鏡」あり。各種の著書に「駢四儷六佛經」的文體多く、終には章句法を其のまゝに

解釋を異にす

二宮一流

願以此作徳 平等施一切 同發農業心 往生安樂國 又は  
願以此返金 村中貸一同 同發返納心 貧富安樂村 願以報徳金  
平等貸一切 同發報徳心 往生安樂國  
など、戯るゝに至る。翁が佛經に負ふ所亦少らずと謂ッべし。然れども、其の解釋の方法に至りて、概ね之を異にせるのみならず、或は解釋其の物を異にせり。是單り佛經に對して然るのみにあらず、儒教の語に對しても亦同様なり。猶進んでは、説文學、即ち漢字々源の研究に對してすらも、全く獨自一己の解釋を有したる程なれば、況して重大なる原理原則、哲學的の考察をなすに方りては、直に宇宙其のものに就きて、所謂不書の經を讀み、全く自由獨立の見解を以て、二宮一流、獨自一己の斷案を下したり。用語の毎に陳腐なるに拘はらず、所説の常に生新なるは、即ち是が爲なりしなり。

却説翁が其の書に於て、不増不減、即ち物理學の所謂精力保存の理を説くこと、頗る頻繁、且つ懇切なり。今其の中の重なる數例を紹介せん。

先づ「大圓鏡」の劈頭に於て曰く



『刻生刻滅無増減 時生時滅無増減 日生日滅無増減 月生月滅無増減  
年生年滅無増減

降天歸天無増減 昇地歸地無増減 空生空滅無増減』  
更に生滅無増減を釋して曰く

『一刻生者一刻滅 一時生者一時滅 萬年生者萬年滅 空中生者空中滅』  
其の意、一刻生育するものは一刻滅亡す。而して生滅差引き増減なしといふなり。夫れ本來生滅なし。何の所にか増減あらん。

又『百種輪廻鏡』に曰く

『夫れ元一圓生滅なり。世界廣く草多しと雖も、生滅に増減なし。一草生ずれば即ち一草滅す。十草生ずれば即ち十草滅す。百草生ずれば即ち百草滅す。千草生ずれば即ち千草滅す。草生じて然る後萬歲に至るまで、若し長短遲速ありと雖も、生滅の根元増減なし。是これを天理自然なりと知るべし』  
右にても不増不滅の大意を了會することを得べし。然るに翁は猶是を以て満足せず。特に『一器水動不増不滅鏡』弘化元年改之なる一書を著して、遂に

釋迦の『不増不滅經』に相對したり。而して其の説く所、釋迦は舍利弗が『此の義深隱、我未だ解すること能はず。若し人我に間は、當に何とて答へんか』との質問に對して『佛曰く大邪見者は所謂衆生界の増を見衆生界の減を見る』と答へ、更に『佛地經』に於て『淨法界には増無く減無し』と説き、強ひて其の説を高遠にし、神秘の錦帳に藏さんと勉めたるに對し、翁は極めて、輕快に、例の適實なる譬論を以て極めて平易明白に説述したり。其の中に曰く

『夫れ元天地開闢以來、今日只今に至るまで、増すものは必ず減じ、減ずるものは必ず増す。年々歳々晝夜自轉運動して、暫くも止まることなし。正に見れども其の極を見ず。正に有れども其の極を知らず。因ッて凡智を礎き、自己の明鏡を照らさんがため、方一尺四方六面の器物を作り、水を入れ、前後左右上下、水充滿して出入なきときは、増減あることなし。是を以て、半分除けば半分残り、前後左右深さ五寸となる。是則ち天理自然なり。動いて前の方へ一分傾くときは、一分増して五寸一分となる。向ふの方一分減じて残り四寸九分となる。猶前の方へ二分傾くときは、二分増して五寸三分とな

る。又向の方、二分減じて、残り四寸七分となる。猶前の方へ三分傾くときは、三分増して五寸六分となる。又向の方、三分減じて、残り四寸四分となる。猶前の方へ四分傾くときは、四分増して六寸となる。又向の方、四分減じて、残り四寸となる。中略猶前の方へ五分傾くときは、五分増して深さ一尺となる。又向の方、五分減じて水盡き、淵變じて空となるなり』  
次に右の器を向方へ傾くときの例を、同じく一分間隔にて、五寸を五十分段に説きならべ、次には左右傾斜の例を、同様の筆法にて説き、以て右器の一邊づゝより見れば増あり減あるの事實を示し、最後に此の増減は、事實は即ち事實なれども、單に一邊より見たる事實にして、器の全體より見れば、全く増減なきことを説く。即ち曰く  
『器傾いて水増減なきこと能はず。是に減ずるときは彼に増し、彼に減ずるときは是に増す。情、其の根元を案ずるに、半器に居住する者は、常に増減あつて止むことなし。一器に居住する者は、更に増減なし。本來増減我が居住に在り。是之を天理自然なりと知るべし。』

經曰 不増不減  
増減は器かたむく水と見よ

「こちらまさればあちらへるなり」  
是より右の例に依りて、晝夜長短の時刻、本來不増不減なるの理を説くこと詳なり。更に「天祿増減鏡」に至りて、天地開闢より草木虫魚鳥獸人間を生ずるも、未だ田島山林開發あらず。村里名なし。人は獨々住居をなし、面々自己飲食をなす。故に此の時天下無財寶との原始より説き起して、次に財寶を生じ、財寶あれば通用あり。通用あれば増減を生ずるの理をいひ、斯くて財寶は貸借を生ずれども、貸借は畢竟一面よりの名稱にして、全體には増減なしとて、即ち例を財寶に取りて、無増減の理を説き、無増減の理に依りて、貸借得失の拘泥執着すべからざることを暗示す。其の言に曰く

「夫れ元一圓貸借なり。貸寶なければ即ち借心なし。借寶なければ即ち貸心なし。貸寶有れば即ち借心を發す。借寶あれば即ち貸心を發す。財寶を發してより萬世に至る。貸借本源増減無し。此を天理自然といふなり」

是即ち不増不減論を財寶の上に適用したるものなり。更に左の一文に至りて、最も明白に且つ巧妙に、之を道德上に應用したるを見る。其の趣旨は、夜話にも出でたりと雖も、特に茲に原文を掲ぐ。

『夫れ讓ッて損なし。奪ッて益なし。根元を案ずるに、見れども見え難し。有れども知れがたし。行へども述べがたし。故に大器に水を入れ、前後左右、深さ等分あるとき、此の水を前の方へ搔寄すれば、水、向の方へ流れゆく。暫時も止まらず。終に元の如くの深さに至る。又向の方へ押寄するときは、水、前の方へ流れ歸ること暫時も止まらず。終に元の如くの深さに至る。又右の方へ押寄すれば、水、右の方へ流れ歸ること暫時も止まらず。終に元の如くの深さに至る。又右の方へ押寄すれば、水、左の方へ流れ歸ること暫時も止まらず。終に元の如くの深さに至る。急に搔寄するときは、水、急に流れゆき、急に押寄するときは、水、急に流れ歸る。悠然と押寄すれば、水、悠然と流れ歸り、終に元の如くの深さに至る。之を悟れば、奪ッて益なく、讓ッて損なし。是を天理自然なりと知るべし。』

上者必下 下者必上 増者必減 減者必増 生者必滅 滅者必生  
往者必來 來者必往 盈者必虧 虧者必盈

七 不止不轉 (因果循環)

翁は先づ「大圓鏡」に於て、不止不轉を説いて曰く

『不止不轉

日往如是 月來如是 月往如是 日來如是 暑往如是 寒來如是  
寒往如是 暑來如是 物生如是 物育如是 物老如是 物滅如是  
人生如是 人育如是 人老如是 人死如是 天惠如是 地養如是  
歸地如是 歸天如是

如是如是の文

生育老死

如是といひ、如是といふ、如是とは何ぞや、森羅萬象、即ち是なり、森羅萬象、悉く、不止不轉なりといふなり、諸君目を開いて此の文を読み、目を閉ぢて森羅萬象、不書の經を點檢し見よ。如是の一語が如何に甚深微妙の意味を含み居るか知らん。猶人生の四期を生育老死となせるは、釋迦の生老病死に比し

て、優ること確に一等なるを認む。

次に「百種輪廻鏡」朝晝夕夜輪廻の圖の解辭に曰く

『晝夜開闢 年々歳々 朝晝夕夜 不止不轉』

又種草花實不止の圖の解辭に曰く

『夫れ元一圓體氣なり、世界廣く草多しと雖も、體も氣も止まることなし。種誠に至れば、即ち生ずる氣を含むものなり。其の或は草、生長に至れば、則ち花咲く氣を含むものなり。其の或は花、咲き盛に至れば、即ち實法の氣を含むものなり。其の或は能く實法に誠に至れば、則ち種となる。草生じて然る後、萬歳に至るまで、草も氣も輪廻して止まることなし。是これを天理自然なりと知るべし』

次に種草花實不轉の圖解に曰く

『種無止轉 草無止轉 花無止轉 實無止轉 夫れ元一圓不止不轉なり、世界廣く草多しと雖も、晝夜輪廻して止まることなし。又外に轉ずることなし。其の或は種に止まることなく、其の或は草に止まることなし。其の或

は花に止まることなし。其の或は實に止まることなし。然りと雖も外に轉ずることなし。草生じて而して後、萬歳に至るまで、種生花實輪廻して止まらず。又外轉することなし。是これを天理自然と知るべし』

次に「萬物一圓鏡」に於ては、前記不止如是不轉如是の如是如是を釋すること頗る詳なり。中に曰く

『大元往來不止不轉 混往沌來沌往混來 混沌往來不止不轉 清往濁來濁往清來』

清濁往來不止不轉 水往火來火往水來 水火往來不止不轉』

此の他萬物萬事を捕へて、何々往來不止不轉と結び、次には萬事萬物を捕へて、何々變化不止不轉と説く。此の論に限らず、翁は何れの場合に於ても、其の理を萬事萬物に通用し、同一筆法を以て叙列するを常とす。夫れ、眞理は、一なり、不易なり、萬事萬物に通用して、差謬なきものに、あらざれば、眞理といふを得ざるなり。翁固より之を知れり。而して最も能く之を明にせり。

抑、佛教の實用は、巧に物理の因果律を、倫理に應用したる點に在り、其の亞

因果律と倫理

細亞洲の大部分に瀰漫して、三千年の久しきに亘り、猶多大の信仰を人心に繋ぎ得たるもの、主として此の特長に依りたるべしとこそ思はるれ、警眼なる、且つ最も實用主義なる二宮翁、豈此の珍寶を空しく藏せんや、例の植物の譬諭に依りて、盛に之を道徳上に應用し、たり。

『萬物發言集』に曰く

「生之因謂種、種之因謂實、實之因謂花、花之因謂草  
身之果謂糞、糞之果謂肥、肥之果謂稻、稻之果謂米、米之果謂食  
食之果謂身、身之因謂食、食之因謂米、米之因謂稻、稻之因謂肥  
肥之因謂糞、糞之因謂身」

在る事を在りの儘  
如何なる無智の田夫野翁も、斯く明白なる談論を聞きては、了解せざるを得ざるべし。浦賀宮原連の書狀に曰く「皆在る事を在りのまゝに御教訓成し下され云々」誠に在ることを在りのまゝに説述すること、翁が卓越の技倆なりけり。終に「天命七元鏡」等に至りて

蒔米種 生米草 發米花 結米實 蒔麥種 生麥草 發麥花

### 結麥實

の筆法を以て、無數の植物を挙げ來り、忽ち

米蒔けば

米蒔けば米の草はえ米の花

ひらきて米の實る世の中

等數百の道歌となつて、翁が生前に四方に傳播し、報徳訓と相俟つて、教化を補ふに至りしなり。

### 八 壽命無量(靈魂不滅)

無神無靈魂を稱する唯物論者の外、凡そ靈魂を有とする者は、亦終に其の不滅を信せざるを得ざるべし。問題は唯其の不滅の靈魂は、人格的にして不滅なるか、非人格的にして不滅なるか。即ち二宮金次郎の靈魂は、死後猶二宮金次郎の靈魂として存在するか、或は宇宙の大靈魂に歸還し、單に其の大靈魂の一部として存在するか。此の點に關して、宗教は多く人格的なりとせり。是宗教の實用上最も便宜なりければなるべし。哲學は多く非人

何靈魂とは

格的なりとせり。物の道理を考察すれば、此の方比較的合理的に思はれたればなるべし。然れども一步超脱して考察すれば、此の問題は愚問題なり。生前既に絶対的の人格的隔在を見ず、死後豈獨り絶対的の非人格的共通あらんや。詳言すれば人間は、現世に於て既に宇宙と共通して存在するものなり。靈魂も然り。肉體も然り。其の何某といひ、何某といふ、畢竟元素の結合集積せる一の中心を指呼するのみ。一の標的を指呼するのみ。故に若し之を捕へて鐵函に納め、密閉すれば、半時間にして輒ち死滅す。何となれば是單に中心なるを以て、四周を斷たれて存在すること能はざればなり。元來四周あるが故に中心あるを得るものなればなり。又譬へば絶海の孤島の如し。大陸より隔離されたりと見ゆるは唯假相のみ。實は海に依つて表面を連續せられ、空氣に依つて空中を連續せられ、地面に依つて海底を連續せらる。孤島は單なる標的のみ、靈肉の一塊一中心に、權兵衛八兵衛の標的ある、豈是に異ならんや。故に曰く、生前既に絶対的の人格的隔在なしと。然らば死後に於ては如何。夫れ本來生死不二なり、死後亦生前に同じかるべし。結合集積の強大なる靈魂は、

久しく人格的にして存在することを得ん。釋迦孔子基督の如き、其の他あらゆる人傑の靈魂は即ち是なり。結合集積の微小なる靈魂は死後數年にして消散す。一切凡俗の靈魂是なり。豈管死して後消散するのみならんや。大多數の凡俗は、生前既に自家獨得の靈魂を有せざるもの、比々皆是なり。彼等は電車の停留場の如きものなり。停留場には電車あり。然れども其は停留場の電車にあらずして、全線全通の電車なり。生前既に斯くの如く、死後亦斯くの如くならん、其の或者は人格的に存在し、其の或者は非人格的に存在せん。故に曰く、死後亦絶対的の非人格的共通なしと。又此の故に曰く、靈魂不滅の人格的、非人格的の問題は愚問題なりと。

二宮翁は其の不可知的一元論汎神論の結果として、當然靈魂の不滅を信じ、而して其の靈魂は、或程度にては非人格的に存在し、或程度にては人格的に存在す。元來生死不二一物なれば、靈魂も亦生前死後同一なりと斷定したり。今其の例證を舉げんに、『萬物發言集』に曰く

『萬物生於土中』 萬物歸於土中』

音聲生於空中。

音聲歸於空中。

空外無音聲。

音聲歸元空。

土外無萬物。

萬物歸元土。

是萬物の往來をいへり。肉體も亦此の中に在り。而して「往來悟元不二一物」の言に依りて萬物の不滅なるを知るべし。靈魂も亦此の理に同じ。

次に曰く

「生を悟りて、而して後死を悟るべし。本來生死一物なり」

又曰く

「一身生育を爲す、過去に於て死といふ。

一身生育を爲す、現世に於て生といふ。

一身消滅を爲す、今世に於て死といふ。

一身消滅を爲す、未來に於て生といふ。」

「報徳金毛録」に曰く

「生者生せず。死者死せず。陰陽來往不止なり。佛之を有無といふ」

生心と死

既に生死往來を説けども、未だ明に靈魂を言はず。左の文に至りて始めて言ふ。同書に曰く

「人生れて生心あり。必ず死して死心あるべし。是即ち天理自然なり。

人死して死心あり。必ず生れて生心あるべし。是即ち天理自然なり。」

既に生死の連續をいへば、又心即ち靈魂の連續をいはざるべからず。是必

然の結果なり。而して此の語比較的人格の靈魂不滅の意を含めりといふべ

きが如し。終に「悟道草書帳」に至りて曰く

「壽は譬へば海水の如し。體は譬へば桶器の如し。且つ桶器ありて而して水

あるにあらず。水ありて桶器を作ることあり。過つて桶器を破れば、則ち突

然元の海に歸る。又海水ありと雖も、桶器無ければ自由になす能はず。故に

桶器破るゝことあるも、海水に損ずることなし。人も亦然り。體有りて壽有

るにあらざるなり。壽有りて自然に身體生ず。然らば則ち壽命は身體の内

外に住するもの歟。是故に生死身體の末期なきもの、壽命の内に住すれば

なり。云々」

壽は海水  
體は桶器

壽命は身體の内外に住すといふ。豈味ふべき玄語にあらずや。而して此の語、非人格的靈魂不滅を説けるものと謂ふべし。右報徳教の壽命無量靈魂不滅論を明にす。

九 天道と人道（物理と倫理）

天道と人道とを、物理と倫理とに對比するは、唯概定したるのみなり。人道は勿論倫理なりと雖も、天道は即ち物理にあらず。翁が天道を説くこと、到れり盡せり。前各章に詳述したる報徳教の哲理は、是即ち天道論なり。其の範圍の廣大なる、固より一科の物理学を以て之に對比するを得べからずと雖も、然も其の天道と人道との區別を論ずる場合に於ては、天道を以て單に自然の理学とし、主として物理的方面より觀察解釋したれば、今便宜上翁が天道論を、廣汎なる意味の物理学と對比し、以て人道の倫理に於けると、一對をなさしめたり。讀者此の一事を以て、翁を唯物論者なりと誤解するなからんを望む。

開田の譬論

「萬物發言集」に曰く  
 「勞身耕田 耕田植稻 植稻得米 噴米養體 養體保壽 天道自然」  
 勞身耕田 耕田植稻 植稻得米 噴米養體 養體保壽 天道自然  
 夫元一圓原 國民乏衣食 從天量地理 逆天開田島 從天爲自然  
 名之謂天道 以人爲作事 名之謂人道 人道開田島 天道廢田島  
 人道植五穀 天道爲生育 天道爲自然 人道爲作事 天道和入道  
 百穀結實法 原一變爲田 田一變爲稻 稻一變爲米 米一變爲人」  
 天道人道の區別を論じて、最も簡にして要を得たるものにあらずや。更に左の一節に至りて、其の區別の嚴正明白なる、恰も化學試験紙が、一たび之を液に浸せば、忽ち液の酸性か鹽基性を色別し得べきが如し。人若し翁の試験紙に照さば、其の天道たり人道たるを知ること、一見甚だ容易ならん。曰く  
 「天道者與受惡施」 人道者與受惡施  
 「天道者與樂與苦」 人道者與樂惡苦  
 「天道者與富與貧」 人道者與富惡貧

試験紙



天道者與得與失  
 人道者與得惡失  
 天道者與吉與凶  
 人道者與吉惡凶  
 天道者與福與禍  
 人道者與福惡禍  
 天道者與榮與辱  
 人道者與榮惡辱  
 天道者與益與損  
 人道者與益惡損  
 天道者與安與危  
 人道者與安惡危  
 天道者與易與難  
 人道者與易惡難  
 天道者與興與廢  
 人道者與興惡廢  
 天道者與貴與賤  
 人道者與貴惡賤  
 天道者與天與壽  
 人道者與壽惡夭  
 天道者與勞與逸  
 人道者與逸惡勞  
 天道者與勝與負  
 人道者與勝惡負  
 天道者與賞與罰  
 人道者與賞惡罰  
 天道者與治與亂  
 人道者與治惡亂

天道は無私

人道は有私

天道者與強與弱  
 人道者與強惡弱  
 天道者與生與死  
 人道者與生惡死  
 天道者與盛與衰  
 人道者與盛惡衰  
 天道者與壘與荒  
 人道者與壘惡荒  
 天道者與息與勤  
 人道者與息惡勤  
 天道者與奪與讓  
 人道者與奪惡讓  
 天道者與驕與儉  
 人道者與驕惡儉  
 天道者與利與義  
 人道者與利惡義  
 天道者與愚與賢  
 人道者與愚惡賢

天道は無差別的、人道は差別的なり。但し此の節の「人道の意味は人心人情の意味に引き附けて見るを可とす。故に次節には直に天道を君子の道とし、人道を小人の道として、前同様の比較をなしたる。未だ功利的作爲の人道に説き及ばざるなり。」

人ありて  
善惡あり

曰く「本來、道ありて、而して後人往來するにあらず。初發、人あり、往來して、而して後道と名づくるものなり。……」  
本來、善惡ありて、而して後人間を生ずるものにあらず。初發、人間ありて、而して後善惡を分つものなり」  
是に至りて、所謂作爲の人道あり。此の作爲の人道たるや、大體に於ては天道に従ひ、節目に至りて、或は天道に逆つて成る。前に所謂天に従つて地理を量り、天に逆つて田畠を開く、類即ち是なり。故に「大圓鏡」に於ては曰く「小人の常、明日薪を拾ひて、今日食を炊がんと欲す。以て天道の冥慮に逆ふ。是故に欲すと雖も、能はず、勉むと雖も、成らず。……」  
君子の常、今日薪を拾ひて、明日食を炊がんと欲す。以て天道の冥慮に順ふ。是故に欲して能はざることなく、勉めて成らざることなし」  
是天道に従ふの人道なり。  
又「萬物發言集」に曰く

天道論と  
純正哲學

「米を見て、直に米を得んと欲する者は、盜賊鳥獸に等し。人たる者は、須く米を得て、而して後米を得べし。……」  
富樂を見て、直に樂を得んと欲する者は、盜賊鳥獸に等し。人たる者は、須く勤勞して、而して後樂を得べし」  
是稍、人の情を矯め、天に逆つて作るの人道なりとす、衣のよのよも、……」  
翁が天道論の詳細は、前各章之を詳にしたり、之を報徳教の純正哲學に屬する部分といふべし。其の人道論の詳細は、以下各章に紹介す。即ち報徳教の倫理學なり。而して、此の章實に其の中間に在りて、略ぼ天道と人道との區別を明辨し得たるを信ず。  
○ 善惡の標準  
翁嘗て儒佛を評して曰く「儒佛は實を失へり、之を割烹に譬ふ。孔子の道は、將に割烹せんとして、庖人羞味の品目を奉ずるが如し。佛氏の教は、割烹終りて、徒に費す所の多寡を算するに似たり。皆未だ實味を覆せず」と報徳學、本教

佛は價を  
争ふのみ

報徳教は  
好味を要す

善惡は便  
宜を爲す

孟子を排  
斥す

に依る(即ち儒は唯獻立のみ盛にして、料理未だ成らず、佛は料理既に成りたれども、何宗は五戒十戒を以て成佛せしむと説き、何宗は以心傳心を以て成佛せしむと説き、何宗は念佛三昧を以て成佛せしむと説き、徒に其の料理代の高下を争ひ、何れも未だ實際の饗應をなさざるをいひ、共に人生の實用功利に迂濶なるを笑へるなり、然らば夫子自身の道、報徳教の道徳は如何、人道本來人爲なるが故に、大體天理に反せざる範圍に於て、人間の便宜利益を圖るものたらざるべからず、實用功利の道たらざるべからず、随つて道徳の根本たる、善惡の標準も、亦人間の便宜利益を基礎として、建立せられざるべからざるなり、前章に引きたる「萬物發言集」の「本來善惡ありて而して後人間を生ずるものにあらず、初發人間ありて而して後善惡を分つものなり」といへるが如き、先づ此の根本に向つて一鐵槌を下したるものにして、勿論人道人を論當然の結果なり、翁が常に孟子を排斥したるは、彼の詭辯を厭ひしと共に、其の淺薄なる性善説を嫌ひしなるべし

「農家大道鏡」に曰く、辨ひざる善惡、辨別すべし、人々の善惡、辨むべし

「寒風を好む者は暑に住む者なり、  
寒風を惡む者は寒に住む者なり、  
暖風を好む者は寒に住む者なり、  
暖風を惡む者は暑に住む者なり、  
寒暖元一圓一物なり、好惡は我が居る所に在り、  
見渡せば善きも惡しきもなかりけり、  
善のれが住所にぞある」

又曰く、價多きを好む者は賣る者なり、  
價多きを惡む者は買ふ者なり、  
價少きを好む者は買ふ者なり、  
價少きを惡む者は賣る者なり、  
多少元一圓一物なり、好惡は我が居る所に在り」として、又前掲の道歌を記す、

又曰く

『好利高者貸者也 惡利高者借者也』

好利下者借者也 惡利下者貸者也

高下元一圓一物也 好惡者在我所居

(道歌同前)

好荒蕪者鳥獸也 惡荒蕪者農民也

好發田者農民也 惡發田者鳥獸也

荒蕪發田元一圓一物也 好惡者在我所居

(道歌同前)

好不淨者稻麥也 惡不淨者人民也

好清淨者人民也 惡清淨者稻麥也

不淨清淨元一圓一物也 好惡者在我所居』

(道歌同前)

右善惡分別の動機を示せり。然れども斯くのみにては、即ち單純なる自利

自利利他の道徳

利己にして、殆ど禽獸に異ならず。故に人間は其の特有の智識に依りて、更に一層高等なる道徳を組成せざるべからず。一層高等なる道徳とは、兼愛功利、自利利他の道徳即ち是なり。

同書に曰く

『凡そ人間の道は、衣食を作出するに在り、其の潤澤を以て身命を養ふに在り。兩善に止まるに在り』

天地を信するのみ

兩善の文字に注意すべし。即ち自他の兩善をいひ、究竟するに萬物共善所謂眞樂後に出だすの主義をいへるなり。報徳學本教の著者小田又藏翁を傳する中に曰く「先生信ずる所獨り天と地とあるのみ(中略)嘗て謂ふ天地明信、物と相應ず。響の聲に於ける、影の形に於けるが如き是なり。故に稻種を播けば必ず稻を生じ、麥種を播けば必ず麥を生ず。此の理を推して以て之を驗するに、凡そ天地の間皆然らざるは無し。唱ふれば必ず之に和し、投ぐれば必ず之に報ゆ。萬物相仍り、生々息まず。其の徳たる亦昭著ならずや。是の故に善を種うれば善を産し、惡を種うれば惡を産し、小種小産、大種大産、不種不産、未だ



し、一切の物を白くなすことを司どるなり。又其の東西南北の傍に五味の造家あり。一軒は酒屋にして、一つの井の水を汲んで酒を造出すなり。一軒は酢屋にて、一つの井の水を汲んで酢を造出すなり。一軒は味噌屋にて、一つの井の水を汲んで味噌を造出し、一切の食物に味を與ふることを司どるなり。一軒は醤油屋にて、一つの井の水を汲んで醤油を造出し、一切の食物に味を與ふることを司どるなり。一軒は砂糖屋にて、一つの井の水を汲んで砂糖を仕立て、一切の食物に甘き味を付くることを司どるなり。右十家の前後左右を取巻き、一つの悪水落しあり。或は洗ひ流し、喰殘し、又は兩便とも流れ落ち、外に行くべき流れもなし。殘らず悪水落しの内にて消え、大地にしみ畢んぬ。翌朝は一つの井に歸り、清水となりて十家を養ふなり。是邊鄙片田家不便の十家のみならず、右十家の例を以て案ずるときは、天朝は言ふに及ばず、あらゆる國々も又々此の如くなりと知るべし。人生は、豈斯くの如きものにあらずや。宇宙は、又豈斯くの如きものにあらずや。

善惡の標準略ぼ右の如し。然れども元來善惡不二一物なれば、惡は固より善と雖も、決して極端偏僻に陥ることあるべからず。故に「農家大道鏡」には曰く

善人の非

「善人の非を見るは惡人に如かず。善人は善に僻す。故に善人の非を見ること能はず。」

惡人の非

「惡人の非を見るは善人に如かず。惡人は惡に僻す。故に惡人の非を見ること能はず。」

と。又曰く

「善者は惡者を見て心に慮る。」

「惡者は善者を見て心に慮る。」

又「萬物發言集」には曰く

「善を以て不善を賛げ、不善を以て善を賛く。」

又曰く

「馳行すと雖も、遠きに至らずんば迷道にあらずや。」

忠信の弊

善を爲すと雖も、善に至らずんば迷善にあらずや』  
然らば善に至ること如何。報徳金毛録に於て答へて曰く  
『忠信を盡して、其の弊を知らざれば、忠信に至らず。  
忠信を盡して、其の弊を知るあれば、必ず忠信に至る』  
更に「萬物發言集」に曰く

『一行正直を爲す、是を名づけて至孝至忠といふ。

一行曲惡を爲す、是を名づけて不孝不忠といふ。

一心清濁を爲す、是を名づけて迷悟といふ』

翁が善惡邪正を説くこと、圓轉滑脱の妙を極む。讀者玩味工夫すべし。

善人の世

一 片樂と眞樂

翁戯に歌うて曰く

「ちうくと歎き哀む聲聞けば

雀の地獄鷹の極樂』

鼠猫の苦樂

又曰く

「ちうくと歎き哀む聲聞けば

鼠の地獄猫の極樂』

弱肉強食

好意惡弊の戦

是勿論、生存競争、優勝劣敗、弱肉強食の世相を、最も明白に道破したるものなり。蓋し進化論的功利説の性質として、一應此の斷案に到達せざるを得ず。泰西の唯物的功利論者が、何れも然る所にして、彼等の中には、強者が其の好意を以て、弱者を扶助するは無益有害なり。斯る惡弊全滅し、人々各獨立して、一に力戰奮闘に是頼るに至りて、始めて眞の文明は現出し來るべしと説くものすらあり。若し人情世態などいふ情實を脱離し、純理論として之を考察すれば、亦一面の眞理ならざるにあらず。單に一見して感ずるが如く、殘酷亂暴なる議論にあらざるなり。然れども遠き將來、數十百千萬年の後、人々天賦相平均し、物欲智力等差なく、世に優勝劣敗するの餘地なく、必要もなく、共同和樂し得る時代ともならばいざ知らず、現世界の不平均なる、缺陷多き人生に於て、斯くの如く極端なる理想を以て、倫理道德の原則となさば、世は忽ち

世は修羅場

強者の義務

兩全の眞樂

警藤高行の眞樂經

修羅場となりて、單に弱者が生存し得ざるのみならず、強者も亦多く生存するを得ざるべし。如何にも今日にても、世は或程度に於て修羅場なり。然れども、右の議論を採用せば、世は唯部分に於てのみならず、全然修羅場と化し了すべきことなり。是に於てか、則ち兼愛功利の説あり、強者の權利を認むると同時に、亦其の義務を認め、強者をして、其の強を恣にせしめず、弱者をして、其の弱を守るを得しむ。道德本來の目的として、當に然るべき所なり。

故に翁は、一應右の狂歌を以て、弱肉強食の理を示したれども、直に之を片樂なりと貶して、之を戒め、別に兩全の眞樂を求めて、常に之を鼓吹したり。所謂兩全の眞樂とは何ぞや。曰く天地の樂、草木の樂、人倫の樂、農夫の樂、聖人の樂、貧富の樂、之を綜ぶるに報德の樂、即ち是なり。請ふ少しく之を解釋せん。

翁の高足齋藤高行、嘗て戲に「佛說眞樂經なるものを著す。即ち「如是我聞、尊德如來靜座於櫻町、與報德衆萬二千人、及沙石草木魚虫無量恒河沙俱」云々と、都て佛說何々經の體裁を模して、片樂眞樂の理を説きたるものにて、文は戯れたりと雖も、其の論説は眞率なり。要旨を摘めば左の如し。

尊德如來

と吉良弗

と吉良弗

と吉良弗

と吉良弗

と吉良弗

「尊德如來櫻町に於て、或時其の徒の前に歌うて曰く、ちう／＼となげきかなしむ聲きけば、雀の地獄鷹の極樂と。沈吟數回、遂に他言なし。吉良弗(翁)の門下に吉良八郎あり。取つて佛弟子の舍利弗に擬したるなり。立つて禮拜して問うて曰く、地獄極樂には唯雀と鷹とあるのみか。如來答へず、又歌うて曰く、ちう／＼となげき哀む聲聞けば、鼠の地獄猫の極樂と。衆一も解する者なし。是に於て尊德如來は、吉良弗を呼びかけて説いて曰く、夫れ三千大千世界は、皆迷ふが故に三界城なり。今我が説法を聞かば、忽ち悟るが故に十方空なり。然れども人若し五蘊を解脱し、十方空に至れば、何の趣味もなく、木石に異ならず。故に再び三界城に歸る。されば迷ふは固より不可。悟るも亦無益なり。抑、我が道の衆生、濟度は之に異なり。唯片樂を棄て、全樂を取り、衆生をして片樂を免れて、全樂を得しむるに在り。前に歌ひしは片樂にして全からず。則ち眞樂にあらざるなり。夫れ三千大千世界の衆生、貴賤大小皆片樂を求めて極樂を得ること能はず。鷹は雀を獲て樂み、雀は鷹の殘害に悲泣す。猫の鼠に於ける、亦然り。豈翅猫鼠と鷹雀とのみならんや。



天地の樂  
草木の樂  
人倫の樂  
農夫の樂  
聖人の樂  
貧富の樂

大凡生を受くる者皆此くの如し。是の樂は即ち彼の苦なり。彼の樂は即ち是の苦なり。苦樂錯交、極まりなし。故に今、猫は鼠を獲るを極樂とするも、忽ち犬に獲られて地獄に墮つ。鳥獸虫魚交互に、地獄極樂を相爲し、因縁輪廻止む時なし。人事亦固より斯くの如く、漁夫が魚を獲、獵夫が鳥獸を獲るは、漁夫獵夫の極樂にして、魚介鳥獸の地獄なり。官は貢税の多きを樂み、民は之に苦む。爭鬭爭論は勝者の極樂にして、敗者の地獄なり。皆是片樂にして全樂にあらず。小人凡夫の喜ぶ所にして、如來菩薩の大に哀む所なり。汝等速に三界城の苦樂を脱して、我が眞樂の臺に登れと。吉良弗更に眞樂を問へば、教へて曰く、夫れ眞樂とは兩全の樂をいふなり。大化流行し、陰陽相和し、萬物發生す。是天地の樂なり。根葉相通じ、花實繁茂す。草木の樂なり。男女相和し、子孫榮ゆ。人倫の樂なり。農夫稻麥の爲に糞培して、稻麥快樂を得て成熟を遂げ、依つて秋收を得るは農夫の樂なり。君仁政を布いて民歡喜し、德に報ゆるは聖人の樂なり。貸す者無利子の財を以てし、以て貧民の苦を除き、共に相樂むは貧富の樂なり。凡そ兩全兩樂にして片ならざるもの、豈

眞樂菩薩

是仁人世を救ふの眞樂にあらずや。今行ふ者なしと雖も、數百歳の後、眞樂菩薩の出づるあらば、則ち片樂を排絶し、眞樂を以て衆生を濟度し、三千大千世界をして、悉く極樂に歸せしめんと、説き給へば、吉良弗及び報德衆草木種等拜して、皆悉く歡喜踊躍し、信受奉行す」と云々。

天理は輪鋸機

夫れ片樂は事實なり。自然なり。自然は即ち天理なり。天理は遁るべからずと雖も、其の適用には選擇の餘地あり。此の餘地の範圍に於て、適用の方法を規定す、人道なるもの即ち是なり。翁曰く「天理に逆つて田島を開き、天理に順つて稻麥を植う」と。例へば輪鋸機の如し、輪鋸は即ち天理なり。板も切り柱も切り、堅にも切り横にも切り、木も切り亦人も切る。觸るゝ所のもの悉く切る。工匠は即ち人道の作爲者なり。堅を可とするとき堅を擬し、横を利とするとき横を擬し、各其の要する所を以て之に擬し、輪鋸の天理を活動せしめて、目的の木材板材を製造す。二宮翁が觀たる道徳は、正に斯くの如くにして、吾人の祖先に依りて作爲せられ、爾來幾多の變遷を経て、將來永久精製を待ちつゝあるものなり。然らば則ち天理なればとて、人類生類に不利なる部分は、勉

前途遠大

めて之を除かざるべからず。決して放任すべからざるなり。片樂を卻けて眞樂を取るもの、是が爲なり。而して其の實現を後世に期す。報徳教道德の前途亦遠大なりと謂ふべし。

然るに翁に猫鼠片樂の道歌ありて、翁及び諸弟子に、未だ眞樂の道歌の作あらざれば、著者不倫を顧みず、試みに其の意味を三十一文字に駢べて、姑く缺を補はん。

眞樂の歌

忠と呼び妙と答へて猫鼠  
ともに樂むしんらくの國  
などは如何にや。

## 一二 孝は道德の始

萬物共贊の順序

萬物共贊は原理なり。然れども之を實用するに方ッては、自ら順序なきこと能はず。順序とは何ぞや。近きより遠きに及ぼすこと是なり。親より疎に及ぼすこと是なり。曰く何をか近とし、遠とし、何をか親とし、疎とせん。翁曰く「天

父母我を生む

何が故に我を生せる。我何の所より來れる。之を我が心に問ひ、之を我が心に答ふ。終日食はず、終夜寝ねず、之を思ひ之を惟ふも別に得る所なし。唯父母我を生めるを知るのみ。然らば則ち父母に孝事し、父母を安んずるの外、豈他道あらんや。故に報徳教の道德は、孝に始まる。父母は宇宙の萬物中に於て、最先に我に關涉し、我に最近最親のものなればなり。豈嘗に最先最近最親とのみいはんや。我は勿論父母の分身にして、一身同體なればなり。故に翁は「萬物發言集」に於て説いて曰く

孝は無我

『孝を問ふ。曰く父母に事へて我無きなり。  
孝を問ふ。曰く父母の憂を以て我が憂となし、父母の樂を以て我が樂となす。此くの如くなれば父子一體なり。  
不孝を問ふ。曰く我が樂を以て父母の憂を知らざるものなり』  
又曰く

三尊は父母と我

『三尊をいへば本來は天地人なり。又曰く父母我なり』  
即ち父母を以て天地に配す。父母は天地の代表者なり。夫れ父母の前は祖

孝は敬天の始

報徳教の極致

先なり。祖先の前は又祖先なり。祖先の前幾千萬世に至れば、天地に歸す。故に父母を溯れば、天地に至る。然らば、則ち父母に事ふるは、天地を敬するの始にして、以徳報徳の出發點にあらずや。故に曰く、報徳教の道徳は孝に始まると。夫れ始あるものは終あり。敢て問はん、報徳教道徳の終や如何と。曰く、亦唯近きより遠きに至るのみ。父母の次に兄弟あり。茲に友あり。國家を組織し、國君を奉ず。茲に忠あり。隣人と交り、社會に處す。茲に信義仁愛あり。動物に對す。茲に慈あり。植物に對す。茲に悲あり。萬物に對し、天地に對す。茲に敬あり。一元に對す。茲に虔あり。虔敬の至り、我なく、物なく、自なく、他なし。有無を絶して、神と同化す。誠明の至極なり。之を報徳教道徳の極致となす。翁曰く、天地と君と親とのめぐみにて、世をやすらはひ徳にむくえや。

### 一三 食は經濟の始

報徳教の經濟は、其の實道徳の一部たること、猶其の政治が、亦道徳の一部

經濟は道徳の一部

たるが如し、故に經濟と稱するも、獨立したる經濟にあらず、必ず、道徳を伴ふなり。翁曰く、「既に此の身あり、一日も食無かるべからず」と。則ち食は經濟の始なりといふべし。

萬物發言集に曰く

「身之因謂食、食之因謂米、米之因謂稻、稻之因謂肥、肥之因謂糞、糞之因謂身」

又曰く

食は此身

「今私に案ずるに、食の徳は即ち此の身、食なり。食は此の身なり。然らば、則ち昨日の食は今日の我が身、今日の食は翌日の我が身なり。食と身とは、合して一體となす。唯是本末あるのみ。元來一體、一物一體なり。體あれば、則ち心あり。心あれば、則ち體あり。身に因つて、古を慮れば、則ち父母祖先より、以て食の徳有らざることなし。夫豈其の恩なきを得んや。是より以來、子孫に至るまで、永久亦此くの如し。故に以て其の徳に報せずんばあるべからざる

なり』

即ち食は亦報徳の一本本なるをいふなり。蓋し人、先天的には父母に依りて生まれ、後天的には食に頼りて活く。父母の徳と先後本末の差はあれども、偏廢するを得べからず。随つて父母の徳に報ずるの道と、食の徳に報ずるの道とは、亦偏廢するを得べからず。父母の徳に報ずるの道とは、孝是なり。食の徳に報ずるの道とは、勤業是なり。翁曰く『徳は本なり、財は末なり』と。道徳と經濟と本末の差はあれども、偏廢するを得べからざるなり。

又曰く

燕の說  
『燕は吾朝に生ず。吾朝の鳥なり。何すれど辛苦艱難を厭はず。萬里の大海を濟りて、南國に往來するや、唯食を求めんが爲なり。命をなすこと食に在り。故に食の貴きこと身命に勝る』

曰く

雁の說  
『雁は北國に生ず。北國の鳥なり。何すれど辛苦艱難を厭はず。萬里の大海を濟りて、吾朝に往來するや、唯食を求めんが爲なり。命を爲すこと食に在り。

故に食の貴きこと身命に勝る』  
曰く  
『四濱の漁人地上に生まる。則ち地上の人なり。何すれど地上を去つて海上に出で、風波の危きを厭はず。辛苦艱難をなすや、唯食を求めんが爲なり。命をなすこと食に在り。故に食の貴きこと身命に勝る。古より今に至る、身命を棄て、勤苦をなし、食を求むる者を見る。未だ身命を愛して、餓死を好む者を開かざるなり』

漁人の說

食を解すること切實なりと謂ふべし。食は無論身命の基なり。身命なければ人民なく、人民なければ國家なし。故に國家も亦食に依つて存す。翁曰く『天能生稻、稻能生米、米能養人、人能治國』  
と。人能く國を治むといふは、被治者も其の中に在りと見るべし。即ち食ありて國あるをいふなり。

原人時代

既に飲食ありと雖も、太古村里無名、獨々住、面々自己飲食をなす時代に在りては、未だ財寶の生ずる理なし。之を天下無財寶といふ。天祿増減鏡、次に物

天下無財

々交換より進みて、一定の交換代表物を生ず。財實即ち通貨是なり。翁曰く  
米之代、謂、金、金之代、謂、酒、麥之代、謂、金、金之代、謂、酢、穀之代、謂、金、  
金之代、謂、食、

既に通用あり通用あれば増減貸借亦發生す。

「天祿増減鏡」に曰く

増減貸借

「夫れ元一圓無財なり。財未だ發せず。則ち貸借なし。財を發すれば自然に通  
用生ず。通用あれば則ち増減生ず。増減あれば則ち貸借生ず。財實を發して  
萬世に至る。通用増減貸借あり。之を天理自然と謂ふなり。」

貧富損益

既に増減貸借あり。貧富損益なきこと能はず。貧富損益とは何ぞや。翁は「萬  
物發言集」に於て之を解して曰く

「一財走止をなす。之を名づけて貧富と謂ふ。

貧人の類

「一實往來をなす。之を名づけて損益と謂ふ。」

と例に依つて明快適切なり。斯くて、大圓鏡の所謂「富外無貧、貧外無富、富貧を  
合して一實となす」の一元に歸着す。則ち富も誇るべきものにあらず。貧も憂

貧富は友  
なり

ふべきものにあらずとなすは、報徳教經濟の財實觀なり。随つて貧富は相和  
すべきもの、相闘ぐべきものにあらざるなり。曰く「富を以て貧を賛け、貧を以  
て富を賛く」と又曰く「富は財實を惠んで、衣食住を爲らざるものなり。貧は  
手足の苦を爲して、衣食住を爲るものなり」と。

然るに世間往々にして、貧富相闘ぎ相争ひ、或は亂を爲すに至る。畢竟互に  
相闘するの結果なれば、其賛協和を保たんと欲せば、互に其の僻を去らざる  
べからず。故に「農家大道談」には曰く

「富人の非を見るは貧人に如かず。富人は富に僻す。故に富人の非を見るこ  
と能はず。

貧人の非を見るは富人に如かず。貧人は貧に僻す。故に貧人の非を見るこ  
と能はず。」

然れども互に他の非を見るのみにては、到底協和を得るの期なし。故に互  
に他を宥恕し、自ら自己の非を知るべしとて、

「貧にして富の非を見る者は不仁。」

貧にして貧の非を見る者は仁者。  
富にして貧の非を見る者は不仁。  
富にして富の非を見る者は仁者』  
と戒め論したり。

又曰く

『貧者は富者を見て心に慮る。

富者は貧者を見て心に慮る』

と凡そ是等の句言短くして意長し。よくよく玩味すべきことなり。

又富を得るの法を説きては、即ち曰く

『富を見て直に富を得んと欲する者は盜賊鳥獸に等し。人たる者は須く勤勞して而して後富を得べし』

斯くの如く報徳教の經濟は、食に始まりて貨幣となり、貨幣動きて貧富となり、貧富共贊して衣食住を生産するまでに發展したり。就いては是に關聯して、種々の要件、種々の注意、解釋を生じ來らざるべからず。乃ち翁は此の要

貨幣の應

求に應じて「天徳現量鏡」に於ては、無利子金助貸、有利子金増殖の計算を示し「地徳開倉積」に於ては土地開發の方法を示し、驕儉盛衰鏡に於ては個人團體生計の得失を示し、其の他櫻町の仕法に關しては、耕作境界線の理を論じ、日光仕法雛形に於ては、事業施行の順序を説きたり。其等の大要は本書第二篇仕法の部に説明すべし。

#### 一四 報徳訓及び其の沿革

報徳訓は現今世に知られたるもの唯一種あり。即ち父母根元在天地令命云々の十二句百有八文字の報徳訓と、其の解と是なり。然れども之を翁の遺書に檢すれば、約三種の報徳訓あるを見る。其の第一は「報徳訓」と命じたる獨立一卷の著書にして、漢文五字の對句を以て、天地萬物に對する報徳訓を網羅し、第二は是等を結合して十二句百八字となしたるもの、即ち現行報徳訓の前身なり。第三は第二の字句を修正したる現行報徳訓即ち是なり。之を漢詩に譬ふれば、第一は長篇の五言古詩にして、第二は唐代調の九言排律、第三

三種の報徳訓

古詩的と律詩的と

は近代調の九言排律とも稱すべく、之を國歌に譬ふれば、第一は長歌、第二は之を萬葉調の旋頭歌に反したるもの、第三は其の旋頭歌を更に古今調に繕ひたるものとや謂ふべからん。固より報徳教の大眼目大綱領、少くとも其の倫理學應用の方面を代表すべき、大格言のことなれば、幾數回の改削を経、幾多の變遷を通過したるは其の所なり。今之を對照比較し、歴史的に説明せん。

第一 書名の報徳訓

書名に冠したる「報徳訓」は、一卷數十紙、都て漢文にして、混沌、天地、五行、神佛、聖賢、山林、河海、身命、誠心、五倫、五常、衣食住、四民、田畠家財、金銀米錢、船橋牛車、上下貴賤、貧富等數多の部門を分ち、各部門に數多の名目を集め、各其の徳に報ずべきことを説く、其の例左の如し。

混沌之部

無報空徳者 日夜失空徳 有報空徳者 日夜得空徳  
無報風徳者 日夜失風徳 有報風徳者 日夜得風徳

天地之部

無報天徳者 日夜失天徳 有報天徳者 日夜得天徳  
無報地徳者 日夜失地徳 有報地徳者 日夜得地徳

五行之部

無報木徳者 日夜失木徳 有報木徳者 日夜得木徳  
無報火土金水皆同じ

神佛聖賢之部

無報神徳者 日夜失神徳 有報神徳者 日夜得神徳  
無報國徳者 日夜失國徳 有報國徳者 日夜得國徳  
無報村徳者 日夜失村徳 有報村徳者 日夜得村徳  
(自餘略す)

此の他山徳、海徳、身徳、心徳、父徳、子徳、君徳、臣徳、衣徳、食徳、田徳、米徳、農徳、商徳、凡そ一切萬物の徳を報ずるなければ、日夜に其の徳を失ひ、報ずるあれば、日夜に其の徳を得ることを示す。猶米代を拂へば米徳を得、米代を拂はざれば米徳を失ふといはんが如し。誠に理義明白の言なり。次には

『常無報天徳 常失天徳也 常有報天徳 常得天徳』  
等の句、又數百を列し、最後に翁が衣食觀を附記す。其の語に曰く

『飲食の根元は身體を養へば足る。

美食の根元は忠孝を分つ爲なり。

美食を恣にすれば忠孝を分たず。

飲食を同じくすれば禮敬に形なし。

衣服の根元は寒暑を凌げば足る。

美服の根元は位官を分つ爲なり。

美服を恣にすれば位官を分たず。

衣服を同じくすれば貴賤に形なし』

根元の文字に注意すべし、必ずしも其の末に拘泥すべからず。

報徳の原  
理  
報徳の方

斯くの如く翁が報徳訓なる特別なる一著書には、凡そ一切萬物の徳に報せざれば其の徳を失ひ、之に報ずれば其の徳を得る旨を説きたれども、未だ其の如何にして之に報ずべきかを言はず、別に萬物發言集に於て、始めて其の一端を漏らせり、曰く

『時日の恩を報せんと欲せば時日の貯を爲せ。

去月の恩を報せんと欲せば來月の貯を爲せ。

去年の恩を報せんと欲せば來年の貯を爲せ。

過去の恩を報せんと欲せば來世の貯を爲せ』

と云々。是十二句報徳訓の年々歳々不可忘報徳の根元にして、其の意は即ち時日の恩徳を報ずるの途は、唯時日の貯を爲すに在り。然るに人は既往に溯りて既往の事を爲すこと能はざれば、既往の恩徳を報ずるの途は、之を將來に向つて爲すの外あるべからず。されば去月の恩に對しては、來月の貯をなし、去年の恩に對しては、來年の貯を爲し、前世の恩に對しては、來世の貯をなすべしといふに在り。之を人倫に譬ふれば、祖先前人の恩徳は、之を其の當人に報ずること能はざれば、其の神靈を尊敬祭祀するの外、後世に對して德澤を垂れ、以て反射的に祖先前人に報せざるべからず。父母の恩は現在なれば、現在の時日に於て、報じ得るだけ之を報ずべきは論を待たず。父母歿して後は、専ら徳を子孫に遺し、家系を永續繁榮せしむること、即ち父母の恩を報ずるの道なり。此の理を以て之を推せば、空氣の徳に報ずるの道は、空氣の貯を



萬物を貴重す

なすに在り。水火の徳に報ずるの道は、水火の貯をなすに在り。貯をなすとは、外ならず。愛惜貴重すること。是なり。愛惜貴重するとは、他なし。物當然の効用を、最善に遂げしむること。即ち是なり。此の故に、空氣を清潔純良にし、誠實に之を呼吸するは、空氣を愛惜貴重するの至なり。米麥を煮て之を喰ひ、麻綿を織りて之を着るは、米麥麻綿を愛惜貴重するの至なり。天地萬物皆此くの如し。故に前第十二章に報徳教の道徳は親に事ふるに始まり、一元の神に虔誠なるに終ると説きたる如く、報徳の道は、天地萬物を愛惜貴重するに在り。天地萬物を愛惜貴重するとは、人間心力の限に於て、之を最高最廣最大最美最真最善に受用すること。即ち是なり。世或は報徳教が、天地人三才の徳に報ずると説くは、所謂自然物禮拜にして非學理的なりと難ずる者あれども、畢竟此の理を究めざるが爲なるべし。淺薄と謂はざるべからざるなり。

とを得べし。左に掲ぐ

『無天地慈愍不萬物生育』 倚天地慈愍爲萬物生育 萬物生育者在天地慈愍

無神佛擁護不諸災降伏 純神佛擁護爲諸災降伏 諸災降伏者在神佛擁護

帝威無嚴重不四海安寧 據帝威嚴重爲四海安寧 四海安寧者在帝威嚴重

武威無政道不國家平治 仗武威政道爲國家平治 國家平治者在武威政道

無農民耕耘無次年衣食 因農民耕耘保次年衣食 次年衣食在農民耕耘

無儒館譏論不辨聖賢道 因儒館譏論爲辨聖賢道 辨聖賢道在儒館譏論

(以下結句のみを掲ぐ)

揮毫辨用者在書家教導 疾病快愈者在醫家療功  
間務算法者在數者訓傲 諸舍造建者在工匠勤勞

諸品廻便者在商賈運送 萬器自由者在諸職作業」

以上蓋し第一期の報徳訓なり。而して書名の「報徳訓」一巻は、其の年月を記さざれども、天保五年以前なりしこと疑ふべからず。「發言集」と「金毛録」とは、何れも天保五年の著にして、而して右の報徳訓は此の二書に先だちたりと思はるればなり。

第二 十二句報徳訓

第二期第三期の報徳訓、共に十二句百八字より成る。然るに單に第二期にのみ、十二句報徳訓と題するは、其の始めて十二句となりたるものなればなり。第三期は現行報徳訓として之を分つ。

此の報徳訓は、第一期の稍、散漫なる諸報徳訓が、概括調煉せられて結晶し、始めて十二句百八字の一聯句となりたるものにて、猶粗硬の感を免れず、概しては之を粗製品とも稱すべし。か報徳金毛録の中に在れば、則ち同書著作の時、天保五年に成りたるものなるべし。

先づ圓圖の十二方に靈命、生育、配偶、勤功、陰徳、勤勞、衣食住、樹藝、竭力、産業、艱

第二期  
九言報徳  
訓

粗製品

難、年歳を配し、中央に報徳を置く。是翁が得意の圓圖配當にして、之を文章となしたるもの左の如し。

「父母、渾元、在、天地、靈命、」

自己全體在父母生育

「子孫克肖在夫婦配偶」

家運繁昌在祖先勤功

「己身富貴在父母陰徳」

子孫富饒在己勤勞

「身命長養在衣食住三」

衣食住三在田圃樹藝

「田圃樹藝在人民竭力」

今年衣食在昨年産業

「來年衣食在今年艱難」

年年歲々不可忘報徳

「次に報徳解を掲ぐ」

不天地靈命無父母渾元

「不天地靈命無父母渾元」

憑天地靈命發父母渾元

「悟父母渾元在天地」

靈命

「三限(以下類推すべし)」

右を第二期の報徳訓とす。

第三 現行報德訓

第三期、即ち現行の報德訓は、無論第二期報德訓の精製品と見るべく、而して其の年代は天保五年以後、同七年以前なるべし。天保五年の「天徳現量鏡」巻首にも之を掲ぐるを見れば、第二期「金毛録」の報德訓に引續きて完成したるものとも思はるれども、單に巻首に添附されたるのみなれば、或は後年之を加へたるやも測り難し。天保八年二月には、江戸にて之を木版に附したる程にて、當時諸方に傳播したり。固より報德教の大綱領にして、少くとも其の倫理的應用の方面を代表する旗幟と謂ふべし。左に之を分解評釋す。

精製品

上は天地より説き起して、下は未來年々歳々報德を忘るべからざるをいふ。百有八字、九言十二句、四節二段を以て成る。

「父母根元在天地、命令身體根元在父母、生育子孫相續在夫婦、丹精」

右第一節、自己を中心として、先は天地に至り、後は子孫萬世に至る種族相續の理を説く。即ち我は父母天地の所産なれば、其の恩徳に報せざるべからず。其の法、子孫相續の爲に丹精するに在り。其の子孫も、其の又子

其の分解  
と評釋

孫も、未來永々斯くの如しとて、遂に末句年々歳々不可忘報德を喚び起す。而して、此の節主として心身血統の方面をいふ。

父母富貴在祖先勤功、吾身富貴在父母積善、子孫富貴在自己勤勞

右第二節、祖孫連綿、富貴を相續するの方面を説く。趣旨は第一節に同じ。但し富貴は社會國家發生して後の事物なるが故に、祖先を言うて天地

を言はず。以上第一節二節主として人間道德關係の方面より説明す。前第十二章

孝は道德の始を參照すべし。

身命長養在衣食住三、衣食住三在田畑山林、田畑山林在人民勤功

右第三節、人間生存の術を説く。

今年衣食在昨年產業、來年衣食在今年艱難

右第四節、今年今日唯今を中心として、人間生存の資料、即ち衣食住

産出の次第を説く。

以上第二段主として經濟方面より説明す。第十三章、食は經濟の始を參

年々歳々不可忘報德

右一句第四節の末に在り第四節を結ぶと同時に全章十一句を結ぶ故に之を引離して特に重く解するを至當とす即ち父母の根元は云々身體の根元は云々子孫相續は云々なるが故に年々歳々報德を忘るべからず衣食住は云々なるが故に年々歳々報德を忘るべからずといふ如く此の句を各節の末に結び附けて見るべし思半に過ぐるものあらん次に報德解の文左の如し

報德解

「無天地命無父母根元」 思父母根元在天地命 因天地命生父母根元  
無父母生育無身體根元 思身體根元在父母生育 因父母生育生身體根元  
無夫婦丹精無子孫相續 思子孫相續在夫婦丹精 因夫婦丹精生子孫相續

無祖先勤功無父母富貴 願父母富貴在祖先勤功 依祖先勤功成父母富貴

無父母積善無吾身富貴 願吾身富貴在父母積善 依父母積善成吾身富貴

無自己勤勞無子孫富貴 願子孫富貴在自己勤勞 依自己勤勞成子孫富貴

無衣食住三無身命長養 討身命長養在衣食住三 賴衣食住三得身命長養

無田畠山林無衣食住三 討衣食住三在田畠山林 賴田畠山林得衣食住三

無人民勤耕無田畠山林 討田畠山林在人民勤功 賴人民勤耕得田畠山林

無昨年産業無今年衣食 求今年衣食在昨年産業 由昨年産業濟今年衣食

無今年艱難無來年衣食 求來年衣食在今年艱難 年々歳々不可忘報德」  
 以上報德訓の沿革なり。されば現行報德訓を讀みて、若し其の疑義を質さ  
 んと欲せば、第二期報德訓に溯るべし。更に其の深義を明めんと欲せば、第一  
 期に溯るべし。猶更に其の精義を究めんと欲せば、前各章に説明したる、報德  
 哲學の數々の原理に溯るべきなり。

一五 施受訓と勤惰訓

財受と施

基督曰く「與ふる者は幸なり」と、然らば受くる者は禍なるか。曰く然り。豈其  
 れ然らんや。受くるに道あり。道を以てせば亦必ず幸ならん。與ふるに道あり。  
 道を以てせずんば亦必ず禍ならん。二宮翁が施受を説くこと、明確にして懇  
 篤なり。天祿増減鏡に載するもの數百句、今其の中の主要部分若干を抜抄す。

「恐<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>財<sub>レ</sub>樂<sub>レ</sub>身<sub>レ</sub> 其身<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>身<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>天<sub>レ</sub>命<sub>レ</sub>  
 年々<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>德<sub>レ</sub>減<sub>レ</sub>分<sub>レ</sub>内<sub>レ</sub> 其身<sub>レ</sub>士<sub>レ</sub>德<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>天<sub>レ</sub>命<sub>レ</sub>  
 月々<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>德<sub>レ</sub>減<sub>レ</sub>分<sub>レ</sub>内<sub>レ</sub> 其身<sub>レ</sub>農<sub>レ</sub>德<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>天<sub>レ</sub>命<sub>レ</sub>

日々<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>德<sub>レ</sub>減<sub>レ</sub>分<sub>レ</sub>内<sub>レ</sub> 其身<sub>レ</sub>工<sub>レ</sub>德<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>天<sub>レ</sub>命<sub>レ</sub>  
 時々<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>德<sub>レ</sub>減<sub>レ</sub>分<sub>レ</sub>内<sub>レ</sub> 其身<sub>レ</sub>商<sub>レ</sub>德<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>天<sub>レ</sub>命<sub>レ</sub>  
 刻々<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>德<sub>レ</sub>減<sub>レ</sub>分<sub>レ</sub>内<sub>レ</sub> 其身<sub>レ</sub>親<sub>レ</sub>德<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>天<sub>レ</sub>命<sub>レ</sub>  
 天命<sub>レ</sub>父<sub>レ</sub>母<sub>レ</sub>失<sub>レ</sub>德<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>  
 勤<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>勤<sub>レ</sub>苦<sub>レ</sub>身<sub>レ</sub>施<sub>レ</sub>財<sub>レ</sub> 其身<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>身<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>天<sub>レ</sub>命<sub>レ</sub>  
 年々<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>德<sub>レ</sub>増<sub>レ</sub>分<sub>レ</sub>外<sub>レ</sub> 其身<sub>レ</sub>士<sub>レ</sub>德<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>天<sub>レ</sub>命<sub>レ</sub>  
 月々<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>德<sub>レ</sub>増<sub>レ</sub>分<sub>レ</sub>外<sub>レ</sub> 其身<sub>レ</sub>農<sub>レ</sub>德<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>天<sub>レ</sub>命<sub>レ</sub>  
 日々<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>德<sub>レ</sub>増<sub>レ</sub>分<sub>レ</sub>外<sub>レ</sub> 其身<sub>レ</sub>工<sub>レ</sub>德<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>天<sub>レ</sub>命<sub>レ</sub>  
 時々<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>德<sub>レ</sub>増<sub>レ</sub>分<sub>レ</sub>外<sub>レ</sub> 其身<sub>レ</sub>商<sub>レ</sub>德<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>天<sub>レ</sub>命<sub>レ</sub>  
 刻々<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>德<sub>レ</sub>増<sub>レ</sub>分<sub>レ</sub>外<sub>レ</sub> 其身<sub>レ</sub>親<sub>レ</sub>德<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>天<sub>レ</sub>命<sub>レ</sub>  
 天命<sub>レ</sub>父<sub>レ</sub>母<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>德<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>

可<sub>レ</sub>恐<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub> 可<sub>レ</sub>恐<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>  
 可<sub>レ</sub>恐<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>貪<sub>レ</sub>財<sub>レ</sub>樂<sub>レ</sub>身<sub>レ</sub> 富<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>家<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>奢<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>  
 可<sub>レ</sub>恐<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>貪<sub>レ</sub>財<sub>レ</sub>樂<sub>レ</sub>身<sub>レ</sub> 終<sub>レ</sub>減<sub>レ</sub>祖<sub>レ</sub>先<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>餘<sub>レ</sub>澤<sub>レ</sub>  
 年<sub>レ</sub>減<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>分<sub>レ</sub>内<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>德<sub>レ</sub>月<sub>レ</sub>日<sub>レ</sub>時<sub>レ</sub>刻<sub>レ</sub>皆<sub>レ</sub>同<sub>レ</sub>じ  
 永<sub>レ</sub>斬<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>孫<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>遺<sub>レ</sub>福<sub>レ</sub>

可勤者

可勤者苦身施財 貧其家以約其用 年增其分外之德 (月日以下同前)  
可勤者苦身施財 終增祖先之餘澤 永生子孫之遺福

(恐可恐云々勤可勤云々亦前文に同じ)

從其人而稟分限 可恐者貪財樂身 年減其分内之德  
不守其分破其限 終減祖先之餘澤 永斬子孫之遺福  
從其人而稟分限 可勤者苦身施財 年增其分外之德  
安其分而守其限 終增祖先之餘澤 永生子孫之遺福  
因其生而受其命 可恐者樂身棄德 年減其分内之德  
悔其天而反其命 終減祖先之餘慶 永失子孫之後德  
因其生而受其命 可勤者苦身報德 年增其分外之德  
順其天而奉其命 終增祖先之餘慶 永加子孫之後德

右諸句には自ら勤惰の教訓を含むこと勿論なり然れども別に一種の勤惰訓あり世俗分内圖と稱するもの即ち是にして其の原金毛録に在り題し

好樂と勤苦

て富貴貧賤之解といへり先づ圓圖を二分して上下となし上を貧賤とし下を富貴となす解の辭に曰く

「好樂進分外 勤苦退分内 貧賤在其中」

好樂退分内 勤苦進分外 富貴在其中」

右施受勤惰要するに一理二面一體二用以て分つべく以て分つべからず皆第七章不止不轉の原理より來れり

### 十六 分讓訓

分限論  
軍馬士と將

分といひ限といふ之を守れば徳を増し之を守らざれば徳を減ずること前章にいへり然らば分限とは何ぞや

「悟道理論草案」に曰く

「天命無位無祿馬士の子孫に生るゝ之を性と謂ふ馬士に生れ早朝より馬を牽出し隣村近郷運送荷物輕重往來の里數に應じ厚薄とも其の日に得る所の賃錢之を分といふ」

分限一日に受くる所の貨錢を以て、過不及なく、父母妻子を養ふ、之を教といふ。

分限一日に受くる所の貨錢を以て、之を食し、之を飲み、之を着、父母妻子を養ひ、今日を營むこと、須臾も離るべからず。若し離るゝときは分にあらず、自然と困窮難澁致し終に妻子を道路に立たせ滅亡するものなり。

天命日本國中六十餘州、天の覆ふ所、地の載する所、之を性と謂ふ。

性に率ふ所、日本六十餘州、凡そ二千八百十九萬石。日月星辰の御恵を受け萬民耘り耕し、百穀熟する所、之を分といふ。

道を修むるとは、天の命ずる所、二千八百十九萬石を以て、上天子より下諸人に至るまで、之を食し、之を飲み、之を着し、或は神社城廓、四民の家財、又は山川海陸、船橋の修覆、窮民撫育、過不及なく、其の外、國中人非人に至るまで、飢えず寒えざる様和均する、之を教といふ。

分は須臾も離るべからずとは、日本國中の人民鳥獸蟲魚に至るまで、天地の命ずる所、須臾も離るべからず。若し離るゝときは、上下過不及を生じ、或

は亂暴し、又は飢渴に及び、國家衰へ、田畑荒れ、終に亡所となる。分は須臾も離るべからざるものなり』

右は、中庸の天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教、道也者不可須臾離也、可離非道也、の語に託して、翁が自説を開示したるものなり。語は則ち假れりと雖も、説は全く一家の見識なること、例の二宮流解釋法なり。

分を守り教を守りて、上は天子將軍より、下は馬夫に至り、各其の職業に勉勵しなば、勢ひ剩餘は生ずべし。果して剩餘生せば、之を讓るべし。之を讓らば、必ず實用あらしむべし。同書に曰く

『古語に一家讓れば、一國讓に興るとかや、其の根元を案ずるに、譬へば米千石の家株に生るゝ者、米千石にて暮すときは、讓るといふものにあらず。今爰に行ふに於ては、譬へば一石讓らんと欲するときは、一石讓るべし。一石の讓を受けて、一石の助を得るものなくんばあるべからず。又十石讓らんと欲するときは、十石讓るべし。十石の讓を受けて、十石の助を得る者なくんばあるべからず。又百石を讓らんと欲するときは、百石を讓るべし。百石

非理の受  
は奪なり  
分譲は二  
大手段

の譲を受けて、百石の助を得る者なくんばあるべからず。猶千萬億無量に  
至るまで、是皆然り。縦令譲るといへども、受得て助かる者なきときは、譲と  
いふものにあらず。捨つるに同じ。若し譲り受けて助かる者ありと雖も、譲  
り與ふる根元なきときは、譲を受けたるにあらず。奪ひたるに同じ。右等深  
く勘考して、常々相互に譲り行ふときは、一國譲に與るといふべきなり。』  
夫れ分譲は報徳の二大手段なり。分は鐵路の如く、譲は交通運輸の如し。鐵  
路の分を誤らず、交通運輸の譲を行ひ、以て目的地に達するは、即ち報徳の成  
就なり。既に分あれば、自ら餘あり。餘あれば、則ち譲るべし。餘あつて譲らざる  
を吝と謂ふ。既に譲らば、効なかるべからず。譲つて効無きを捨つといふ。譲を  
受くるに由なかるべからず。由なきの受は奪ふに同じ。右等前章施受訓、勤惰  
訓と参照して、人々深く勘考すべきことなり。

### 一七 種々の教訓

以上各章報徳哲學の原理及び主要なる教訓を紹介したり。然れども原理

及び教訓は、固より是に盡きたるにあらず。故に此の章に於て、先づ教訓の補  
遺ともいふべきものを掲げ、猶原理の拾遺、及び綜合的評論は、之を後章に收  
むべし。

種々の教訓左の如し、但し概ね要旨を摘録す。

#### 其の一

『錢金米三種配當有定鏡』に曰く

「今爰に錢一貫文あるとき、日數十日に割り、百文づゝに當る。百文遣へば殘  
錢九百文となる。又百文遣へば殘錢八百文となる。又百文又百文と百文づ  
ゝ十回遣へば、殘錢あることなし。是即ち天道自然なり。能く此の理を明辨  
致し申し度候事」

此の他米金皆同じく、猶鐵鎌柱杭棒牛馬等、何品にても異ならずとて、翁は  
數種の配當鏡を著して、之を品目毎に繰返したり。是西諺の所謂「二に二を加  
ふれば四となる」と同例にて、物各定理あり。定理に反して二二が六たらんこ  
とを欲し、十兩の金を五兩遣ひて、殘金十兩あらんことを希望するは、斷じて

一去れば  
一減る

本



不可なることを示す深意に出でたり。翁の教訓、兎角平凡無味に似たること多し。是其の非凡有味なる所以なり。

其の二

「萬物發言集」に曰く

水帳の説

「世に田畑檢地帳あり。名づけて水帳といふ。其の名づくる所以を知らざれば、名實適合せざるが如し。然れども其の源を考ふるに、實に深意ありといふべし。何となれば夫れ水は、平に治まり、不平に亂る。萬物亦皆然り。故に上古天祖天孫世々聖徳を以て國土を治め給ひ、田地を制し、經界を正し、法度を立て、收納を平均にして、萬世の治をなし給ふ。其の時、其の田畑の廣狹平均を定むるに、水を灌ぎて高低を見、平法を以て土地を度り、反畝歩を定め收穫に因つて等位を分ち、貢課を平均し給ひしなり。是に於て土地に得失なく、民に忿怨争奪なく、天下泰平、國家安寧なり。是即ち水帳と名づくる所以なり。云々」

二宮一流の考古學

是故實家の與り知らざる、二宮一流の考古學なり。

同説文學

又同書に於て漢字を解して曰く、心文字の根元をいへば、人の中に日月を書す。人の腹中に日月入る。心之を心とするなり。

元は日月の下に人を書す。天地人を合して元となすなり。仁は天地の傍に人扁を書す。人が天地日月を敬するを仁といふなり。

天は天地日月に人を書す。一字にして天地人の事を貫くなり。甲文字は大豆小豆、其の他木實、春始めて生ひ立つ形を以て文字となすなり。

乙は草木の生ひ立ち芽を出す形なり。又曰く、

「人間の根元をいへば、天に非ず、地に非ず。天地の間に物を生ず。故に二間と名づくるなり。本來草木蟲魚鳥獸及び人天地の間に在るもの、皆二間なり。

今は人のみを人間といふ』  
右は支那人の説文學に劣らざる、二宮一流の解字法なり。敢て其の解釋法の當否を云々するの要なし。唯是等の閑文字に託して、翁が發表したる、其の思想を窺ふべきのみ。(右甲乙二字の解は學者の説亦同じ)

其の四

偏倚の戒

又同書に曰く

『天地開闢以來萬代年歲今に至る、寒暑の分ありて其の序を失はず。寒退けば則ち暑來り、暑退けば即ち寒來る。寒と暑と代序す。寒重り暑重り、長く重ること未だこれ有らざるなり。寒長く重れば、即ち暑氣を失ふ。暑長く重れば、則ち寒氣を失ふ。陰陽和せず、寒暑時ならざれば、則ち萬物忽ち消滅す。寒に偏倚すれば凝滅し、暑に偏倚すれば燒滅す。是天理にして通れんと欲すと雖も、人力の及ぶ所にあらざるなり』

其の他呼吸には、一呼あれば一吸あり。呼々重り吸々重れば人は死す。又人倫には、一男あれば一女あり。男々重り女々重れば人生せず。人種を失ふ。或は

飽満の戒

又曰く

『若し人珍味を食すと雖も、節有るに如かざるなり。人皆以て行を謹まざるべからず。故に珍味と雖も飽食をなすこと勿れ。其の甚しきに及んでは、腹満して安からず。卒に病根をなして死亡に至る。所謂天理にして通るゝ能はざるなり』

人は行を謹まざるべからず。直情徑行なるべからず。珍味と雖も飽食すれば害あり。甚しきは死に至るとて、人の情欲を恣にすることを戒むるなり。

其の五

男女論

又同書に曰く

「天は萬物を恵んで形なきものなり。

地は萬物の形を現して生育をなすものなり。

男は萬人を恵んで形なきものなり。

女は萬人を現して生育をなすものなり」

又曰く

「女を得んと欲する者は、男業を爲すべし。願はずして女を得べし。

男を得んと欲する者は、女業を爲すべし。願はずして男を得べし」

「報徳金毛録」に曰く

「夫れ元一圓生死なり。未だ人生れず即ち男女なし。人生れて自然に男女を

發す。男女あれば必ず和合を發す。是猶陰陽異にして一なるが如し。男女も

亦復此くの如し。合して一なり。和合あれば子孫あり。子孫生ずれば父子の

別あり。父子の別を發すれば、必ず兄弟の差あり。兄弟の差あれば朋友の別

あり。君臣の差別を尙大なりとす。其の人倫の本を推せば一人に歸す。一人

變化して萬父となる。萬父の本を思へば即ち一人なり。男女本來無増減。相

繼いで萬世に至る。之を天理自然といふ」

又現今、今市二宮神社の寶物として存する、櫻町陣屋の杉戸の文に曰く「書

は不退堂なり」

「男至誠なれば則ち女氣を含む」

女至誠なれば則ち男氣を含む」

右男女の一元を説き、或は分業の状態を説く。而して男女あれば和合あり。

男業を爲せば願はずして女を得べし。男至誠なれば女氣を含むなど、いふ

所、畢竟一元即二性、二性即一元、開闔の理を示したるに外ならず。以て翁の男

女觀が亦固より萬物一元の原理に立てるを見るべし。

其の六

「萬物發言集」に曰く

「道」を往くも遠きに至らざれば益なし。

書を學ぶも勤め行はざれば益なし。

稻を植うるも實法らざれば益なし。

義理を悟るも行はざれば益なし。

食物あるも喰はざれば益なし。

身體あるも勤めざれば益なし。

神佛あるも信せざれば益なし。

父母あるも孝せざれば益なし。

又翁の主義が、徹頭徹尾、功利實用の上、に存するを見る。

其の七

清淨を好む者は不淨

「悟道理論草案」に曰く

『美服美食其の外美麗、總じて清淨を好む者は、身體清からず、不淨多く、胸中  
心意暗き故なり。草木或は諸作物、不淨の肥しを好むものは、身體心意清淨  
なる故なり。』

貧富の環

清淨極まれば不淨に歸り、不淨極まれば清淨に歸る。

極貧なるときは勤心發して、終に富貴に至る。極富なるときは驕奢發して  
終に貧賤に歸る。清穢貧富變化して止まず、然りと雖も外轉することなし』

青芋の譬

「報徳積善談」に曰く、  
「茲に青芋あり、之を喰ふ者、皆其の美にして疵なきを選ぶ。而して其の青芋  
が、美にして疵なき所以の原を案ずるに、是曩に畑に在りしとき風雨を厭  
ひ大暑を凌ぎ、生育して、晝夜精力を運び、實法熟せし陰徳に因る。是即ち天  
道自然なり。徳の棄つべからざることを此くの如し。能々此の理を明辨して、  
眼前の幸を得る者は、其の徳に報ずべく、又後の幸を願ふ者は、彌々相勵み勤  
行すべきことなり」

吉凶助成哀悦下案

「吉凶助成哀悦下案」に曰く、  
『都鄙在町何方にても、彼に安産ある時、是より家内一同参り、厚く世話し、出  
生の歡を同じうすれば、是に安産あるとき、果して彼より家内一同参り、厚  
く世話し、出生の歡を同じうすること疑なし。右同斷の節、是より一人往け  
ば、彼よりも亦一人來る。往かざれば來らず。是即ち天道の自然。壽けば生え  
植うれば育つ神國の大道、いつの昔より今日唯今に至るまで、年々歳々暫  
も止むことなし』云々

同哀同悦

右何れも不止不轉、因果循環の原理を應用す。

抑、報徳の樂地は自利利他の一致に在り。故に原則として利他なき自利は取らず。又自利なき利他をも取らず。佛經にも、既に世尊の自利徳滿を讚し、次に佛の利他徳圓を讚すべし等の語あり。畢竟するに亦同意なり。翁は乃ち此の理趣を論さんが爲に特に「報徳安樂談」の一書を著したるが、其の中に芋大根蕪等に例を取りて、自利利他の一致が安樂國を現出するの次第を述べたり。其の一例要旨左の如し。

『古天地開闢して、萬物未だ循環せざるとき、好き傳手を以て、村中にこれ無き芋種を求め、蒔き植ゑ、追々成長し、實法熟し、秘藏したるに、垣の外より窺ひ見て、童子は勿論大人に至るまでこれを艶羨し、各自家にこれ無きを憂へて、終に欲心生じ、奪はんと欲するとき、嚴しく制すれば王法を恐れて慎み居ると雖も、童心の淺ましき、折にふれ時に乘じ、野心を發し、奪へば刑せざるを得ず、誠に氣の毒の事共なり。其の人情を察し、自己の丹誠を積んで

自利利他  
安樂國

餘分に植附け、實法熟せば其の實法を譲り施し、蒔植ゑさすべしと申し論せば、童子は勿論其の父母兄弟に至るまで、忽ち欲心を變じて善心を生ず。斯く誠實を以て恵み施すときは、幼童野人と雖も其の恩澤に感じ、終に何等か徳を以て報ゆるに至る。是即ち日月の照らす所、風雨の循環する所、制せずして境界正しく、法令行はれ、一村一家の如く、内外睦じく、生々世々安樂國に疑なし。佛に願以此功德、平等施一切、同發菩提心、往生安樂國。といふもの是なり』

即ち報徳の安樂國は、自利利他の一致に在り、自利利他の一致は、推譲にあり、推譲は勤勉、誠實、分度等より生ず。何となれば勤勉にあらざれば物生せず、誠實にあらざれば譲るの意なし、分度にあらざれば餘力を得ず、物生せず譲るの意なく、餘力を得ざれば、推譲の行なし、推譲の行なければ自利利他の一致なし。自利利他の一致なければ、人々互に利を争ひ、終に奪はざれば飽かざるに至り、國家安樂なるを得ざればなり。一話簡單なりと雖も、其の理亦深しと謂ふべし。

其の九

順序の教

翁は又「勤農自然談」「産業自然談」「身命保養自然談」「二鍬耕耘談」其の他此の類の諸著に於て、事物の順序を説くこと、頗る懇切なり。其の意に謂へらく  
 『一、道を行く者は百里千里も一歩づゝ歩むべし。一時に二歩を踏む能はず。  
 二、呼吸するものは必ず一呼一吸すべし。一時に二呼三吸する能はず。  
 三、耕す者は千百町の田畠も、一鍬づゝ耕すべし。一時に數鍬を耕す能はず。  
 四、刈る者は一株づゝ刈るべし。一時に數株を刈る能はず。  
 五、米を得んと欲せば米を作るべし。米を作るに時あり、法あり。春蒔きて秋熟し、收穫穀米となすに至るまで、其の事や多端なり。然れども是即ち米を得るの正道にして、若し之を迂遠なりといはゞ、世に米を作るの道なし』云々。

要するに萬事萬物皆一定の順序あり。之を超越して行ふこと能はず。是天理の自然なりといふなり。而して其の原理は、亦皆不止不轉より發せり。

一八 原理の道歌

翁の道歌は主として其の著「三才獨樂集」に在り。生前よりして多く世に傳へられ、特に近年に至りては、尊親氏其の他の之に關する著書も出でたる程なれば、茲には之を詳説せず。唯其の原理に關するもの若干を翁の遺書中より抄録す。但し其の題目は、當初より命じたるを取れるものあり、其の意味に依りて新に配合したるものあり。

物心一元

體と氣は曇れば影のうつるらん

くもらぬ影はなきやありやは

天地開闢

古は草木も人もなかりけり

高天原に神座しつゝ

此の歌亦萬物一元にも通せざるにあらず。然れども、古は天地も人もなかりけり高御座にぞ神座しつゝとせば更に適切なるべし。

萬物發生

天地の和して一輪福壽草

咲くやこの花幾世ふるとも

不生不滅

今日今日を暮るゝと知らで眠る身は

あくる日毎に樂しかりける

生滅は打てば響くの音ならん

打たねば音のありやなしやは

いさしにと世のはかなさをよく見れば

氷と水と名のみかはりて

春は花秋は紅葉とゆめうつゝ

ねてもさめても有明の月

不増不減

増減は器傾く水と見よ

あちらまさればこちらへるなり

不止不轉

秋冬も夏も草木も宿ならで

生じて滅す旅宿なりけり

春の野に芽立つ草木をよく見れば

さりぬる秋にみゆるたねく

米蒔けば米草はえて米の花

さきつゝ米のみゆる世の中

さけばちる散ればまた咲く年毎に

詠めつさせぬ花のいろく

壽命無量

壽と我は水と魚とに異ならず

壽命は水よ我は魚なり

善惡の標準

見渡せば善きも悪しきもなかりけり

おのれくが住所にぞある

徳の本

孝行は誰知らずともおのづから

四方の國々みなよくすらむ

經濟の始

我といふ其の源を尋ねれば

喰ふと衣るとの二つなりけり

報徳

天地と君と親との恵にて

身をやすらはむ徳を報えや

受け得たる徳をおのく譲りなば

四海のあひだ父子のしたしみ

### 一九 報徳教の根據

以上各章述べたる所之を綜合して再說せんに、抑々報徳教の原理の根據は所謂一は萬物の始なる俚諺より悟入せられたる萬物一元論に在り。萬物一元なるが故に、神物も亦一元なり。神物一元なるが故に、宇宙汎神なり。宇宙汎神なるが故に、不生不滅、不増不減、不止不轉なり。不生不滅、不増不減、不止不轉なるが故に、一定の理法の下に、因果循環す。此の理法を名づけて、自然といひ、天理といふ。此の天理の中に人間は發生す。故に天理に順はざるを得ず。然れども人間は自己の利不利を辨別し、連續的に考察的に、不利を避け、利に就く能力を有す。此の能力に依つて、其の不利を除き、利を取るの方法を組織したるもの之を名づけて、人道といふ。故に天理は自然其の儘なり。人道は此の自然を全部其の儘には作用せしめず、或部分を屈折せしめ、間接に作用せしめて、以て知力の及ぶ限り、人間に最良の結果を齎さんとす。人道斯くの如くにして成る而して、善惡是に依つて生じ、貴賤賢愚も是に依つて分る。則ち

天理

人道



眞樂の淨  
一元神の  
祝詞

凡そ人道の批判は、人間共通の利益を標準とし、是に依據して爲されざるべからず。尙人間共通の利益は、之を一切生類に及ぼし、更に一切生類の利益は、之を天地萬物に及ぼさざるべからず。天地萬物相互に利益す、之を一元に歸るといふ。一元に歸るの術、即ち報徳の道、是にして、萬物共贊和均するは、即ち眞樂の淨土なり。之を報徳哲學より見たる、天理、人道の極致とす。

著者が平昔信仰する一元神敬禮の祝詞私案に曰く

「天地に神留まり座す神は天地の靈なり。萬の物は心にして、萬の心は物なり。物と心と共に靈にして、靈は即ち神なり。神は萬の物と心との元なるが故に、元つ大神と名づけ奉る。夫れ神の道は誠を旨とす。誠至れば天地神なり。神なれば天地の事透らざる所なく、知らざる所なく、成らざる所なし。此の故に一たび神の道に歸りて、誠を致さば、思ふ所思ふに任せ、爲す所、爲すに任せ、身と心と常へに神の御許に安けく在らむ。實に天地の元つ大神の限りなく極まりなき御稜威は、斯くの如しと、畏み畏みも白す」

天地は皆神なれば我も神

神の心を守らであらめや

右は固より餘事ながら、餘りに翁の一元論と偶合したるものなるを以て、敢て解釋上の一参考に供するのみ。即ち萬物に誠を致すは、其の儘報徳の道にして、誠を致して神と同化するは、即ち眞樂の境なりとす。

## 二〇 報徳教の神

世界神國  
不動と病  
神

報徳教の神が何なるかは、前章の記述にて明なりと雖も、猶聊辯明せざるべからざるものあり。外ならず、二宮翁が生前に於て崇敬したる神佛の事是なり。抑、翁は其の議論に於て「神人究竟不二一物」といひ「體氣元を悟れば一元に歸す」といひ「天地開闢の初、草木生物未だ發生せざるとき、高天原に神のみ在り、神代神國とは是なるべし。獨り日本のみならず、世界萬國皆神國なり」と喝破したる等より見れば、無論明白なる汎神論なり。既に宇宙汎神なり、萬物皆神なりとすれば、神を拜せんとせば拜するに違あるべからず。拜せざらんとせば一神をも拜すべからず。我も神なり、狗兒も神なり、糞土も神な

神佛の擁護

り、珠玉も神なり、自他貴賤皆神ならば、則ち何をか之を拜し、何をか之を拜せざらん、終に禮拜の途なかるべく、若し之あらば恐らく一種奇妙なるものならざるべからず。然るに翁が神佛を禮せしこと、毫も世俗に異ならず。或は成田に斷食をなし、或は相摸の痲病神に祈り、神社佛閣歳時の祭祀、意を盡して之を奉じ、定時臨時の寄附供養、率先して之を獻じ、其の仕法を行ふの地、村内安全の爲なりとて、先づ神佛の詞堂を修む。曰く「諸災の降伏は神佛の擁護に在り、神佛の擁護なければ諸災降伏せず」と。猶恩田木工が、不信心なれば苦難多きものなりとて、常に神佛を祭りたるが如し。是果して何の理に由りしぞ。一事も不用意に看過せざる翁の事なれば、必ずや一定の理由を有したるべし。唯其の特に此の一事を、説明したるを聞かざるのみなり。

今翁が平素の言論行爲に依りて、其の意の所在を忖度するに、翁が世俗の神佛をば、世俗と齊しく禮拜せしは、汎神論者として、不適當不理論なる行爲にあらず。翻つて汎神論者なるが故に、其の當然の結果として、斯くの如く爲し、なり。何となれば所謂世俗の神佛は、即ち汎神論の所産なる神佛にして、

理想の人  
格化  
本地垂迹

汎神論の所産なる神佛は、獨り神佛其の物が神佛なるにあらず。唯汎神の或る代表として、信仰崇敬の標的たるのみものなればなり。故に翁は先づ天祖天神の代表として、天照皇大神を拜し奉り、郷村開發者の代表として、産土神を敬し、精神一到の標的として、觀音不動を禮したり。若夫天地萬物の徳を報ずるの事に至りて、一元萬神、心に在り。別に禮拜の形式を要せざるなり。故に翁は、世の普通の信心者の如く、朝暮一定の神拜をなすことなかりしといふ。

抑、神儒佛老等、東洋汎神教の神は、一見幼稚に似たりと雖も、元至理深意ありて存せり。畢竟天地萬物の功徳を知らしめ、人をして恭謙讓を以て居り、和樂共存せしめんが爲に、自然力の著大なるものに就きて、代表標的を設けたるのみ、換言すれば理想を假に人格化したるものに外ならざるなり。されば彼の、本地垂迹説の如きも、事實は淺薄なる捏造説ながら、理論に於ては必ずしも不合理にあらず。佛氏の理想を本地とし、日本の人格化されたる神を、垂迹とするものなるが故に、順序に於ては不可なきなり。其の他諸神亦皆類

推すべし。然るに西人口を開けば、輒ち汎神教を罵りて偶像教とし、幼稚蒙昧のものとなす。是其の事を見て未だ其の理を究めざるに坐するのみ。乃至宗派的偏見なり。

禮拜は各  
自の任意

報徳教より見たる神は前述の如し。而して其の禮拜の形式は、本書巻頭にも斷りたるが如く、斯教は宗教にあらず、哲學なるが故に、自ら之を固有せず。一に通俗の習慣に従ふ。單り然るのみならず、其の禮拜すると禮拜せざると亦各自の任意とす。單り然るのみならず、其の何の宗教を信ずると、信せざると、亦復各自の任意とす。要は唯人をして天地萬物の徳を報せしむれば足る。天地萬物の徳を報ずるの途、天地萬物を敬するに在り。天地萬物を敬するの途、他なし。心力の及ぶ限りに於て、天地萬物一切を、最善最良に利用するに在るのみ。斯くの如くにして天地位し、萬物各其の所を得、之を報徳教の眞樂境とす。

報徳教に、著者が私に選びたる三大特色あり。(1)天理人道の區別(2)善利の一致(3)獨立自助の道德即ち是なり。曩に之を「報徳教要領」の中に略説して要

報徳教の  
三大特色

旨備はれり。讀者若し彼の趣旨に依り、本書各章の材料を取って、更に參酌配合せられば、則ち益々其の特色を發揮せしむるに足るものあらん。

## 第二篇 報徳の仕法

### 一 仕法の名稱

御趣法  
報徳役所

報徳仕法の名稱は、亦天保以後に生まれり。元來は荒地起返人別増難村取直し舊復の御趣法、或は御主法、御仕法等と稱せしが、天保の初めまでに報徳の語定まり、同九年小田原藩に於て臨時仕法の官衙を特設して、報徳役所と號したることあり。旁々にて、いつとなく翁が拓地殖民衰邑興復策をば、報徳の仕法と呼び習はしたるものゝ如し。但し小田原を除きては、公文にては之を稱せず、依然前揚の通り、何々の御仕法と號し、或は單に仕法と呼び居たり。今此の書、便宜に依つて報徳仕法の名稱を用ゐ、而して翁が創業施行したる、前記拓地殖民衰邑興復の方法、及び個人の家道回復の方法等を意味せしむ。

### 二 仕法の由來

翁の自叙

仕法の由來については翁曰く「其の發端私儀五歳の時、寛政三亥年大洪水の砌、田畑残らず押流し、或は瀬となり、淵となり、又は土石捲上げ高臺となり、五穀熟せず、私共養育の爲、辛苦艱難を盡せし父母の丹誠、自然と骨髓に徹し、如何してか口腹を養ひ、如何してか貧窮を免れ、父母の意を安んせんと相營み罷在候處、十二歳の時より父大病相煩ひ、十四歳の時遂に相果て、猶又十六歳の時、母大病を相煩ひ、相果て、據ろなく親類の助成に預り、生長仕候間、初は荒地を開き、田畑を耕し、夫食を求め、口腹を養はんと欲し、或は衣服を求め、寒暑を凌がんと欲し、或は父母の丹誠を盡せし大恩を報せんと欲し、或は兄弟を養育せんと欲し、或は親類縁者の助成に預り候恩義を報せんと欲し、或は妻子を養はんと欲し、或は朋友の貧苦を餘荷はんと欲し、或は吾が如き極難困窮、暮方便り少き者を恵まんと欲し、或は田畑山林家株増益して富貴を求め、渡世安樂に至らんことを欲し、或は祖先の家名、子孫永々相續致さんことを一途に存じ込み罷在候處、去る文政元寅年、故大久保加賀守殿歸國の砌、領内の衰弊深く歎息致され、格別の配慮を以て、左に朱書の通り、産業勤勉生計

儉素風俗改良の告諭書なり略す右之條々一同へ申し諭され猶又私儀朱書之通篤行褒賞直に申し渡され候。如斯御用繁の中心痛在らせられ候段、彌以て有り難く、勤仕罷在候處、文政四巳年宇津飢之助殿知行所、野州芳賀郡眞岡郷、高四千石餘の所、連々人少困窮いたし、既に退轉亡所同様罷成り、取直し方數年手を盡し、術計盡き果て、餘儀なく本家引受け、年來厚く世話有之候得共、立ち直り兼ね、家數人別收納等次第に相減じ、荒地開發村柄取直仕法、入用勤番手當にも引足り申さず、其の上勤め方、家中扶助等に至るまで、年々助成致され候儀、際限これなく、詰り勝手向にも相響き、何分捨置かれ難く候間、荒地開發入百姓人、別増舊復の仕法執行ひ、收納古復致させ候外、これ無き趣を以て、村柄取直し荒地見分申付けられ候へ共、全く身分を立越え、容易ならざる大業に付き、達て辭退仕候處、別段深き次第を以て、再應申附けられ、餘儀なく罷越し、村柄の模様見聞に及び候處、田畑の釣合は申分も御座なく候へども、元野原に用水を引入れ開發致候土地にも候哉、少し上土を除けば赤岩となり、地味潤ひ少く、諸作物の殻細く、丈短く、穂先揃はず、土性黒く灰の如く、浮立

ち締りなく、潤少き故哉、草の生立薄く、一度刈取候場所は、再發致し難く相見え候に付、荒地起返し候とも、熟作仕るべきや、仕る間敷哉の段、何分見留御座なく、假令熟作仕候とも、漸露命を繋ぎ候迄にて、年貢諸役高掛り等、出來申すべきや、詰り行届き申す間敷哉之段、猶以て相分り難く、術計盡き果て、十方に暮れ罷在候折柄、近郷近村御料私領の風評承り候處、難村之模様、大抵高千石にて米五百俵位、其の以下、夫れ連も救ひ用捨等の助成を以て、相續罷在候様子連も多分の入用相掛候とも、成就不成就之見留めは勿論、何一つ目當御座なく候に付、種々様々談判仕り、是非なく過去り候有形取調べ、土臺と仕候外、御座有る間敷候に付、去る文化九申年より、文政四巳年迄、凡そ十箇年、米永小物成とも微細に取調べ、平均致し、天命自然の分度を探り、上下過不及これ無き様、疋と規則を相定め置き、夫より一畝づゝも開發相始め、時仕付け熟作の次第、其の實法の潤澤を以て、年々繰返し起立て申し候は、假令壹畝壹歩づゝ出來候とも、荒地は荒地より生じ候潤ひを以て起返り、米金入用の出方にも、一切相拘はり申さず、開闢より今日に至る迄、相開け候同様、天理自然に相

當り、御爲筋御國益の第一と存じ奉り候次第申述べ候處、逸々感服致され、見込に任せ、荒地開發入百姓人別増窮民撫育借財返濟暮方取直し舊復の仕法、存分取計ふべき旨申付けられ、同五年云々〔天保十四年上申書〕即ち報徳の仕法は文政五年櫻町に濫觴し、而して其の方法は、翁が幼年より艱難苦勞し、廢地に捨苗を植ゑて米一俵餘を穫、漸次増殖して一家を再興したるの事實と、日本建國以來、國土開發の道理とに基づき、工夫考案せられたるものなり。さて此の創業地に於て、豫期の通りに成功せしかば、忽ち近隣の諸邑に及び、終に野、常、奥、甲、越、武、相、豆、駿、遠、江等總じては二十九萬石餘の地に、點々實施せらるゝに至れるなりけり。以下請ふ仕法の準備實行及び其の結果につきて、仔細に研究講述せん。

### 三 仕法の調査(準備一)

凡そ仕法を施さんとするには、先づ精密なる調査をなすを要す。其の調査は過去現在の調査にして、即ち據つて將來の計畫を立つるの基礎なり。此の

基礎鞏固ならざれば、如何なる良法名策も、勞多くして功少く、終に水泡に歸するを免れず。是を以て、翁が櫻町の經營を始めんとするや、宇津家は勿論小田原藩廳に照會して、あらゆる關係書類を蒐め、又實地に就き、古老に質し、凡そ三村に關する知識の得らるゝ限りを極めたり。即ち遠きは宇津氏以前、寛永の昔より、近くは文化文政の現時に至るまで、法令、制度、社寺の緣起、人民の風俗、村治の變遷、人口、戸數、耕地、反別、貢租の増減、公私の盛衰、及び宇津氏の系譜、官職、生活状態までを網羅し、宇津家は元祿十年、大久保氏より分る。蓋し徳川氏の初め、三河國の住人大久保加賀守忠常あり。家康の外孫奥平氏を娶り、忠職を生む。忠職の養嗣子忠朝、唐津八萬三千石を襲ひ、後下總佐倉に轉じ、更に貞享三年小田原に移る。忠朝元祿十年十月隱居するに臨み、嫡子忠増に小田原を嗣がしめ、次男大久保長門守教寛に六千石を、三男宇津出雲守教信に四千石を與へて分知せしむ。當主胤之助、教成は即ち教信五世の後にして、官班は寄合衆なり。三村の過去現在を、一目の下に瞭然たらしめ、胸裏に歴然たらしめんと努めたり。

又相馬家の如きは、遠く鎌倉時代よりの歴史を考へ、既往百八十年間の帳簿を検して、其の土地人民の實力を量り、彼の爲政鑑を編述し、又日光の如きは、實施受命の即時より、淨土院の慈隆和尚に囑して、先づ大體を内調せしめ、後自ら實地を検して、八十九箇村各村別に、人口、戸數、反別等の調査書を作り、其の他、青木、辻、門井、下館、谷田部、鳥山、小田原、棹ヶ島等の各地、皆略ぼ同様の調査をなし、なり。

凡そ事實行に先だつて、調査考慮を要するは勿論なりと雖も、翁が仕法を施すに方りては、『是非共始に終を盡し置き申度』との趣意にて、最も力を調査に用ゐたり。

#### 四 分度の設定(準備二)

仕法に就いて過去現在を調査するの目的、二あり。一は分度を定むる爲なり。二は豫定計畫を立つる爲なり。分度は即ち入るを量つて出づるを制する所以なり。豫定計畫は出づるを量つて入るを増加する所以なり。分度無ければ

ば仕法無し。分度は根據なり。豫定計畫は結果なり。推讓なり。分度に據り、至誠勤勞を以て豫定計畫を行ふ。是報徳仕法の本領なりとす。今翁が分度を設定したる數例を説かん。

翁は先づ櫻町の過去現在を調査して、二個の限度を定めたり。一は現在の土地生産力にして、取つて之を分度とす。他は過去現在長年期を通じたる土地生産力にして、取つて豫定計畫の最高限度(後に出だす)となせるもの即ち是なり。現在の土地生産力は、最近十年を平均したるものにて左の如し(實は租稅負擔力なれども、便宜に依り、土地生産力と假稱す)

年	米	金
文化九壬申	一、一一二	一六四
同 十癸酉	一、〇三二	一二八
同 十一甲戌	七八七	一二八
同 十二乙亥	八三九	一二八

櫻町三村貢租調 米ハ俵以下四拾五入 金ハ兩以下四拾五入

同十三丙子 八六一 一二八  
 同十四丁丑 八九一 一二八  
 文政元戊寅 九五〇 一二八  
 同二己卯 一〇四七 一二八  
 同三庚辰 一一〇一 一一八  
 同四辛巳 一〇〇六 一一一

是即ち三村が現狀に於て負擔し得べき限度なり。依つて此の平均額を以て分度と定め、此の以上荒地開發、土地改良、耕作改良、勤勉等に依りて生ずる産額は、例へば土中に埋没したるを、新に掘出だすが如きものにて、領主の歳入に關係なきものなるを以て、之を擧げて分度外とし、仕法期限の十箇年間

他に支出上納せず、悉く之を開發増殖、貧民撫恤、事業擴張に用ゐんと請願したるは、即ち仕法開始の前、文政五年の正月なりき。然るに小田原藩廳にては一箇年餘疑議の末、翌文政六年三月に至りて、右其のまゝには採用せず、平均よりは頗る高額なる、最近年度即ち文政四年の實收米と平均以上の金納とを取つて分度とし

米 千五俵餘 田方  
 金 百貳拾七兩三分餘 畑方  
 大豆石代金並夫中間

を納むべき旨を命令し、但し格別凶年の年柄は、上納制外なりと約したるが、期限中、稍凶年ありしも、此の制外の約を履行せず、益、翁を窘しめたり。

相馬の仕法は、規模も大なり。永遠の覺悟を以て着手せしものなるを以て、其の調査も精密なり。既往百八十年間の盛衰に鑑みて、分度を定め、猶之を數段に分ちて、豫定計畫の成功に伴ひ、十年毎に進轉する方法となしたり。其



日光

他の諸藩諸邑概ね十年の平均に依りて、分度を定めたるが、獨り日光神領は所謂永定免にて貢租の伸縮なく、且つ領主は頗る富裕なる日光神社なり。領民亦久しく輕税に狎れ居り、他の私領等とは全く事情を異にせるを以て、収入平均の方法を用ゐず、現状其のまゝを以て分度とし、唯専ら積極的に荒地開發、土地改良の事業を實施したり。又小田原にては藩の分度立たず、仕法は、人民の歎願に依りて、餘儀なく變則的に行はれたり。故に實施の村々にては、其の年數に應じて、相當の利益を得たりと雖も、藩に於ては未だ著しき効果を見ず、中道にして全廢されたり。

小田原

個人

個人に分度は収入の半額を以てするを原則となしたり。個人と公共團體とは、其の収入の性質及び其の他の事情を異にすればなるべし。然れども、原則は唯原則にして、例外の場合少らず。殊に甚しき衰貧の救済、負債の償却等に際しては、収入を倍するも猶且つ足らず。いかで半減の餘地あらんや。故に此の場合には、資金を助貸して負債を償はしめ、乃至生産の途を開かしめ、或は経費を補給してまでも、一應の維持存續を圖り、漸次生産を増し、支出を減

其の一例

じて、終に負債を皆済し、家計餘裕を生ずるに至らしむ。則ち此の場合の分度は、生活の可能點が即ち其にして、生活の可能點は、即ち経費の最低限度なり。而して、其の収入と之を對照して、餘あれば之を負債償却、生産増加に用ゐ、足らざれば一時之を補給し、生産力を助長することなり。今一例を設けて之を設かんに、茲に一家あり、

収入	小作田三町步純益
支出	家族六人經費
一、金三拾兩	負債百兩の利子
二、金三拾兩	但年二割
三、金貳拾兩	

なりとすれば、此の家は既に滅亡の危機に在り。否な無財産、無餘裕にして、二割百兩の負債ある以上は、到底滅亡を免るべからざるなり。然るに報徳の仕法に依れば、猶容易に救はるゝを得べし。先づ其の輕費を審査せば、其の身體

の營養を妨げず、被服嗜好品、住居器具の省略、及び萬事の注意に依りて、少くとも經費一割減の餘地を見出だすを得ん。差引二十七兩なり。之を當家の分度と定む。扱勤勞を増加して索綯、日雇、其の他の副業を勉めば、恐らく一割の生産額を加ふるを得ん。則ち生産の増加三兩。經費の節減三兩。都合一箇年六兩の分度外は以て負債を償ふを得るの額なり。然れども、現在の負債は有利息にして年二十兩の利子を要すれば、到底是に對すべきにあらず。年々拾四兩づゝの不足は、利に利を生じ、元に利を生じて、忽ち巨額に至るべく、等しく滅亡を免れざるなり。是に於てか報徳金あり。之を無利息十箇年賦、五箇年据置にて助貸し、猶彼の分度外金六兩を、年一割にて預れば、此の第一年が元金六兩。第二年が元利十三兩二分。第三年が同二十兩三分三朱。第四年が同二十八兩一分一朱。第五年が同三十六兩三分一朱となり、六年目より右分度外六兩に、右の蓄積金四兩を足して年賦を納むれば、七年目には蓄積金差引三十二兩三分一朱に、利子三兩三朱餘を生じて、都合三十六兩餘となり、以て殘る九箇年間、毎年四兩づゝを補足し、猶若干の利子剩餘を得、前後通計十五箇年

の後は、大借一變して無借となり、優に一箇年の冥加金を納めて、以後漸次資金を作り得るに至るなり。此の他、翁が實行したるは、負債償却資金と同時に開墾資金を助貸したるものあり。農具、種穀、肥料、家、小屋を助貸或は給與したるものあり。事例頗る繁多なりと雖も、之を要するに、其の家、其の邑、其の藩の分度を定むるを根本としたるは一なり。

方今世俗驕奢に流れて、個人と公共團體とを問はず、収入の實力を熟察せず、有るに任せて之を用ひ、入るに任せて之を取り、愈、取りて愈、足らず。負債を以て經常費を補足するものあるに至る。經濟界の事情、社會の狀態、今昔一變したりと雖も、分度無き生計の危険なることは相同じ。今の公人、及び私人、請ふ此の點に就き三思せよ。

### 五 豫定計畫(準備三)

二宮翁と長期計畫と  
近來世間、十年計畫、二十年計畫等の事、流行するが、二宮翁は此の長期計畫の名人にして、毎に十年計畫、二十年計畫、乃至六十年計畫、百八十年計畫等を

長瀬村  
二五五

試みたり。今櫻町の仕法に就いて案ずるに、先づ此の豫定計畫の限度、即ち前  
に所謂生産力の最高限度を定むること、左の如し。

三村貢租限度調

一米三千百十六俵三斗四升六合二勺 田方本免

寛文檢地後、元祿十二拜領より、享保度に至る迄、一年貢米實收高、即ち

昔時三村が繁榮せし時代の實力なり。

一米九百六十二俵二斗五升五合八勺 同

櫻町の生  
産限度

文化九年より文政四年に至る、最近十年間、平均實收高、即ち現時の實

計米四千七十九俵二斗三升二合

此平均二千三十九俵三斗一合

是古今盛衰兩極の實力を平均したるもの、即ち中庸の度なり、而して

之を古の盛時に比すれば、千七十七俵餘を減じ、又今の衰時に比すれ

ば、同じく千七十七俵餘を増せり

一金二百二兩一分二朱餘 畑方小物成

右同斷古盛時の實收。

一金百三十兩二分餘 同

右同斷今衰時の實收。

計金三百三十二兩二分二朱餘

此平均百六十六兩一分二朱餘、之を盛時に對すれば、三十五兩三分二朱

餘を減じ、之を衰時に比すれば、同額を増す、即ち兩極の中庸にして、平易

安全の度なり。

翁翁謂へらく、古の收入は民力に過ぎたり、故に戸口減少して衰廢せり、今の

收入は民力を盡さず、故に増益の餘裕ありと、又謂へらく、盛時と衰時との差

額、即ち米二千百五十四俵餘、金七十一兩は土中に埋没しあるものにて、全く

公私の損失なれば、今之を發するときは、則ち其の半額、米千七十七俵、金三十

五兩は、領主の利となり、殘る半額、米千七十七俵、金三十五兩は、民の利とな

と、依つて此の理を具狀して、右中庸の度を以て、仕法成功後、永久の定額とな

し、敢て増課することなく、随つて宇津家四千石の本高に對する不足は別に永久補足せられんことを請ひしに、藩廳は亦之を允許したるが、實は成功後に至つて、誠實に履行せず、更に煩累を翁に嫁したり、其は兎に角、翁は幾多の障礙の中に、豫定の期限十年内に、豫定の計畫を遂行して、豫期の効果を收むるを得たり、所謂前七年後三年の難行苦行に因れりと雖も、前掲分度と、此の豫定限度の正確なるものなければ、以て事業を行ふを得ず、以て功を保つを得ざりしなり。

然れども、此の豫定限度は、分度の如く何れの場合にも必要なるものにあらず、櫻町其の他の如く、租税回復の場合に於ては、概ね必要なりと雖も、他の商工業等計畫の場合に於ては、一萬兩の創業より、百萬兩千萬兩の大に擴張するをも得べく、其の範圍廣汎なり、且つ前途自然の制限に任せて可なり、必ずしも最初より自ら限度を豫定するを要せずと雖も、租税特に地税に於ては、此の限度を豫定せざれば、忽ち耕作境界線を逸して、折角開發したる田畠も、忽ち荒蕪に歸るべし、是今日の經濟學が講明する所にして、翁は實地に工

耕作境界

夫して、此の理を看取したるものなり。

さて此の仕法の目的、及び限度は、現今歲入米千五俵金百三十兩餘の所を、十箇年間に開發して、米二千三十九俵餘、金百六十六兩餘に増加せしむるに在り、即ち一箇年に米百俵餘、金十六兩餘を累加增收するを要す、而して之を産出する方法は、

- 一、荒田起返しの所、自然に水路塞がり、畑作實收兼ね、難澁致し居る場所、取直方、願出次第地の利に就き、或は切上げ、切下げ、又は水引吐出し、置地下
  - 一、普請即ち土地改良の事。
  - 一、林、畑、秣野、濕地となり、草木立兼ね、難澁致し居る場所同上。
  - 一、反取見取畑同上。
  - 一、高外永荒の空地、並に寄洲、附洲、古川敷等の廢地起返方、願出次第同上、即ち新地開發の事。
- を行ひ、租税は既定定免の外、之を賦課せず、多少の冥加米を納めたる分は、之を次年の開墾費に充つることにて、斯くて年々繰返せば、其の面積は、求數率

百發百中  
困難と思  
ふは誤解

(此の求數率の詳細は後章日光仕法に出だす)を以て擴張せられ、其の實行をだに誤らざらば、豫定の時期に、豫定の結果を收め得るなり。櫻町にては上下の障礙多く、六七年を徒勞に經過し、豫定計畫は破られたれども、最後三年の大努力に依つて、兎も角も一應成功するを得たり。後に追々説くが如く、仕法の要件だに具足して實行せられんか、此の計畫が百發百中、容易に成功すべしや、勿論なり。世人櫻町仕法の困難彼の如くなりしを見て、仕法其の物の困難と誤解する勿れ。

## 六 地區の選定(準備四)

仕法の地域廣大にして同時に實施するを得ざるときは、其の年々の實施力の範圍に於て、實施の地區を定むるなり。櫻町は同時に三村に實施せしを以て、此の手續を要せざりしが、諸藩に於ては皆之を要したり。而して此の場合に於て、實施を請願する村數が過多なるときは、其の同列の村々にて、互選若くば抽籤せしめ、或は當局者の認定に依りたり。認定に依るは最初の發業

札認定と入

地にして、他の模範となすものなれば、第一、成功し易きの所、第二、人民の熱誠最も顯著なる所を選びたり。相馬領にて、最難村なる草野村の請願を斥け、成田坪田を先にせしが如き、小田原領にて、先づ曾比竹松に實施せしが如き、即ち是なり。又互選抽籤に依るは、無論私意を以て取捨せず、選擇の公平を期するが爲なり。左に相馬に於ける入札の一例を示す。

例入札の一

郷中村々仕法發業先進原簿入札之事

宇多郡 岩子村富澤村以下列記

九箇村

北標葉郡 四箇村

中ノ郷 二箇村

北郷 小高郷各一箇村

惣合十七箇村

右は今般格別の御仁恵を以て、御領中用惡水道橋普請は、勿論、荒地起返し、無盡の米麥雜穀取増し、其の潤澤を以て、別紙雛形の通り年々繰返し、夫食

種穀農具肥し代、其外借財返濟窮民撫育、潰百姓取立、并に家小屋普請、難村  
舊復の仕法仰せ出され候御趣意を慕ひ、郷々十七箇村、一同農間を見合は  
せ、朝暮勤勵致し、日掛繩索積立て、御取直し御仕法一時に願出で候に付、御  
土臺金に差加へ、發業致すべきの處、いづれを先、何れを後と、取行ひ申すべ  
き見留治定致しがたく候に付、銘々承知致し居候仕方諸郷村々申し諭し  
置き候通り、兼々本業出精いたし心掛宜しく、内外睦まじく、前後の手本に  
も相成り申すべき村方を見立て、少しも依怙最良なく、入札申し付け、高札  
の村方より、一村づつ、發業致し、猶又右同斷、猶又右同斷、猶又右同斷、取行ひ、  
其の次は宇多郷四箇村、北標葉郷四箇村と相成候節は、出精村一番二番と  
相認め、封印致し、圖取申し付け、一番の組へ發業致し、其の次は二番の組へ  
右同斷以下斯くの如く順次抽籤せしむ終りに宇多郷一村、北標葉郷一村、  
田中郷一村、北郷一村、小高郷一村、一三三四五番と相認め、封印致し、圖取申  
置し付け、一番より右同斷、少しも先進甲乙なく、天命自然の自力に任せ、郷々  
取残らず成就致し候上は、銘々丹精を盡し、日掛繩積立て候段、奇特に付、御賞

事美として其の一倍御下げ被下置候間、彌相勵み、急度御趣意を押立て申べ  
事候、此段申進候。以上。  
嘉永五壬子年十一月  
前條御領中諸郷村々、一同誠意を盡し、御取直しの御仕法、一時に歎願申立  
置て候處、何れを先と發業仕るべき旨御問合はせに付、則ち取調べ差上候得  
共、若し御差支之廉も有之候は、幾度も取調べ、相改め、組替へ差上可申候  
間、其段御國元へ仰せ遣はされ下され候様、偏に奉願上候。以上。  
壬子十一月二十三日  
池田圖書様 熊川左衛門様 二宮金次郎  
七 仕法の資金(準備五)  
報徳の仕法亦固より資金を要す。此の資金は、當時仕法金、土臺金、報徳金等  
と稱したり。予初め報徳記を讀みて、翁が櫻町の仕法には、全く資金を他に仰  
がざりしものと信じて、深く感歎ありしに、後翁が先主を祭るの文中、公又

歳給粟二百苞金五拾兩、充經營之費、臣亦傾私帑補之とあるを見て、迷ひを生じ、是或は仕法經營の費にあらず、陣屋の應費にてはあらざりしかと疑ひ、之を尊親氏に質して、果して應費なりしとの答を得、安心せしが、後更に翁の遺書を檢して、愈、其の真相を審にし、報徳の仕法が、何處何處までも、自力本位、荒蕪の力を以て荒蕪を開く、獨立自助主義に相違なきことを確め、恰も父母の大病が、一時に全快したるかの如く、益、安堵祝着したり、何となれば若し此の獨立自助主義が、除却或は損失されんか、我が二宮翁は、其の特色の大部分を失ひ、殆ど予等の崇敬に價せざるに至ればなり。

夫れ斯くの如く報徳の仕法は大體に於て荒蕪の力を以て荒蕪を開くを原則とす。然れども其の最初の開墾の費用は、荒蕪自ら之を産するを得るものにあらず、別に供給者なかるべからず。此の最初の費用が、即ち報徳仕法の資金にして、是は仕法の實施者、即ち二宮翁が供給するなり。然れば仕法の當事者は、全く獨立自助を捨て、他力に依頼するが如くなれども、左に非ず。當事者に於ては其の自力の限りを盡し、即ち藩邑は其の貢租を擧げ、領主有司

の俸養を減じて、悉く其の得たるものを提供し、個人は衣服器物を賣りても、應分の資を供給するを例としたれば、主義に於ては、亦等しく、自力本位を妨げずと謂ふべし。故に仕法の最も能く、理想的に行はれたる相馬の如きは、翁の出資もありたりと雖も、大體に於ては君臣上下、當事者の醸出を主となしたり。さて此の資金は、畢竟するに、最初第一年の種金にして、其の後は所謂荒蕪の方の、自力のみに任せ、全く出資せずして可なり。後年各地報徳支社の組織に、其の本社より種金を頒與するの例は、蓋し是等に基づきしなるべし。若し出資を繼續すれば、其だけ事業の擴張率を大にし、成功を迅速廣大ならしむ。左に櫻町仕法の資金を説明し、次に相馬其の他に及ばん。

櫻町の領主宇津敷成は、貧に迫りて罹災後の家屋をも建築する能はず、本家の中屋敷内に寓居し、費用なき爲、幕府へも出勤すること能はず、屏息中なり。采地三村は處理を本家に依託し居たる程なれば、三村の實地其の物よりは、仕法資金の出づべき見込なし。故に翁は自費を以て之に充つるの計を決し、次章栢山の報徳金、但し報徳の名稱は栢山にて既に之有りしや否や詳な

櫻町の資

らず及び田産家屋器財の賣却代金を合して、悉く之を出資したり。是ぞ資金の種子本體にして、以て櫻町三村を興し、野常の諸藩諸邑を潤し、終に小田原日光に及びたる、萬餘金の嫩葉なりける。尤も櫻町の仕法は、全く請負事業にして、收支共に翁の専權内に在り。而して此の他に翁の收受する、金穀左の如し。

翁の歳入

一高五石 此取米拾壹俵二升一合三勺

文政五年より勤番手當として。

一二人扶持 此取米九俵

右同斷。

一米五十俵

小田原引拂ひ罷越候に付手當。

應費

一米二百俵

前々仕來陣屋詰勤番諸色入用、并名主取締林守給、其外小兒養育、極難窮民撫育料共、年々相渡され候事。

一金五十兩

右同斷。

相馬の資

即ち右俸給は俸給なり。應費は應費なり。俸給は悉く自ら受用し、應費は悉く應費に用ゐるれば、一錢も仕法費に充つべきものなし。即ち翁が「此度は前段を以て、開發御入用御下金御無用に遊ばされ云々」といひしは、此の點の意味にて、翁は仕法費としては、一錢を受けず、己自ら之を出資し、更に「身分之儀は綿衣を着し、鹿飯を食ひ、其餘有合次第、御代の爲御恩澤を報じ奉り度」とて、俸給を節しては若干を得、應費を節しては若干を得、悉く之を仕法に用ゐたり。是が年々連続したると、一方仕法が進行するだけ、生産を増加するとの爲に、資本は循環又循環して、一以て二三に當り、五六に當り、終に巨萬の費用を要する三村の仕法を、僅々數百金を以て成功し得たるなり。又相馬の仕法資金は、之を道德的にいへば君臣上下一致の誠心より出で



たる、愛國的喜捨にして、之を經濟的に解釋すれば、希望利害を同じうする官民の合資と謂ふを得べし。但翁が特別善種金は格別とし、又富田、齋藤は俸祿を辭し、殊に富田は生涯一粒の祿を食まず、一官を拜せず、全く獻身的に盡瘁したる人々なれば、右經濟的解釋の利害關係を以て律すべからざるなり。出資左の如し。

其の成立

相馬仕法資金調初年の分

一金百兩

手元金下賜

先君定公特別節儉遺金の内より補助

一金二百兩 報德善種金

二宮金次郎

二宮翁報德金より廻附

一米十六俵二斗四升報德加入金 富田久助

代金八兩三分二朱餘但兩に六斗替、錢價六貫五百文、一俵三斗二升入

是は扶持米辭退預置の分

一金一分

同

同 人

是は母病氣に付歸省の折、主侯より目録恩賜辭退預置の分

一金二兩

同

同 人

同人大病の際恩賜辭退預置の分

一金一兩一分餘

同 人

亡母生前丹精して食を省き手業を盡し、貯へ置き、久助の忠孝を全うするの一助ともなさんとの赤心より、遺し與へたる形身金

一金一兩

同

齋藤久米之助 (高行)

日光仕法雛形清書の際下賜筆墨料辭退預置の分

一金一兩

同

同 人

亡祖母の形身金

一金一兩

同

紺野織衛

出府勤番中節儉貯金

一金一兩

同

齋藤三太夫(富田の實父)

御趣意に感動し、家事艱難の中、衣食を省き、所持の品賣拂差出金

一金一兩 齊藤庄八郎(富田の實兄)

一金同前

一米一俵代金一分二朱餘 同 一條七郎右衛門

一人同人分外の恩祿頂戴分

此の他家老草野半右衛門の三兩二分、同池田圖書の三兩、又富田久助の勸農掛被仰付御扶持切米役料金六兩一分餘、同人二宮先生より飲食代贈與の分三兩、同人出府旅費頂戴分より節儉の剩餘金三分二朱、高野丹一吾の役料十兩等あり、何れ一文半錢も、至誠赤心の結晶たらざるはなし。

一米二俵

一金五十三兩二分二朱餘

爲金五十五兩二分餘

一米十八俵二斗四升 村方加入米金

成田村

一金五兩二分餘

同村

一米七十俵二斗四升

坪田村

一金二十二兩二分二朱餘 同村

一米八十九俵一斗六升

爲金二十八兩二朱餘

爲金三十七兩二朱餘

是は今般格別の御仁恵を以て、荒地開發、窮民御撫育、借財返済、難村御取直復古永安の御趣法被仰出候御趣意、難有感服奉り、右御主法、御主法御土臺金へ加入願出候事

一金十二兩一分餘 成田村

一金三十兩二分餘 坪田村

爲金四十四兩餘

爲金四十四兩餘

是は云々御趣意一同奉感服繩索は勿論、種々手業相勵み、一日錢五文宛積立差出

都合米九十一俵一斗六升

金四百三十六兩二分二朱餘

内

金一兩二分餘

成田村

金一兩一分餘

坪田村

金二兩三分三朱餘錢三貫餘

爲金三兩二分餘 主法取扱諸雜費引

殘米九十一俵一斗六升

金四百三十三兩二朱餘

其の支出

是弘化二巳年十二月發業、三年十月に至る、第一年度の仕法資金なり。而して其の支出の方法は如何

本業出精人賞與

金二十七兩一分餘

成田村

金六十九兩餘

坪田村

金九十六兩一分錢四貫九百餘

爲金九十七兩餘 但銀八十八枚鎌百七十六枚

是は孝行人は勿論、兼々本業出精致し、心掛宜敷村爲にも相成候者、一村限り一同の目鑑を以て、人選入札被仰付、落札の者へ御褒美金並銀一枚鎌二枚宛被下置

極難窮民救助

米十俵一斗六升

成田村

米二十六俵八升

坪田村

是は四窮民、或は水火病難、或は無田、無祿、地借、店借、又は老人子供當時厄介多く、暮方差詰難澁の者、一村限り入札にて人選の上、救助米下賜

屋根替費給與

金七兩一分二朱餘

成田村

金十八兩二朱餘

坪田村

金二十五兩二分餘

爲金二十六兩餘 此屋根替九軒

是は前々不仕合打續き、屋根大破に及び、修覆届き兼ね、難澁の者へ、同じく入札を以て、一番札より三番札まで、全部新規屋根替費を給與し

其餘大破の分當座凌ぎの費用給與

堤普請費給與

金九兩一分餘 成田村

用水不足に付、堤一箇所再築費給與

開墾費給與

金三兩一分餘 坪田村

此田畑反別九反二十一歩

是は持高不足の者共へ、荒地起返料給與

合米三十六俵二斗四升

金百三十五兩三分二朱餘

殘米五十四俵二斗四升

金二百九十七兩一分餘

施行雜費及び諸給與を控除して、此の殘額を得、更に之を左の如く助貸す。

一 米千無利一箇年貸付

米四十四俵一斗八升餘 坪田村

一 錢十四貫九百八十八文 同

一 米四無利五箇年賦貸付

金二十兩 成田村

金五十兩錢二十貫餘 坪田村

一 金七十兩錢二十貫餘

此年賦濟方一箇年十四兩錢四貫餘

合米四十四俵餘

金七十兩錢三十四貫餘

爲金七十五兩一分二朱餘

總差引